レイモンドール綺譚外伝（終成の章）

青蛙

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

レイモンドール綺譚外伝（終成の章）

【Ｎコード】

Ｎ０６２９Ｈ

【作者名】

青蛙

【あらすじ】

レイモンドール国に戻り、王を助け、魔導師コーラルを倒したクロードはレイモンドールと決別し、ベオーク自治国を目指す。レイモンドール綺譚最終章。

旅立ちー1（前書き）

レイモンドール綺譚で明らかにされなかったクロードのその後です。
体に封印された魔経典はどうなるのか。クロードと、ラドビアスは、隠されていた謎と向き合う・・・予定です（汗

旅立ち－1

「おれはもう、ここには戻らない。戻る理由が無いからな」
「クロードさま」
口を引き結んで前を見るクロードに、ラドビアスは呼びかけたものの何も言えない。　レイモンドールに戻った時の主人はいつもの彼では無かった。
助けを請う自分の叔父であるコーラルの口に、剣をつき立てるなど。　普段の彼は、殺生をするのを忌み嫌う。

それほどまでにして、彼はベオークに行くのだ。　全てを捨て去って退路を断った横顔は、あどけないほどの少年のものなのに。

「行くぞ、ラドビアス」
「はい、クロードさま」
二人の乗った魔獣は、大きく高度を上げて大陸を目指す。
――おれは確かめたかった。　レイモンドールのボルチモア州から来た、使い魔の伝言を聞いて戻ったのはそのためだ。　そして……やはりそこに、レイモンドールにおれの居場所は無かった。　クライブは、立派な王になるだろう。　アリスローザは――。
アリスローザは、見とれるくらい綺麗な大人の女性になっていた。
おれとなんか、釣り合いのとれないほどに。　おれは、このまま歳を取らない。　おれを見る者すべての顔に、親愛の情以外のものもあると分かって。
――恐怖。そう恐怖の色だ。　そう仕向けたのは自分なのに、深く傷つく自分。　弱い心。そうやって、相手から引導を渡されないと振り切れないと思っていた。　見知った者に囲まれてぬくぬくと暮らしていたくなる自分を変えるために、わざと恐ろしい魔道師を

装って暴言を吐いた。
自分の役割は、この国を魔導師に渡す事無い国にするという事。
悪鬼のように振舞って人々の記憶に残る。　イーヴァルアイが、やったことの始末をおれがつける。　それは、おれにしか出来ないことだから。
それなのに、帰って来いとクライブは言ってくれて。　おれが必要だともう一度。　それだけで、その言葉を宝物にしておれは生きていく。　そして、前を向いて進まなくては。
そう思うのに、クロードの頬に一筋流れる涙。　それは、何の涙なのか。
「おれたちは、もうあの国には必要ないよな」
「そうでしょうか」
「うん、おれたちがいたんじゃあ、あの国は一人立ち出来ない」
「……クロードさま」
ラドビアスは、少し前をいくクロードの肩が細かく震えているのに気づく。　たが、彼は触れて欲しくは無いだろう。　慰めの言葉など、今の彼は必要とはしていない。　今はただ、彼の決心に沿うこと。　自分は、彼にどこまでも付き従うだけだ。
それよりも、彼が向かうベオーク自治国へ行く困難さにラドビアスは気が重くなる。　ベオーク自治国の、いや、ベオーク教皇一族の強さをクロードは一端しか知らない。　だからこそ、決心できたのだろうが。
「もうわたしは、主人を失くすことはできない」
ラドビアスは、小さく呟く。　自分を殺して主人に尽くすわけでは無い。　一人でいられないのはむしろ自分だ。　クロードを失うわけにはいかない。　ベオーク自治国に渡り、クロードの身の内にある、魔経典を取り出せば彼は普通の人として歳を取る。　そうでなくても、前の主人カルラの竜印がなくなった今、彼の寿命はあと百年もないだろう。　そうなったら自分は一人なのだ。　それは――なんとしても変えなくてはならない。　自分のために。

恐ろしいほどの自分の所有欲と手前勝手な気持ち。　醜い一面があるのを認めざるをえない。　だからと言って容易く自分が変わるわけでもない。
「どこまでも罪深い自分には、クロードさましかいない」
思わず洩れた言葉に魔獣が薄く笑う気配がした。
「愚かだとおまえも思うか？」
鼻に皺を寄せたまま、魔獣は何も言わず、ラドビアスも黙り込む。
この旅路は、死への旅となるのか。　それさえも自分にとっては、生きる縁（よすが）だと思いながら。

「少しお休みしませんか」
「休みたいのか？」
後ろから掛かる声に、クロードは苛々と振り返る。
「申し訳ありません、クロードさま」
「いいけど、すぐに出発だぞ」
「はい」
その言葉を受けて魔獣たちは草地を選んで静かに降り立つ。　クロードは、声を出して初めて自分がいかに喉が渇いていたのかを知る。　声を出すのがつらいほどの喉の渇き。　そして、感じる疲労感。
「サウンティトゥーダ、アウントゥエン、水を飲みに行きなさい」
魔獣に命じてから、クロードの方に伸ばされた手。　そこにあるのは水筒だった。
「ありがとう、ラドビアス」
一口飲むと、クロードは我慢できずに喉を鳴らしてすべて飲み干してしまった。
「……ごめん」
なんですかと首を傾げるラドビアスに、水筒を返しながらクロードはうなだれる。

「おれって自分の事しか考えてなかった。早く行きたくって、そればかりで。魔獣たちのこともおまえのこともちらっとも考えずに。おれは主人失格だな」
　気負ってる主人のために声をかけてくれたのだと分かって、クロードはふがいない自分にがっくりと肩を落としていた。　一日や二日で着くわけも無いのに、こんな事では主従共倒れになってしまうだろう。
「そのためにわたしがいるのですよ。魔獣のことなどクロードさまがご心配するには及びません。アレらは人間と違って一年くらい食べなくても生きているくらい丈夫なんですから」
　ラドビアスは、にこりと笑って荷物の中から薄手の毛布を取り出して広げた。
「こちらにおいでください。わたしは近くに宿があるかどうか見てまいりますから、それまでここでお休みください」
　クロードが大人しく座るのを確認すると、ラドビアスは背後の森に向かって魔獣の名前を口にした。
「サウンティトゥーダ、アウントゥエン戻って来い」
　張り上げたわけでも無い声に応えて二頭の魔獣が姿を現す。
「アウントゥエン、クロードさまをお守りしろ。サウンティトゥーダは、わたしと来い」
　アウントゥエンは軽く頭を下げるとクロードの側にどっかりと座ってべろりとクロードの顔を舐め上げた。
「ぐるるるる……」
　それに対して不満げに低い唸り声を上げたのはサウンティトゥーダだ。　この二頭の魔獣は、主人のクロードに対しては張り合っているため、いさかいも耐えない。　そして今は、主人ではなくラドビアスの命であるために抗議も大きい。　彼ら魔獣がラドビアスに従っているのは、ラドビアスが主人の身辺を守り、主人も彼に頼っているのを知っているからに他ならない。　もし、ラドビアスがクロードの脅威だと思えば、魔獣たちは躊躇(ためら)うことなく彼を食い殺す

だろう。
「サウンティトゥーダ、ラドビアスと行っておいで」
クロードの声に仕方なくサウンティトゥーダは、ラドビアスを背中に乗せて飛び立つ。
「おまえも疲れたろう。少し休もう」
大きな首に手を回してクロードがアウントゥエンの耳の後ろを掻いてやると、くうんと可愛い声でアウントゥエンは鳴いてみせる。
「おまえってほんとに可愛いよな」
ぎゅっと抱きしめるクロードをアウントゥエンが押し倒して顔を舐めるのを、クロードは大げさに体を捩って逃げる。　やってる本人たちは、楽しく遊んでいるのだが、もしこの様子を他の人間が見たら大騒ぎになっているに違いない。
――大きな翼を持つ赤い狼が少年を襲っている――にしか見えない。
「あははは、もう止めてよ。どうした？　アウントゥエン」
急に顔を上げて森の方へぐるるると唸る魔獣につられてクロードも森に目を向ける。
「待て、おれが様子を見るからおまえは木に隠れていろ」
不満顔の魔獣にもう一度、行けと短く言うとアウントゥエンが渋々近くの大木の影に潜む。

旅立ち－1（後書き）

不定期な更新になりますが、最後までがんばりたいと思っています。

旅立ち－2

ここら辺に住む人間だったら、そのまま脅かさずに行きすぎればいい話しだ。　むやみに魔獣を見せて騒ぎにしたくない。
そのまま、息を詰めているクロードの前の茂みがガサガサと大きな音を立てた。　クロードは再びアウントゥエンの方を向いて手で待てと指示して構えを取る。
大きな音と共に姿を現した人影が先か、待ちきれず大きく吼えたアウントゥエンの声が先か。
クロードの前に現れたのは、一人のおさげ髪の少女だった。
「やっと出られたわ。今、大きな犬の声がしなかった？」
訛りの強いアーリア語は聞き取りにくい。　ほっとした顔でクロードに呼びかけた少女は、見た目クロードと同じくらいか、一つ二つ上に見える。　明らかにハオ族の特徴を備えている黒髪と黒い目。
大陸も西へ向かうほど、人種的には白色人種より、黄色人種であるハオ族に近い民族が増えていくのだろう。
広大なゴーダ砂漠の手前、ダルファンを過ぎるとハオタイ国はその真のすがたを見せるのかもしれない。

森の中を長い事放浪してきたのだろうか。　薄汚れた麻の膝下までの筒のような着物を腰の辺で同じ麻の細い帯で巻いている。　その下には足に沿うような細身のズボンを履いていた。　ここらの一般的な農民の服装。　支配階級や、町住まいの者はともかく、農村では男女の目立つ区別など無い。
「犬？　さあ、おれは聞いてないけど」
しらばくれるクロードに構わず、少女は大木に向かって声をかける。
「そこにいるんだよね。おいでわんちゃん」
そこにいるのは、わんちゃんなどではない。　そのまま手を出せ

ば、命の保障も無い。　クロードは仕方無く、少女の前を塞ぐように移動する。
「そう、実はおれの犬なんだけど。ちょっと躾ができてなくてさ。噛まれるかもしれないから手は出さないほうがいいよ」
　躾けが出来てないという辺が気にさわったのか、大木の影から低い唸り声がする。　しかし、ちょっと噛まれるなんて生易しいことで収まるわけもない。
「止まって、今呼ぶからね。それ以上動かないでよ」
　放っておくと、自ら魔獣の口に頭を突っ込みかねない少女を呼び止めてから、クロードは小さく息を吐いた。　面倒事は、望まなくても自分の足でやってくるものなのだ。
「アウントゥエン、出ておいで」
「な、何、何なの？」
　クロードの声に応じて姿を見せたものに、少女は驚いて尻餅をつく。　彼女の前にいたものは、見覚えのあるような姿を一見しているが、その実この世界にいるはずの無い生き物。　暗赤色の体は狼だが、大きさは狼の倍以上はある。　それ以上に奇異なのが、その背中に生えている大きな鷲のような力強い翼だった。
「これは、犬なんかじゃないでしょ？　あんた、どこの魔導師なの」
「おれは、旅の魔道師さ。今のところどこにも属してない。そしてこれは、おれが召喚した魔獣。すごいだろ、こんな生き物に会えたなんて、君ってついてるよ。じゃあ、これで」
　大急ぎでそう言って背を向けたクロードの上着を引っ張ったのは、他ならぬすごい生き物、彼の魔獣だった。
「何？　アウントゥエン」
　上着を咥えていた魔獣は、主人の注意を引き付けたのを見てそっと上着を離す。　そしてずいっと少女のほうへ、その大きな足を向けた。
「い、いやあ、来ないで。た、助けて」
　言いながらも、腰が抜けたのか少女はその場から動けない。

「おい、アウントゥエン」
クロードもまさかいきなり魔獣がこの少女を喰うわけは無いと思いながらも、焦った声を上げた。　普段は、クロードの言いつけを守ってはいるが何せ魔獣というものは、この世の理を外れた生き物なのだ。　何を思っているのかは、分からない。
べろり、と長い舌で魔獣は少女の顔を舐める。　ひっと小さい声が洩れて少女の体が横様に倒れた。
「気絶したの？」
クロードが近づくと、魔獣がその大きな前足で少女の足をつつく。
クロードは、魔獣にふざけるのは止めるように言うつもりで足に目をやる。　すると少女の膝上あたりにどす黒い沁みがあるのに気づいた。
「血痕……おまえ、これをおれに言うつもりだったの？」
地面に片膝をつくと、少女のズボンをたくし上げる。　そこにあるのは膿んでいる斜めに切れ込んだ傷。
「おまえのせいで気絶したんじゃ無かったんだな。表面が壊死しかかってる。水を汲んできてくれ」
主人が自分の鞍の横についている袋から出して差し出した水筒を咥えた魔獣は、直ちに姿を消す。
――今まで気が付かなかったが、顔色も悪い。　傷を受けてからしばらく森をさ迷っていたのだろうか。　どう見てもそれは、刀傷だった。　クロードは、自分の上着を脱いで丸めると少女の首の下に差し入れる。　触れた肌が熱いのにも気づいて眉を顰めた。
「熱が出ているのか。これは、やっかいだな」
「ただいま戻りました。……それは？」
クロードの呟きの後にかかる声に目を上げると、険しい顔の彼の従者が黒い獣を従えて立っていた。
「宿がありました。行きましょうか」
「ま、待ってよ。このままこの子を置いていける訳無いじゃないか」
「なぜです？」

ラドビアスが目だけちらりと少女に向けた後、クロードに視線を戻す。
「ここで厄介ごとに巻き込まれる必要はありません。我々は人助けの旅をしているんじゃないんですからね」
「だからって、目の前で倒れたのに知らんふりは出来ないだろっ」
クロードの抗議にラドビアスはため息をつく。
「怪我？　ですか」
「どうもそうらしい。足を見てやって」
倒れている少女の元にしゃがみ込んだラドビアスが懐から短剣を取り出す。　そこに間合いを計ったようにアウントゥエンが水筒を咥えて現れる。　彼はそれを取り上げると患部に勢い良くかけていく。
「痛くないようにしてやれよ、ラドビアス」
分かっておりますよとぞんざいに答える従者の声に、クロードはまったくそんな事を考えて無かったのだと悟る。　ラドビアスときたら、関心の無いものにはとことん冷たくできるのだから始末に負えない。
低く唱える声。　唱えながら患部の上に指で描かれる藩字が浮き出て肌に貼りつく。　そして躊躇いなく剣先が壊死した皮膚を切り裂いた。　途端に濁ったどろどろとしたものが溢れる。　それを周囲の肉ごと抉るように切り取ると、今度は違う藩字を呟く。　すると白い煙としゅうしゅうと沸騰したお湯が上げる蒸気の音に似た音を立てる。　そして傷口が盛り上がりながら閉じていった。
「これで悪い物は取り除きましたから、しばらくしたら起き上がれると思います。では、まいりましょうか」
立ち上がったラドビアスにクロードが噛み付くように言う。
「意識も戻らない女の子をこのままここに置いとけるわけないじゃないか。一緒に連れて行こう」
「わたしは反対です。ここで私たちに会わなければ野垂れ死んでいたに違いありません。この後、獣に食われるか族に襲われるかなど

我々の感知することでは無い。ここでへたに誰かと関わってもろくなことになりませんよ」
「だめだ、連れていく」
「クロードさま」
「ラドビアス、おまえおれの従者なんだよな。なら、おれの言うことを聞け。この娘を宿に連れていく。口答えするな」
厳しい顔の主人にラドビアスは、反論するのを止めて面を伏せる。
彼の庇護者気取りになっているのをこの若い主人は許しはしない。
誰の従者なのかと問い詰められるのは、これで何回目になるのか。
はっきりしないのは自分なのか。　主人よりも自分の思いに従う性を見咎められているようで、ラドビアスはクロードの言葉にぎくりと身を震わせた。

旅立ち－3

「承知しました」
ラドビアスが少女を肩に担ぎ上げるのをクロードは苦々しく見ていた。　なんのかんの偉そうな事を言ったとしても所詮自分には何も出来ない。　クロードと同じくらいの体格の少女を軽々と運ぶラドビアスに嫉妬すら感じる。
この先、魔術にしても剣術にしたって練習しだいでどうにかなるだろうが、体格だけはどうにもならない。　鍛えてみても体は華奢な少年の体躯を変えることは無いのだ。　封印された経典を取り出さなくては死ぬまでこの体でいなくてはならない。
レイモンドールの王にこの経典が封印されていた頃は、王は経典によって死ぬまで歳を取らない。　それは、王の特異性と神秘性を増す上で大きな役割を担っていたはずだった。
青年のまま歳を取らない王は魔術の結界で国を守っている国の象徴であり、国民の誇りだった。
しかし、その結界も無い今。　少年の体に封印された経典は、呪いでしかない。

魔獣たちはそのまま山に残し、麓の小さな町に下りたクロードたちは宿に二部屋取る事ができてクロードはやっと落ち着く。
その晩からまた高い熱を出して寝ている少女に付き添っていたクロードは、朝方こっくりと船を漕いでいた。　いつからそうしていたのか、いつの間にか自分を見ている少女に気づいて今起きたかのように繕う。
「お早う、加減はどう？」
「どうして？　ここはどこなの？　あんたは誰？」
「誰って、それは酷いなぁ。きみはあの山で気を失ったんだよ。で、

ここまで運んで来たってわけなんだけど」
クロードの説明に少女は記憶を辿るように窓を見る。
「そう、そうだったわ。ありがとう……」
「おれの名前はクロードっていうんだ」
「あたし、ランケイって言うの」
そう言って、少女は急に言葉を切った。
「何？　どうしたの？　気分が悪いの？」
いえ、とかまあとか、あいまいにごもごも言っている少女の頬が赤いのに気づき、クロードは自分の手を少女の額に当てる。
「んー、熱は無いみたいなんだけど」
「ね、熱なんか無いわよ」
慌てて手を撥ね退けられて首を傾げるクロードを見て少女はつぶやく。
「こんなに綺麗な男の子だったなんて」
何せ膝の刀傷のせいで頭が朦朧としていたのだ。　薄ぼんやりとしか少年を覚えていなかった。　ついでに言えば、何を喋ったかさえあまり覚えていない。
それが、朝起きてみるとアーリア人の男の子が自分の目の前にいるのだ。　銀に近い金髪に濃い群青の瞳。　卵型の顔形。　まるでおとぎ話に出てくる王子さまみたいな造作の顔にどぎまぎしないほうがおかしいと言うものだ。
「あたし、弟を探しているのよ」
「弟さん？」
いきなり始まった少女の打ち明け話にクロードは、聞こうかどうか迷ってしまう。　このまま彼女に深く関わるのは、ラドビアスに言われなくても不味いと分っている。
「あたしの弟は、ハイラ神に連れ去られたの」
クロードの逡巡（しゅんじゅん）も覆す少女の言った名前。
ハイラといえば、ユリウスの姉だったはず。　確か、幼い子供を食べるという恐ろしい食癖を持った人物だった。

「ハイラってベオーク自治国にいるんじゃないの？」
「神の御名を呼び捨てるなんて」
暫く絶句した風で少女は黙り込む。
「ごめん、その神さまがどうしてここに？」
知らないの？　と不思議そうに聞かれてクロードが首を振る。
その事に驚いた風に黒い目を見開いた少女が話し出した。
「この世で、ベオークの神を知らないなんて人がいるとは思わなかったわ。とんでもない辺境の人なの？　ベオークの神は、交代で各地を見回っているのよ」
「ああ、そういう事か」
今まで結界で閉じられていた世界に住んでいたことなど話す必要は無い。　彼の住んでいたレイモンドール国は、独自の魔道教を敷いていたのだから。　藩字ばかりの呪文を使うベオークの術でなく。
古代レーン文字を組み合わせた魔術を使っていた。　そんな事をこの少女に言う必要なないとクロードはあいまいに笑った。
「あたしは、この近くの村に住んでいたわ。ダフノール村っていうの」
そう言って話し出す少女の話は、深刻な話だった。

「姉ちゃん、オラも手伝うよ」
自分の傍らに積んである野菜の一つを掴んでしゃがみ込んだ少年にランケイは、笑顔を向ける。
「あんた、羊に餌やったの？」
「うん、やったよ。兄ちゃんたちと手分けしたから早く済んだんだ。これ、洗ったらいい？」
ランケイが住んでいる村、ダフノールは広大な国ハオタイの西、ダルファンという大きな都市の近郊の村だった。　ダルファンを過ぎると人種的にも大陸の西側に多い白人種ではなく、ハオ族と呼ばれる黄色人種が多く住む地域になっていく。

ダフノールもハオ族の村だったが、話す言葉は訛りが強いがアーリア語だった。　まさにダルファンあたりが西の文化と東の文化の別れ目ともいえた。
「じゃあ、姉ちゃんが野菜を洗っていくから根っこを切ってくれる？」
「うん」
丸いまな板を持ち出して来た少年が洗って積んである野菜の根っこをざくりざくりと小気味いい音をさせて切っていく。　ランケイがそれを横目で見て、出来栄えを確認すると自分の仕事に戻った。
大きい包丁を操る姿は危なげない。　少年は十歳だが、ここら辺の子供は朝から晩まで親の手伝いをするのは普通のことだった。それを不幸だと思ったことも無い。
その中で感じる達成感や、楽しみ。　それ以上にその生活しか知らないのだから文句のおきようも無い。
「根っこは大事に集めておきなよ、セイシン。煮詰めたら甘い汁が出るから固めてあげる」
「本当？　大事にする」
弟の宝物を扱うようにそっと根っこを集める仕草にランケイは含み笑いをした。　ランケイは五人兄弟の二番目で十七歳。　そろそろ嫁にも行こうかという年頃だ。　だが、一番下の弟はほぼランケイが育てたようなもので、ランケイ以外女の子がいないため親が離さないという理由もある。　家の事を任すことのできるランケイはますます縁遠くなっていた。
「えっ？　君十七歳なの？」
「そうだけど」
クロードの驚いた声に話を中断されて、ランケイの眉が顰められる。
「あ、ごめん。続けて」
クロードは、慌てて謝る。　女性の歳は本当に分らない。　とくにハオ族の女性は若く見える。　まあ、クロードだって十七歳だが

見た目は十四、五なのだが。
竹を編んだざるに山盛りに青菜を盛って、家に戻ろうとしたランケイは何気無く空を見上げて叫んだ。
「セイシン、早く家に戻ってっ。走るのよっ」
「姉ちゃん？」
見上げた時は豆粒のようだったのに、今はごうごうという風を切る音が響いていた。　もの凄い風に目を瞑りながら家に向かおうとしたランケイの耳に聞こえた弟の悲鳴。
「助けてぇ、お姉ちゃんっ」
ランケイが振り返るとそこには大きな動物が空中に止まっていた。
その上には大柄なハオタイ様式の金をふんだんに使った胞を着る人物。　そして、その動物の前足に掴まれていたのは今まで自分の横にいたセイシンだった。
「痛い、痛いよぉ、お姉ちゃん」
腰を大きな鉤爪で掴まれているセイシンが泣き叫ぶ。
「セイシン！」
そのまま飛び上がろうとする動物、伝説の生き物だと言われている龍に掴まれている弟が伸ばした手をランケイが掴む。
「セイシン、セイシン、セイシン」
大声で叫びながら掴んだ手に力を入れると弟が痛いと泣き叫んだ。
掴まれた背中が痛いのか、ランケイの掴んだ腕が痛いのか。　それでもランケイは離すわけにはいかない。
「セイシン、がんばって」
「おや、獲物にゴミがついているじゃないか」
龍に跨っている人物の太い声がする。
「もうそんなに育ってっちゃ、美味しくない。手を離しなさい」
言った途端に背中から大型の剣を引き抜くとランケイめがけて突き刺すように振り下ろした。
「きゃああっ」
痛さに驚いて手を離してしまったランケイがどさりと地面に落ち

るのを確認もせず、その龍は上空高く飛び去って行った。
痛む足を引きずりながら、やっとの思いで家に帰ったランケイは、親にセイシンを助けに行って欲しいと訴えたが。
「セイシンに会えないのは悲しいけど、セイシンは神に選ばれたんだよ。きっと神にお仕えする御子になるんだ。これは光栄なことなんだよ」
思いもしなかった両親の言葉にランケイは、家を飛び出した。知らないふりをしているだけで、ハイラ神が子供を生贄にすることぐらい幼いこどもだって知っているというのに。
見殺しにするのか。
だったらあたしが助ける。　そう思いながらランケイは山中をさ迷っていた。

「それは、いつの話？」
「三日前よ」
そう、と頷いたが彼女の弟が今も生きている可能性はあまり高くないとクロードは思う。　狩ってきた獲物を置いとくような事はしないだろう。　でも、そんなこと彼女に言えやしない。

旅立ち－4

「だけど、それって大変じゃないか」
「うるさいわよ。あたしはベオーク自治国まで弟を追っていくんだから」
　思いつめた表情の少女にクロードは、可哀相だと思う気持ちとまた別の感情も湧くのを感じる。
「ベオークに行くって言うけど、そこまでの路銀はどうするの？　厳しい国境を通るための通交証はどうするつもり？　あそこは、基本魔導師しか入れない国だ。その前にもハオタイの中だって州境には関所があるんだ。行けたとして、どうやって助ける？　君剣術の使い手とかなの？　ベオークにいる魔導師は皆武術の達人なんだ」
「……そんなの、何にもないけど」
　ランケイは、クロードを睨むように見る。
「何も持ってなかったら、弟を諦めないといけないの？　あたしは行くわよ。セイシンはまだ十歳なのよ」
　硬く握り締める両手に涙が落ちる。　降りかかった不幸をどう消化すればいいのか、ランケイ自身にも分らない。
「あんたなんかに分らないわよ。魔法で何でも解決できるような、恵まれてるあんたなんかに」
「確かに、ぼくには完全には分らないかもしれない。はっきり言って、飢えるほど貧乏になった事も無いし、一人きりになった事もない。でも、だからって幸せ一杯ってわけじゃないんだけど」
　実は、と言ってクロードはランケイの握った手に自分の手を重ねる。
「おれは、ある理由でベオークに行くんだ。国境までなら君が良ければ一緒に行こう。ただし、ラドビアスが納得したらだけど」
「え？　本当に」
「いけません」

ランケイの弾んだ声に被さる硬い声に、クロードは顔を戸口へと向けた。
「傷を治して宿にまで運んだ。これ以上関わる事なんて承諾できかねます。人の事情なんてその人それぞれです。いちいちこれから会う人に関わっていったら、がんじがらめになって先に進めなくなります」
「ラドビアス」
ラドビアスが、寝台の上で硬い表情をしてこちらを見る少女を厳しく見据える。
「おまえは両親を悪し様に言っているが、ハイラ神は、同じ場所から何人も子供を攫ったりはしない。おまえの村は弟が差し出した命で他の子供の命が救われたのだ。それが分っているからこそ、彼らにはそう言うしかなかった。親の気持ちを知らないのはおまえの方だ」
厳しい目は次にクロードに移る。
「クロードさまは、この旅を物見遊山にするおつもりですか。それとも人助けの旅ですか。自分の身も危ないと言うのに人の心配なんかお止めください」
ラドビアスの言い分も尤もだと分っている。　この先、不幸を背負っている人間などいくらもいるだろう。　その不幸をすべて引き受けるなんてできない。
それに、行ったところで弟はたぶんもうハイラの腹の中だ。
だけど、ランケイを放って置けない。　ここで会ったのは偶然かもしれないが、何か縁を感じてもいいのではないかと――上手く言えないけど。
「おまえの言いたいことはおれも思ってるよ。でも、もう決めたんだ。ランケイも連れて行く」
「クロードさま」
「おれの言う事聞けよ、ラドビアス。おれの従者だと言うんなら、おれの命を聞け」

その一言で、ラドビアスは何も言えない。　この少年は、自分を試しているのかもしれなかった。　口先だけの従属を許さないと言っているのかもしれない。
「承知しました」
部屋を出て行くラドビアスは、「宿にあとしばらくの延泊を伝えに行きます」とだけ言うともう誰の言葉も聞くつもりはないとばかりに扉を音を立てて閉めた。
「怖い人ね」
ランケイがほっと息をついた。
「怖い？　そうかな？　口は確かに悪いけど、優しいし、頼りになると思うけど」
――優しい？　クロードの従者を見て優しいとは微塵も感じなかったランケイは、彼が出て行った扉を眺めた。　彼が優しいのは、自分の主人限定なんだろう。　他にそう見せているとしたら、その必要性があるから――そんなところか。
「君はしっかり体力をつけてね。急がなくていいから」
「ありがとう、クロード」
幼く見える彼女を子供扱いしそうになって、はっとクロードは自戒する。　彼女にしたら、自分のほうが年下に見えているのだろう。
お互いが自分より幼く見えると思っているなんて滑稽だと声に出さずにクロードは笑った。

その後四日ほどでランケイは、すっかり良くなった。
「もう、ここを出ていけるわ」
「うん、その前にランケイ、君に聞いてもらわないといけない事がある」
ランケイを押しとどめてクロードが真面目な顔を彼女に向ける。
「何？」
「おれは、魔導師だ。この先いろんな術を使う場面や、君には理解できない事をすることがあるかもしれない。だけど、いちいち君に

は説明しない」
「それで？」
「おれは、前に見た魔獣のほかにもう一頭魔獣を使役している。彼らに勝手に触ったり、近づかないで欲しい」
クロードの話にランケイは喉が乾いていくのを感じる。　今まで魔導師といえば、隣村にいた小さな老人くらいだった。　彼が術など使ったことは無く、子供に読み書きを教えてくれる、気のいい年寄りという認識しかない。　魔導師が魔術を使うことは知っていても、実感したことなど無かった。
それが、この自分より年若い少年が使うというのか。　だが、ここで自分が嫌だという選択は無い。　あたしはセイシンを助けに行くのだから。
「勿論、いいわ」
ランケイの返事にクロードは、うんと笑いながら「着替えて下においでね。待ってる」と部屋を出て行った。

「クロードさま、出かけますか」
階段を降りてきたクロードに出立の準備万端のラドビアスが声をかける。　「そうだな」と応じた主人の目線が二階に向かったところで、ラドビアスが確認するように聞く。
「やはりあの娘を連れて行かれるのですか？　あれは、厄災を招きますよ」
「かもな。でも、もう決めた。連れて行くよ、もういいかとは聞かないぞ、ラドビアス」
クロードにラドビアスは、諦めたような顔を見せた。
「わたしにそんな気遣いは要りません。あなたがお決めになったのなら」
――それに……確かめたいこともある。
「何か、仰りましたか？」

ううんとクロードが首を振ったところに、ランケイが降りてきた。
支度といっても倒れる前に着ていた服しかないし、荷物など腰にくくった幅広の紐に収まるくらいしか無かった。
魔獣を置いた山中に帰る道すがら、ラドビアスが気遣わしげにクロードに話しかける。
「思ったより、長い間、彼らを放っておいたのでこの先からは、気をつけていかないと」
「どういう事？」
クロードの問いにラドビアスは、ため息をつく。
「わたしも何度かは見に行ったのですが。彼らは退屈してました」
答えるかわりに、指を指す方へと目を向けると、そこはさながら戦場のようだった。
そこら中が燃えて、そこら中の木がなぎ倒されている。　そこに散らばる血の跡、跡。
「ランケイ、悪いけどそこで待ってて」
クロードが、後ろを歩いていたランケイにそう告げると一人獣道を進んでいく。
「一体何があるの？」
残されたランケイが横にいるクロードの従者に問うが、彼は斜めに視線を送っただけで何も答えない。
「彼を一人で行かせて大丈夫なの？　心配じゃないの？」
「主人は、そこらの子供とは違う」
ぶっきらぼうにラドビアスが答える。
「魔獣の興奮を抑えるくらい、彼には造作もないことだ。だが、へたに他の者が関わる方が危険だ。それより、何も聞くなと言われているのでは無いのか」
早口で言いたいことを言うと不機嫌そうにラドビアスは、もうランケイには感心を無くした様子で自分の主人の向かった先を見つめた。

誘い－1

「アウントゥエン、サウンティトゥーダ、どこにいる？　出て来い」
むっとするほどの濃い血の匂いの中、クロードが声を荒げるでもなく呼びかける。　それに応えて黒っぽい大きな塊が二つ、焦土と化した空き地に降り立つ。　それにつれて吐きそうなくらいの生臭く金気のある匂いがあたりを覆った。
いきなり山が震えるような咆哮をあげてその塊がクロードの上に躍りかかる。　その勢いに押されて少年はいとも簡単にその塊の下敷きになった。
ものすごい吼え声と、長い舌が這いずる音があたりに響く。
暫くして――下にいた少年が声をあげた。
「もういいだろ？　顔も何もべたべただ」
尚も舐めようとする舌を押し上げてクロードは起き上がる。
「いい加減にしろよ、おまえたち。こんなにしちゃって。体も臭いし、そんなだったらもう一緒に寝てやんないからな。今すぐ体を洗って来い」
彼の声に不服そうな唸り声が返る。　それから、聞き取りにくい人間の言葉が流れた。
「すぐに迎えに来ると言ったのに、遅いからだ」
元は赤い魔獣がぼそりと言う。
「寂しかった」
黒い魔獣も髭をそよがせながら長い首をクロードの肩にのせる。
それを聞いたクロードは思わず笑顔を浮かべた。
「悪かったな、もう怒らないから体を洗うぞ。おれも一緒に行く」
そう優しく告げると、怒っていないと分かったからか、クロードも行くと言ったからか、またまた魔獣は大声を上げた。
きっと、誰か通りかかったら恐ろしい化け物が吼えていると思うだろう。　牙を向けて大口を開けている二頭にクロードはかれらの

頭をがしがしとかいてやる。
「嬉しいんだな、よし、よし。ラドビアスに言ってくるから」
大人しく頭を垂れる魔獣の瞳からは、先ほどまでの荒々しさが消え去っている。　彼だけが――彼らの主人たるクロードだけが、魔獣の興奮を収めることができるのだ。
それを分っているクロードの従者が待っているところまで戻って行くと、彼の姿を認めたランケイが急いでクロードの元に走ってきた。
「クロード？　大丈夫なの？　……それは一体？」
血が服と言わず、顔や手足にもついて頭から異様な匂いをさせているクロードにランケイは怯えて足を止めた。
「ああ、これはおれの血じゃない。あいつらと川に下りて洗ってくるよ」
「はい、ではお着替えと拭くものを」差し出された衣類を掴むとクロードは元来た道を走り去って行った。
ざぶりと水を被りながらクロードは、サウンティトゥーダの大きな頭に口を寄せる。
「おまえに行ってもらいたいところがある」
ぶるりと大きく体を振るわせた黒いドラゴンが指示を待ってクロードを見た。　耳元でささやくように言うと、黒い魔獣はそのまま空に駆け上がったかと思うとその姿を消す。
「今の、ラドビアスには内緒だぞ、アウントゥエン」
「内緒はいいな。おいしい」
「おいしいじゃなくて、面白いだろ」
魔獣が喋られるとクロードが気づいてから、ぽつぽつとたまに彼らは人間の言葉を喋るようになった。　だが、長く喋ってなかったからか使い方がときどき不自然だ。
「そう、面白い。ラドビアスは不味そうだ」
アウントゥエンは口の中にあるようにぺっと唾を吐いた。
「少しゆっくりとしすぎたかもな」

クロードは、帰ってきたサウンティトゥーダから報告を聞いて立ち上がった。　今はこのことは自分の胸にしまっておこう。　そう、思いながら歩いて行くと道の端に座り込む少女と背筋を伸ばして別れた時のままの姿勢の男が見えてクロードは笑みを浮かべた。
「ごめん、少し遊びすぎた」
「遊んでたの？」
むっとした顔を見せた少女は、そっと魔獣に目を向けてから顔を逸らした。
「では、行きましょうか。クロードさまが遊んでいたおかげで、時間も押しておりますし魔獣に乗っていきたいのですが」
淡々と嫌味を言いながらラドビアスは、魔獣を呼びつける。
「アウントゥエン、サウンティトゥーダ、山を越える」
不服そうな顔を見せた魔獣に「おまえたちに乗るのって久しぶりだな」クロードが言ってやれば、二頭は尻尾を振り回して伏せの姿勢をとった。
「ランケイ、おれとサウンティトゥーダに乗ろう」
クロードの言葉に黒いドラゴンが笑うように吼えて、隣の赤い翼を持つ狼は、抗議の雄たけびを上げる。
「あたし、乗れるかな」
怯えたような顔を見せるランケイにクロードは手を差し出す。
「おれの後ろに乗って腰をしっかり掴んでたら大丈夫。アウントゥエン、さっき一緒にいたろう？　今度乗ってやるから」
クロードの言葉に赤い魔獣は唸り声をあげながらも、渋々ラドビアスを乗せる。
「しっかりつかまった？　ランケイ」
「ええ」
その声の直ぐ後に、心臓が競りあがって口から出るような急上昇でドラゴンは一気に空へ舞い上がる。　暫くは目も開けていられなくて、ランケイは必死でクロードにしがみついていた。
「ねえ、きみの村も見えるかも。見てご覧よ、綺麗な風景だ」

背中越しにかけられる声にそっと顔を横にして下を伺うと、ランケイが思ってみないような壮大な景色が広がっていた。
茶色の海。　大きな砂の海のような大地にところどころにある恩恵。　緑の砂防林に囲まれたオアシスが点々と見える。　ああ――あそこからは、灼熱の地が広がっている。　こんなにも自分の住んでいた村は、砂漠に近かったのだとランケイは胸が詰まる。　低い潅木が広がる岩だらけの山が背後に広がっていた。　あんな狭い土地に自分たちはしがみつくように暮らしていた。
だけど、幸せだったのだ。　それは、壊れる瞬間まで気づかないものだったけれど。
割れてしまった陶器の欠片は元には戻らない。　それでも、その大事な物の一片でも自分は取り戻したいのだとランケイは思った。
「故郷に挨拶はできた？」
「……ん」
「だったら、いい」クロードが小さく言う。
「クロードは故郷をどうして出たの？」
「おれは――」
その先の言葉は、いつまでも出てこない。
「クロード？」
ランケイの問いかけに「聞かない約束だ、ランケイ」と短く返る。
ごめんなさいと痩せた背中に向かって言うと、「いや、ごめん」ランケイの言葉に反射したかのようにクロードの謝罪が返ってきた。
「おれのことは聞かないでくれ」
背中が細かく震えている。　彼も故郷をやむにやられぬ理由で出てきたのかもしれない。　自分だけが不幸だと思う深い穴に片足を突っ込んでいたのだとランケイは自戒する。
生きることは、何かしら悲しくつらい。
しかし、それだけに捕らわれていると不幸自慢に摩り替わっていく。
相対する相手が自分より不幸なのが許せなくなる。

――あたしの方が辛くて可哀相なのにと。　労わる感情が不満に取って変わっていく。　あたしのほうが大変だと何で分らないのと。
独りよがりの優越感に浸る。　人は幸福でも不幸でも人と引き比べてしまう。　危なかったとランケイは息を吐く。
「本当にごめんね。クロード、あたしは恵まれている。こうやって傷を治してもらって旅もできる。ありがとうクロード」
そうだ、あたしはやるべきことがある。　そう思ったら、急にお腹もすいてきた。　ランケイは砂に反射して白く光る砂漠をさっきまでとは違う気持ちで眺めた。
「もうすぐ日も高くなります。影になるところを探して休みましょう」
ラドビアスの声を合図に岩ばかりの岩山の間に降り立つ。
ハオタイ国の陸の交通を妨げているのは、国のほぼ中央に大きな砂漠をかかえているからに他ならない。　その砂漠を抜けるのは、とても困難だ。　そのため、砂漠の手前で街道は大きく二手に分かれる。　砂漠を囲むようにある険しい山脈を北に向かう天山北路、砂漠の名残を残した遊牧民が多い地区を回る、夏山南路。
いずれにしても大きく迂回するために、砂漠を越えるのは旅人にとって大変なことになるのは確かだった。
ベオーク自治国は、そのハオタイ国の首都キータイの北の高地にある小さな都市くらいの国だ。
ハオタイの一部にあるのにも関わらず、ハオタイという強国に飲み込まれないのは、この国の特異性にある。
この国は、魔導師の国なのだ。　大陸に散らばる魔導師を統べているのが、ここベオークの魔道教会で、ここから各国に軍師や策士、顧問など名前を変えて派遣された魔導師がその国々の宮廷を握っている。
強大な魔術を使う一族が支配するこの国の権威は絶大だ。　大陸にある国のどれとしてベオークの影響を免れない。

じりじりと照りつける太陽の熱が岩を溶かすかとも思うほどだ。
この先にある大きなオアシスの街が砂漠の前にある最後の大きな街だった。
岩山から下を見ると大きなバザールがある天幕が見える。
その入り口に白っぽい布を頭からすっぽり被ったすらりとした人物が岩山を見上げて口角を上げた。　見えるはずはない。　普通の人間ならば――。
「やっと来たんだ。クロード、待っていたよ」
笑い顔にちらりと見えた口元の犬歯が鋭い光を放つ。
「あの赤と黒のでこぼこコンビも一緒か。ふんふん益々楽しみだな」

誘い1-2

「カシュダルのバザールは、この辺では最後のバザールです。わたしは、旅に入用なものを調達しますのでアウントゥエンと待っていてください」
「こいつたちも連れて行くの？」
「ええ、外は暑すぎて魔獣にもきついですから」
「でも……」
こんなの、人ごみに連れて行って大騒ぎにならないか？　そんな事を思っているのが顔に出ていたのか、ラドビアスがくすりと笑った。
「このままじゃ、無理です」
「……って？」
「クロードさまが使役している魔獣に呪をかけて人型にすればいいんですよ」
「お、おれ？」
ラドビアスを見ながら自分を指差して、視線を自分の足元で寝転ぶ魔獣に向ける。
「おれ、そんなのできないよ。教えてもらってないじゃないか」
確かそのはずだ、変化の術なんておれは知らない。
「いえ、そうじゃなく。彼らは元から人型になれるんですよ。ただし、まだ歳若い彼らは一人では変化できません。きっかけがいるのです。それが、主人の呪文だというだけです」
「それだったら、前から変化させて一緒に宿に泊まればよかったじゃないか」
クロードの抗議にラドビアスが人差し指を顔の前で振って見せる。
「変化は彼らには結構な負担になるのです。度々するものではありません。それに、宿まで一緒なんてわたしは遠慮したい」
言いたいことは最後の方だとクロードは思ったが、そういう事な

ら今度からは一緒にいられると嬉しくなる。
「で、どうするの？」
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』「そう言いながら、三邪印を片手で結び、名前を呼ばわるか、空いた手でその物を触ればいいのです」
ラドビアスが古代藩語で呪文を唱えるのを聞き漏らさないようにクロードは慎重に頭に入れる。　レーン文字を使うレイモンドールの魔術と違い、ラドビアスの魔術は大陸の魔術師と同じ古代藩語ばかりの術だ。　慣れてはきたが、読むのは出来ても聞き取るのはアーリア語とは音調が微妙に違って難しい。
「やっていただけますか？」
「うん」
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
少したどたどしくなったが、最後まで唱えて側にいたサウンティトゥーダの背中に触れた。
途端にゆらゆら揺れていたサウンティトゥーダの体がぐにゃりと動く。　もやもやとした暗幕に包まれたと思ったら、そこからすっと立ち上がる大柄な男。
顔はハオ族に近いが目付きが鋭く、口が大きいところが元のドラゴンだとクロードは思った。　青白い体は、腕の内側や脇腹に硬い鱗の名残がついている。　しなやかな筋肉をつけた若い男は逆立つような黒い髪を一振りして大きな口を開けた。
「二本足は久しぶりだ」
「そっちもお願いしますね」
ラドビアスの指差すアウントゥエンの頭にクロードは手を触れる。
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
今度は赤茶けたもやが魔獣を包む。　そこから足を出した人物にクロードは驚いて顔を逸らせた。
「おまえ、女の子だったの？」
「おんなのこ？　ってなんだ。我は雌が基本だが雄にもなれる。そ

っちがいいか、クロード？」
　赤毛の長い髪が背中までである、出るところは出た、褐色の肌を持った美女が素っ裸で立っているのはいささかクロードには刺激が強かった。
「できればお願い」
「変な奴だ」
　言ったあとに「くっ」という歯を食いしばる声がした。　姿を変えるのは苦痛を伴うのかと思っていると、「これでいいか？」低い声が聞える。
　赤毛の髪はそのままだが、アウントゥエンも綺麗にのった筋肉を持つ男性の姿になっていた。
「わたしの服ですが、間に合わせに着なさい。二人の服もついでに買って来ます。サウンティトゥーダ来なさい」
「また自分か」と、文句たらたらで黒い髪の男はラドビアスについて行く。
「クロードさまは、バザールの入り口を入ったところに食堂がありますから、そこで食事をしながらお待ちください」
「ランケイも一緒にだろ？」
「そう言いませんでしたか？」
　言ってないだろうと口をとがらすが、ラドビアスは知らないふりでさっさと歩いて行く。　大急ぎで服と格闘していた二人も後から走ってついてくる。　だが、見たところラドビアスより体の幅がある二人には服が窮屈そうだった。
「きつい」
「がまんしなさい」
　二人の文句など、虫を潰すようにぴしゃりと叩いてラドビアスはバザールの奥に消えて行く。
　香辛料をふんだんに使った肉料理を食べていると、アウントゥエンがまだ大半が残った皿をわきに押しやる。
「どうしたの？　お腹すいてないの？」

こいつにお腹がすいてないという事が今まであっただろかと思いながらクロードはが聞く。
「辛くて臭い匂いが堪らん。せっかくの肉の良い匂いが台無しだ」
人型になっても相変わらず鼻が利くんだなと思いながら、さてどうしようかとお品書きに目を通す。　味をつけてない食べ物なんて何も無いと思うけどと顔を上げたクロードは、生の鶏の頭を齧る男を見てしまった。
「うわあああっ、何やってんの」
「あそこで売っていたぞ。ちょうどテーブルにさっきのおつりがあったから買ってきた。こいつは生きてないが、死にたてだから上手い。血が新鮮なんだ」
長々と続く生の鶏の味についての感想に吐きそうになるクロードだった。
「あ、あたしもうダメ。吐きそう」
今まで黙っていたランケイが立ち上がって外に飛び出して行く。
「どうしたんだ？」
口からぐったりとした鶏の頭が垂れている。　持っている手は血だらけで、もうそこら中が血なまぐさくて香辛料も形無しだ。
「おい、生のしかも元の形のまんま肉を食べるのは禁止だ。一応おまえ人間の格好してるんだぞ」
口から鶏を引き抜いてクロードが小言を言うとアウントゥエンは渋々頷く。
「クロード、生の肉は甘くて柔らかくて旨いのに人間は何でわざわざ固くしてから食べるのかが分らん。今度とびっきり旨い肉を分けてやる。そうしたらどちらが旨いか分る。一番旨いのは、まだ息がある動物だ。暖かくてぴくぴく動いて……」
「あのさ、おれに分らせようとしなくっていいよ。でも、ランケイどこまで行ったんだろう？」
なかなか帰って来ないランケイにクロードは席を立った。
「探しに行こう」

「ここにいろと言われたぞ、あいつに」
「直ぐだよ、そんなに離れてないはずだし。匂いたどってよ、アウントゥエン」
「仕方ないな」
そうは言ったがクロードにお願いされるのは大好きだ。　そう思いながら顔だけは嫌そうな表情をつくってアウントゥエンは、血で汚れた手をべろりと舐めた。

ランケイの匂いを辿りながら入り組んだ屋台や小さい店の間を進んで行く。　最初の頃こそ、時々後ろを振り向いて元いた食堂を確かめていたクロードも、どんどん速度を速めるアウントゥエンを追っていくうちに忘れ去っていく。
いつの間にかクロードは薄暗いバザールの隅にまでやってきたようだった。
あんなに騒がしかった喧騒は影を潜めて、誰の姿も見えない。奥まった掘っ立て小屋の入り口には戸の変わりに麻の布がかけられていた。
「そこか？」
「ここから匂う」
頷くアウントゥエンの後についてクロードが小屋の中に入る。中の暗さに慣れず、暫く戸惑うように立っていると上から声が聞こえて来た。
「初めまして、クロード。会いたかったよ」
上を見あげると小屋を支える天井に渡した丸太の上に誰かが乗っている。　クロードを庇うように前に立ったアウントゥエンが、あっと声を上げる。
「おまえ、知っているぞ」

誘い－3

「今頃思い出したのかよ、おまぬけだな、アウントゥエン」
「知っていたさ、えっと名前は……」
頭を捻るアウントゥエンがわかったと嬉しそうに大声を出す。
「メイファだ」
メイファ？　何か聞いたことがあるとクロードは記憶を総動員して頭の中を探し回わる。
――そうだ、昔ラドビアスを故郷のダルファンから連れ出した雪豹の魔獣の名前が確かメイファだった。
「雪豹のメイファだな、おまえ」
「おや、知っていたのか。嬉しいな、そうだよ、メイファだ」
頭から被っていた布をはらりと首の後ろへ落とすと男は、長年の友人に会ったかのように微笑んだ。
「ここに女の子がいたろ？　知らないか」
おまえがどうかしたんだろうという言葉を含ませながらクロードは、足を少しづつずらしながら移動していく。
「知ってるよ、ハオ族の子だろ？　返して欲しいの？」
「あたりまえだ、おれの連れだからな」
敵なのか何なのか、少なくとも味方では無いような気がする。なんでランケイを連れ込んだのかが分らず、クロードは苛々と言葉をかける。
「おまえ、一体何をしようとしているんだ？」
「取引だよ、クロード。ハオ族のこの娘は俺が預かる。おまえは、指輪を持って『ロンズの店』においで。ラドビアスなんかと来るなよ、じゃあな」
だっと走るうちに姿が白い大きな豹になったメイファは、足元に置いていた塊を咥えると飛ぶような勢いで天窓を打ち破って外に飛び出した。

「アウントゥエン、追いかけろっ。……あ、そうか」
言った側から、今は人型だったと思い出して横の男を見上げると、男も「無理だ」と悔しそうに呟く。
「あいつにはもう追いつけないし、匂いも無い」
「匂いが無い？」
「あいつは、魔界の匂いがしないのだ。長生きをしているから自分の変化も自由にできる」
アウントゥエンの言葉にああ、とクロードは納得する。　メイファは五百年前に誰かに召喚されたままこの世界に居続けたために魔界の匂いを、自分の匂いを失ったのだ。
だとしたらおれが召喚したこの二頭の魔獣も同じ運命を辿るのか？
「ごめん、アウントゥエン」
差し出された手が逞しい男の腕にかかる。　男は不思議そうに自分の主人を見下ろす。
「どうしたのだ？　何で我に謝る？」
「だっておれ、おまえたちを魔界に帰す方法が分らない。それに、おれ……おまえたちと離れたくないし。でも、おまえ達にとっては故郷だもんな。やっぱり帰りたいよな」
「クロード」
名前を呼ばれてうな垂れてしまった顔を再び上げると、男は嬉しそうに笑っている。
「クロードの側は、居心地がいいから我はここでいい。魔界は温くて眠くて退屈だ。それよりクロードのほうがいいに決まってるぞ。なんか、舐めていいか？」
「い、いやその格好のときはやだ」
嬉しい言葉を聞いてクロードはほっとするが、こんな大男に舐められたり、抱きしめられたりするのだけは勘弁願いたいと心底思っ

た。
「だけど、誰に召喚されているんだろう」
長年人間の世界にいたために驚くほど人間に同化している。　喋るのもなにも不自然さも何も感じないばかりか、きっと考え方まで人間に近いのかもしれない。　一瞬で自分の姿を変えることができるし、衣服もきっと何かの術で出しているのか、それとも着てるように見せているのか。
だが、魔獣が自分の意思でこんなことをするわけがないのだから、誰かの指示なんだろう。一体誰の？
メイファの主人は一体誰なのか。　クロードは得体の知れない大きな影を感じて後ろを振り返るが、勿論そこには何も無かった。
「何でこんなところにクロードさまがいるんですか」
佇むクロードの背中に突き刺さる硬質な声。　振り向かなくても誰だかは分かる。
「えっと……釈明させてくれ、ラドビアス」
「できるなら、どうぞ」
恐々後ろを見ると、黒い髪を後ろに流した自分と同じくらい背の高い男を従えた、クロードの従者が腕を組んでこちらを見ていた。
声を荒げるわけでも無く、口元を微かに歪めて眉根を寄せているだけなのに、在りえないほど怒っているのが分る。　たぶん周りの気温も三度は下がっているはずだ。
「バザールの入り口の店で食事をしながらわたしを待っているはずのあなたが、なんでここにいるのか整合性のある説明があるならぜひお聞きしたい」
「えっと、アウントゥエンが生肉を食べて、ランケイが飛び出して行って……」
詳しく言えば言うほど、ラドビアスの眉間の皺が深くなる気がするのはどうしてなのか。
「追いかけて来たら、魔獣がいて」
「魔獣ですか？」

今まで聞いてやろうという態度だったラドビアスが、目を見開く。
「うん、前におまえに聞いたやつだと思う。メイファと言っていた」
「メイファ……」
その名前にラドビアスの目がわずかに泳ぐ。　遥か昔の忘れられない記憶。　メイファと会った時から自分の運命は劇的に変わった。
「メイファと会うなんて。アウントゥエン、おまえがついていながら」
ラドビアスの怒りが横の魔獣に向くが、アウントゥエンは頭をかきながら知らん顔をしている。
「それで、メイファは何をしたんです？」
どこにも怪我はしてないかと上から下までざっと見渡しながらラドビアスがクロードに声をかける。
「おれはなんともない。けど……」
「けど？」
「ランケイが攫われた」
クロードは目の前の男が「ほら、やっぱり面倒なことになった」という顔になったのを見て顔を顰める。

誘い－4

「それで、あいつは何を言って来てるんですか」
「指輪を……渡せって」
「護法神を？　まさか行くつもりですか？」
「行く」
頑に頭を縦に振る主人を見て、ラドビアスは見せ付けるように大きなため息をつく。　だからだめだと言ったのにと主人に甘い自分を責める。
「行くのには反対しませんが、すぐに護法神を手元に戻してください。大変なことになりますから」
何で護法神をと思いながらも、目的が護法神ならと少し安心したラドビアスは、危険だと思われたらすぐに逃げてくださいと主人に念を押す。
「うん」
元来た道をラドビアスについて戻る道すがら、クロードは店先に装飾品を広げている男に声をかける。
「おじさん、ロンズの店ってどこ？」
「ロンズの店だと？　坊主、おまえあそこに行くのか？」
禿げた頭を上げて男はクロードと後ろに続くラドビアスをじろりと見て「ああ」と一人頷く。
「おまえも親にでも売られる口か。まあ、アーリア人ならそりゃあいい値がつくだろうが」
謎の言葉と共にあっちだと指を指す。
「道案内をしてもらえますか、ご主人」
関わりあいたくないのを顔に出している店主にラドビアスが一枚の銀貨を見せる。
「あっしら、まっとうなもんはあの店には関わりたくないんだが。あんたもお困りのようだからなぁ」

急に親切心の芽生えた店主が店の奥へ声を張り上げる。
「ルッソ、出て来い。この人らをロンズの店まで案内しろっ」
「えええ？　嫌だよ。おいらあんなとこ行きたくない」
「いいから、行け」
手を振り上げられて、頭を押さえながら十二歳くらいの浅黒い顔の男の子が跳び出してきた。　店主もそうだが、ここら辺はアーリア系とハオ族の混血に加えて、南方の黒人系が混じり、色の黒いボーミッシュと言われる新しい人種が多くなっている。
店主はラドビアスのことを新参の仲買の者だとでも思ったのか、後姿にぺっと唾を吐いた。
「子供を売り買いするなんざ人間のするこっちゃない。あの子もわけも分からず連れてこられた口だろう。可哀相に」
店主は手の中の銀貨をするりと撫でた。　まあ、金には罪は無い。あれも仕方ないかと大人の分別で感傷を飲み込んだ。　いちいち目くじらをたてていたらここで商売は出来ない。
ボーミッシュの特徴である浅黒く低くて大きい鼻を擦りあげながら、少年は顎をしゃくった。
「付いて来いよ」
クロードは、ここが道なのかと思いながら人の店の中を通り、店との境の板塀の上を渡った。　どんどん前のように人気が無くなった地区に行き着くと、少年は後ろを振り向いた。
「あの角を曲がればロイズの店だ。おまえ、そのおっさんに売られるんだろ？　まあ、おまえなら金持ち相手だ。そう酷い扱いもされないさ」
大人びたことを言うと、じゃあとさっさと少年は踵を返した。
「なあ、あいつの言うことが本当ならロイズの店って人身売買？」
「そうでしょうね、たぶん。やはりわたしも行きますか？」
「いいや、ここで待ってろ」そう首を振ってクロードは店に向かった。　店と言うものの、何かを売っているとか、人を集める店構えなど何もない、ただの堅牢な一枚板の戸がついた一軒屋だった。

それが民家と違うと思わせるのは、窓にはめ込まれているのがごつい鉄柱だということだ。
――何のために？　中から何かが逃げないように。　例えばそれが売られた人間だとか、そういうことか。
ごくりと唾を飲み込んで、戸にある呼び鈴を二回ほど鳴らす。何の音もしないので、もう一度と手をけようとしたところに、いきなり戸がばたりと開いた。
「何だ、おまえ」
邪険に閉めようとした手が、クロードの顔を見て止まる。　値踏みするような顔がにまりと歪んだ。
「なんか用か、坊主？」
手を引くとあっさり少年の体が店側に入った。　純粋なアーリア人が手に入るなんてめったに無いことだ。　今日はついていると男は笑った。
それもこんな美形だ。　歳が若いっていうのもいい。　あと二、三年たつほうがいいに決まっているが、少年ならこれくらいが良いという客も多い。
とにかく、さっき連れてこられたハオ族の少女なんかより、こっちのほうが数倍の値がつくのは間違いなかった。
色の白いほうが需要が多い。　中でもアーリア人は数も少なく、いればどこでもひっぱりだこなのだ。
「小父さん、おれくらいのハオ族の女の子知らない？」
「知ってるさ、この中にいる」
「じゃあ、体が砂色で髪が真っ白な男は？」
「ここにいるよ」
応対をしていた腹の突き出た男の肩越しに手が差し出された。長くて尖った綺麗な金色の爪が光る。
「メイファ、来たぞ。ランケイを返せ」
クロードの言葉にメイファがふっと笑う。　釣り上がった金の目が細められて口元が半月に上がる。

「じゃあこっちに来て、クロード。バルク、彼は俺の客だよ。遠慮してくれ」
メイファを魔獣だとは知らないのだろうか。　それほどメイファは巧みに人間に紛れているのかとクロードは驚く。
それでも商品を値踏みするように眺める男にうんざりしながら、クロードは横をすり抜けてメイファの後を追って廊下を進む。　奥に奥に建物は続いているようだった。　その奥から外に突き抜けて、クロードはえ？　という顔を見せる。
「ここは、まあ待ち合わせの場所だよ、クロード。だって外に色んなものを連れて来ているだろう？」
笑いながら、メイファがたんっと音をさせて短刀をクロードの足元に投げる。　そこには、縫いとめられた黒い影が蠢いていた。
「これは……」
「たぶん、ラドビアスが放った使い魔だろう。でもこれには魔を封じる呪文が彫ってあるんだ。抜けられないだろうよ」
メイファの頭の回転にクロードは驚いて言葉も無い。　こいつは本当に魔獣なんだろうかと唖然と彼を見やった。
「ここから馬車に乗るよ、クロード」
黒い二頭立ての馬車が待たせてあるのが見えて、クロードは二の足を踏む。　ラドビアスに頼ってるわけでは決してないと思うものの、これではきっとラドビアスは自分を見失うだろう。
「クロード、早く。まさか怖いとかじゃないだろうね？」
メイファがさも面白いと言った風に、先に乗った馬車の窓から顔を出す。

誘い－5

「まさかっ、今行くよ」
自分でもばかだと思うが弱みを見せたくない一心でクロードは、馬車に乗り込んだ。　メイファが天井をこつこつと叩いて合図を送ると、馬車は一気に加速しながら通りを進む。　店の裏には大きな道が通してあった。　商品の人間を運ぶのに都合がいいのだろうか。
そんな事を考えながら目の前に座る男に目をやると、男は頬杖をついてクロードを見ていた。
砂色の肌色はこの乾燥した土地に自然に馴染んで違和感が無い。
大きい金色の瞳は釣りあがっていて雪豹の魔獣である名残をとどめていた。　まっすぐ伸びた鼻梁に大きめの赤い唇。　客観的に見て非常に綺麗な顔をしている。
「綺麗な目だ」
ふっと口についた言葉に自分がびっくりした。　まるで綺麗な置物を見たように思ったことを言ってしまった。
――そういえば、前にも敵であるイーヴァルアイの兄、バサラのしもべの髪と目を褒めてしまったことがある。
「ありがとう、君も綺麗だよ。その藍色の瞳なんか深い海の底みたいでうっとりする。ちょっと舐めたいくらい。君の瞳ってきっと甘いんだろうな、舌で転がして……」
「おい、いい加減にしろよ。瞳を舌で転がすって、オレの事食べてる想像なんかするなよ」
くくっと言う声がしてメイファがにやりと笑う。
「食べたいけど、食べないよ。主が許さないからね」
「おまえの主人って誰なんだよ」
「今は教えてあげられない。でもさ」
ふふんと笑って手を出すとメイファがクロードの頬に触れる。
「クロード、ベオークに俺が連れて行ってやるよ。行くと、俺と行

くと言えば辛い旅なんてしなくていいんだ」
「一緒に？」
そうと頷くメイファの手をクロードは払う。
「肝心な事を何も教えないくせに何を言ってるんだ。ランケイを攫ったり、おまえは信用がおけない。そんな奴の言うことなんて聞けない」
言い切って窓に目を向けると、窓からは広大な屋敷が見える。平屋の屋敷が、建て増しを繰り返したかのようにくねくねと増殖しているかのように建ててある。
「あれは？」
「このカシュダルの領主の屋敷だよ、クロード」
簡単に答えてメイファはクロードの手を掴んだ。
「あのハオ族の娘を助けたいなら、そのなまいきな口を閉じといたほうがいいよ」
門兵に御者が何かを言うとすぐに門は大きく開く。表から入った馬車はそのまま脇に回る道をどんどん奥に向かっていく。
それは離宮になっていて、他のところのように回廊でつながっていはいない。平屋なのは他の屋敷と同じだが、他の屋敷が開放的な造りになっているのと違い、高い塀が張り巡らされていた。馬車がその中に入ると外で待ち受けていた男が、二人がかりで大きい門を閉じてしまう。
中はいたって普通のというか、この豪華さで普通とは言わないかもしれないが。太い柱が際立つ、全ての部屋が掃きだし窓になっている部屋は、薄い布がかかっていて風にそれらがゆらゆらと風にそよいでいる風景はやけに涼しそうではあった。
「着いたよ、クロード」
「ここにランケイがいる？」
「いる、いる」
庭園に面した掃きだし窓から直接部屋に入って行くメイファの後についてクロードも部屋に入る。

「クロード、指輪をもらおうか」
いきなり手を差し出すメイファンの掌をぱんっと打ち払ってクロードは、メイファを睨んだ。
「順序が違うだろ、ランケイを返せ」
「あんなハオ族のガキと護法神を秤にかけることができるのか、そしてそのガキの方が大事だと？」
「うるさい、おれがどう思おうとおれの勝手だ」
メイファが部屋の奥の大きな飾りだなを開くと、中からごろりと大きなものが転がり落ちた。　それがランケイだとすぐに分った。
意識をなくしているのか、手足ごとぐるぐる巻きになっている彼女は微動だにしない。
「ランケイ、大丈夫か」
駆け寄ろうとするクロードの前に出される長い手が行く手を遮る。
「ガキは生きてる。ちょっと寝てるだけさ。それよりクロード、早く指輪を出せ」
「分った」
クロードは素直に自分の指から指輪を抜くとメイファに差し出す。
すると、メイファが細かい刺繍の入った綺麗な巾着を広げてクロードに向ける。
「ここに入れろ」
「うん」
クロードが入れたのを確認するとメイファの口がにまりと上がる。
そのまま、クロードの手を掴んで引き寄せた。
「クロード、おまえ護法神は経典から引き離されるのを嫌う。だからここで手放しても戻ってくると踏んでいたろ？」
まさにそう思っていたクロードは、なぜそんな事を言い出したのかと目を見張った。　ランケイを助けてラドビアスの所に帰ったところで時を置かず、護法神は自分の元に帰るだろうと思っていた。
なにせ、護法神は昔、イーヴァルアイを追ってベオークからレイモンドールまでやってきたのだから。

だが、それを知っていたということはどういうことなのか。
「今、おまえが指輪を入れた袋は呪が施してある。この中には強力な結界が張ってあって、護法神といえどもここからは出られないだろうな」
引き寄せたクロードの首筋に口をつけてメイファは囁くように言った。
「おまえの血管、温かくて良い匂いがする。きっと旨いんだろうな、おまえの血も肉も」
「くそっ」繰り出したクロードの拳をいとも簡単に避けるとメイファは、自分の右手を大きく掲げる。 すると、にゅるりと爪が伸びていく。 まるで細い短剣状になった爪を見せびらかすようにひらひらと動かす。 そして、一気にクロードの首筋に一本の赤い筋を引くとクロードの血がついた爪をぺろりと舐めた。
「大人しくしろ、俺に食われたいわけじゃないだろう？」
「何がしたいんだ、メイファ」
「そうそう、最初っから素直になればいいんだよ。じゃ、そこに座って」
側にあった椅子に押されるように座ったクロードにメイファがじっと視線を絡めてくる。 金色の瞳がどんどん大きくなるみたいに感じてクロードは目を閉じようとするが、瞼はまるで自分のものではなくなったかのように動かなかった。
「静かに、良い子だ、クロード。そのまま俺の目を見とけよ。なぁおまえは何でベオークに行きたいんだ？」
何でだろ？ 急に難しい問いをかけられたようにクロードは、はっきりしない頭で考える。
「……そうだ、おれ、おれの中から経典出してもらいたいからだ、うん、そうだ、たぶん」
「ふうん」メイファが相槌を打ってクロードの顎に手をかけて笑う。
「だったら別に冒険に出なくてもいいじゃない」
「え？」

だからねとメイファが噛んで含ませるように続ける。
「ビカラ教皇さまだって、別におまえが経典を返すなら命まで取ろうなんて思わないさ。おまえだっていわば、被害者なんだから。そうだろう？」
「そ、そうなの？」
「そうなんだよ、ラドビアスに何を言われたのか知らないけど。君が俺についてくれれば一件落着さ。別に何の障害も無くベオークに行って体から経典出して、おまえは故郷に帰ればいい」
何でもないことのようにメイファは軽く言ってクロードの肩を叩く。
――そうかも。　このままメイファについて行けばいいだけなのか。　なんだか、気負っていた背中の荷物がぐんっと軽くなってクロードは笑い出したくなる。　別にたいした事じゃ無いのか。

誘い16

クロードの様子にメイファの口元が耳まで裂けたと思うほど上がる。　魔獣の本性がちらりと覗くが、メイファの術にかかっている今のクロードにはそれも好ましく思える。
「俺についてくると言え、クロード」
「メイファに？」
「そう」
「おれ、メイファに……」
言いかけたクロードの言葉をふっとばすような轟音が外から聞こえた。　その音でクロードがはっと目を見開いて頭を振った。
「おれ、今呪をかけられていた？」
ちっと大きく舌打ちしたメイファがクロードの首に手をかけたまま、窓を見る。
「もう少しだったのに。来るのが早すぎないか」
「わたしをまけるとでも思っていたのか、魔獣の分際で」
低い声の主が、崩れた塀の残骸を跨いで敷地に行ってくるのをメイファが苦々しく見る。
「五百年前は、あんなに可愛かったのに。俺の背中にしがみついてさ。あんとき食い殺しておけば良かったよ」
「過ぎた事をぐちゃぐちゃ言うのは歳を取った証拠だ。魔獣なら獣らしくすることだな、メイファ」
「ラドビアス」
「クロードさま、だから言ったでしょう。その娘は災厄を招くと」
ラドビアスを見て嬉しそうだったクロードの口が即座に尖る。
「おまえ、いきなり説教かよ」
「アウントゥエン、サウンティトゥーダ」
飛び込んできた二人の大男の名前を呼んでクロードは呪を唱えた。
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』

一瞬に姿は魔獣に戻り、大きな口が躊躇うことなくメイファの腕を狙う。
「くそっ！」
メイファがクロードを離してその場から飛び上がる。　天井まで飛んで照明にぶら下がるとそのまま足で弾みをつけて大きく外に飛び出す。　その間に姿は真っ白い豹に変わっていた。
「今度は逃がさない」
サウンティトゥーダが窓を大きく打ち破って出て行く後をアウントゥエンが火を吹きながら続く。
「早くここから出ましょう、クロードさま」
「それはちょっと無理かも」
クロードが顔を向けた方へラドビアスも目を向ける。　すると、今の騒ぎで兵士たちが大挙して屋敷を取り囲んでいた。
「突破しますか」
「いや、派手なことをしたら犠牲が大きい」
クロードが応えたところで、二頭の魔獣が戻ってくる。
「逃げられた」
しょげる魔獣の頭を撫でてクロードは二頭を人型に戻す。
「おいで、ここは大人しく捕まっておこう。ランケイを連れてきてくれ、サウンティトゥーダ」
「何で捕まる？」
アウントゥエンが納得できないとクロードを見る。
「ここで逃げようとしたら、あの兵士たちを殺すか怪我をさせるしかない。わざと捕まって隙を見て逃げよう」
「分らん、そんなことをしても良いことにはならない」
ぶつくさと言いながらも、アウントゥエンは盾になるようにクロードの前に立つ。
「抵抗はやめろ」
そこで大声を出す警備隊長にクロードはくすりと笑った。
「何もしてないよ。ほら、丸腰だし。おれらは大人が三人に子供が

二人だぜ。こんなにたくさんの兵士がいるのかな」
手を挙げる少年にならって後の大人たちも手を挙げる。
「油断するなよ」と、言われたはずだが、どうやら相手をきっと誤解しているに違いなかった。　自分たちの目の前にいる族は得物を持っていないし、端から戦う気配も無い。
「拘束しろ」
警備隊長の声に抗う様子も見せず、捕り物はあっさりと終る。
五十人はいた兵士たちも肩すかしをくらったようにお互い顔を見合わせていた。
「そこの少年以外は牢につないでおけ」
隊長の言葉に男たちが少年を見る。
「いいから」
クロードの声に顔を向けて睨んでいた大柄な男二人も大人しくなった。
「おまえはこっちだ」
後ろ手に縛られたクロードは、そのまま領主の本殿の方へ連れて行かれる。　廊下にまで凝った模様を織り込んだ絨毯が敷かれている上を歩かされて、奥にある扉の前で一旦警備隊長は止まる。
「ガルラドさま、お言いつけの子供を連れてきました」
「入れ」短い応えが聞こえて、天井まで届く扉が開いた。
「おまえがクロードか。そこに座らせろ」
引き倒すように床に座らせられて見上げる先には恰幅のいい、白い絹らしいシャツに赤い丈の長いベストを着た中年の男が大きな椅子に足を投げ出して座っていた。
「この子供を捕まえたらおまえは、わたしのものになるという約束だったな」
「はい、ガルラドさま」
中年の男の背後からしなだれかかるように手を回しているのは、驚くほど妖艶な若い女だった。　砂色の体に白い艶のある長い髪。
金色に光る瞳、肉感的な大きな唇。

――こいつ、メイファだ。
アウントゥエンが変わることができるのだからメイファだったとしても女に変化できるのは驚くにあたらない。　そうは思うが、こいつ色気ありすぎだとクロードは毒づく。
「クロード、逃げられると思うなよ」
声を出さずに口の動きだけでクロードに話しかけてメイファは笑いながら、太った男の胸元に手を差し入れる。
「おい、痛い。止めろ」
うっとりとしていた男が慌てた声を上げる。　布地を通して赤い染みが広がった。　身を捩る男の体に手首まで突っ込んだメイファがにやりと笑う。
「さっきの約束は実は反対でさ、あんたが俺のものになるんだよ」
「やめっ……ひいいいっ」
女のような悲鳴が上がる。
「油っぽくて気持ち悪い体だけど、心臓はいけるかもな」
「うぎゃあああっ」
口から泡を吹いて暴れる男に構わず、女は男の体を腕一本で押さえつつ男の体内をさぐる。　そして大きく手を振り上げた。「ぶちっ」という腱の切れるような嫌な音とともに噴出す血飛沫。
「手が油でべとべとだ。人間の油は臭い」
誰に聞かすでもなく、口をゆがめながらメイファは未だにどくどくと鼓動を繰り返す赤黒い物を手にのせた後、ぐったりとした男を無造作に投げ捨てた。
「分けてあげようか、クロード？」
「いらないよ、そんなもん」
「美味しいのに」手に持ったソレをぺろりと舐めて目を細めたメイファは壮絶に綺麗なんだが、手に持っているのが人間の、しかも今屠ったばかりの心臓とくれば。
「気色悪い」
いくら人間を装ってみても、獣の本性は無くならないということ

か。　クロードを捕まえたら用済みとばかりに、ここの領主を殺すメイファにクロードはぞっとして後ろに足を運ぶ。
「大丈夫だと言ったろ？　おまえは食べないよ」
うっとりと心臓を口に運びながらメイファは笑った。　手も口も顎も流れる血で塗りかえられていくようだ。
「ラドビアスは、おまえを裏切るぜ」
その言葉にクロードがきつく睨むがメイファは心臓の残りを啜りこんでから、血だらけの口をにまりと上げた。

亀裂ー1

「おまえ、ラドビアスが前の主人であるカルラさまを裏切ってバサラさまをレイモンドールに引き入れた事を忘れたわけじゃないだろう？」
「そ、それはユリウスのことを死なせたくなかったからで……」
「あいつはそういう奴なんだよ。主人じゃなく自分の思いを最優先させる。ベオークに行けば、おまえの中の経典が取り除かれておまえは自由になる。そうしたら、自分は用済みだと思われないか。あいつはバサラさまを裏切ったんだ。きっと粛清される。そう心配してるはずさ」
「ばかばかしい、そんなわけないじゃないか」
クロードがきつく言い返すと、メイファは、「いや、違うな。そうじゃない」そう言って顎に指をかける。
「なんだよ」
「いいことを教えてあげるよ。おまえをラドビアスが裏切るっていう根拠」
耳元で囁いたメイファの言葉にクロードは口を開けたまま、目だけを遠くにさ迷わせた。　そこに助けがいるわけでも無かったのに。
聞きたくないという気持ちと、大見得を切る理由を知りたいという気持ちの板ばさみになってクロードは黙り込むしかない。

一方、ラドビアスと魔獣の三人とランケイは男女に分けられて地下の牢屋に入れられていた。
「なんとかしてくれ、ラドビアス」
サウンティトゥーダがその怪力で牢屋の鉄柵を曲げようとするが、手を触れただけで鋭い痛みが襲う。　メイファの言いつけなのか、鉄柵には金属でひっかいたように魔よけ呪文が刻まれていた。
「我に任せろ」

そこに壁に背をつけて成り行きを見守っていた赤い髪の男、アウントゥエンがのっそりと前にやってくる。
「良い案があるのか」
ラドビアスに頷くと「くっ」と歯を食いしばる。　途端に揺らぐ陽炎のような中から女性化したアウントゥエンが現れた。
「おまえら、我が腹が痛いと言うから、騒げよ」
詳しい説明抜きに言うが早いか、床に転がってうんうんと唸り出す。
「おいっ、誰かっ。腹が痛いらしい。来てくれ」
それを見てラドビアスが大声を出せば、サウンティトゥーダが壁をがんがん叩く。
「煩いぞ、おまえら」
間を置かずにがちゃがちゃと金属の擦れ合う音をさせながら、番兵が足音荒くやって来た。
「仲間の一人が腹痛をおこしたようだ。見てやってくれ」
「ちっ、仕方ないな。おまえら壁に手をついて立ってろ」
重たい戸を開いた番兵が驚いて床に転がる女に手をかけた。
「何で女がここに男と一緒に入ってるんだ？　おい、大丈夫か？」
「う……ん、お腹が……」
苦悶の表情の女が番兵の手を取って自分のお腹に導いていく。
「おいおい、止めろって」
言いながら、女を観察するように見ると女はむっちりとした肉付きといい、肉感的な唇といい、むしゃぶりつきたくなるような良い女だった。
「女、医者を呼んでやる。ちょっと出ろ」
手を貸して立ち上がらせると、女はしがみついてくる。　悪い気はしないと鼻の下を伸ばした番兵の腰に女の手が回る。
「医者はいいから、鍵をよこせ」
うっとりしていた番兵が我に返る前にアウントゥエンの腕が彼の首をへし折った。　鈍い骨の折れる音がして一声も声を上げること

なく番兵は倒れる。
「こいつ、食っていいか」
鍵をサウンティトゥーダに渡しながら、アウントゥエンはぺろりと自分の上唇を舐める。
「だめだ、今は人型だろう。時間がかかりすぎる。それより、ランケイを出してやれ」
ラドビアスのすげない言葉に、口を開けて嬉しそうに見ていた二人は途端にがっかりした顔になってぞろぞろと牢屋から出て行った。

「どうする、聞きたいかい？　クロード」
「聞くな！　メイファ、主から離れろっ！」
大声で割って入ったのはサウンティトゥーダと、アウントゥエンだった。
「サウンティトゥーダ、アウントゥエン、何でここが分ったの？」
「クロードの微かな匂いを辿った」
「ちっ」
舌打ちをして後ろに下がるメイファの足元に短剣がずさりと刺さる。
「これは返すぞ。使い魔を足止めして我々をまけると思っていたのは早計だったな、メイファ」
「おまえこそ、あんなちゃちな魔物を俺が見逃すと思ってたのかよ」
ラドビアスとメイファが一定の距離を保ちながら、掃きだし窓から外に出る。
「邪魔立てすると食ってやるぞ、ラドビアス。この裏切り者」
獣と人間の間のような耳障りな声で吼えるように言うとメイファの爪が五本いっぺんに長く伸びていく。　そのまま変化は止まらず、一つになると大きな長剣状に形成された。
それを見てラドビアスは、落ちていた細い枝を拾うと呪文を唱え

る。
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
枝は姿を変えて大型の長剣になった。
「うるさい口を閉じさせてやる」
「やれるもんなら、やってみな」
真横に剣を構えたラドビアスにメイファが笑いながら豹のように飛び掛ってきた。　顔の横から突き刺すように伸びた爪を振り払うように弾くと、金属を打ち合ったような音が響く。
「おまえがクロードをベオークに行かせたくないのは、自分の身が可愛いからだろ、ラドビアス」
「何が言いたいんだっ」
形は質問だが、ラドビアスがその答えなど知りたくは無いのは、その切り込む剣の鋭さが物語っている。　上から叩くように振り下ろす剣をメイファは横っ飛びに大きく跳んで交わすと庭先の木に飛び乗った。
「おまえはベオークではお尋ね者だ。バサラさまを裏切り、カルラさまがビカラさまの宝物である魔経典を盗む手助けをし、さらには逃亡にも加担。あげくにカルラさまを殺した少年の従者となっているんだからな」
メイファの乗った枝が大きくしなると、反動を利用してまたもラドビアスの頭上から飛び掛ってきた。
「おまえは、クロードに従っているふりをしながらその実は隠れ蓑として使っているだけなのさ。このしもべのできそこないがっ」
大声で語る内容は、ラドビアスに聞かせるというよりは、自分に向けた言葉なのだとクロードは思った。　メイファがさっき言いたかったことは、これだったのか。
おれが利用されているという事。　違う、そんなはずは無いと思いながらもメイファの話にも一理あると思ってしまう自分に戸惑うクロードだった。

亀裂１２

「クロード、メイファの言うことを信じるな。奴は暗示の術をいつの間にかかけてくる」
太い腕でがしりと頭を撫でられて、クロードは目を見張った。
また、術にかかるところだったのか？　確かめるようにアウントゥエンを見ると大きく頷いた。
「クロード、元の姿に戻してくれ」
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
声をかけて触れると、サウンティトゥーダが相対しているメイファとラドビアスの間に飛び込んでいく。
大きく振り回す長い尾を避けながら、爪をラドビアスに刺そうとすることに気をとられた一瞬、メイファの胸元に大きな赤い塊が飛び掛っていった。　大きな口を開けたアウントゥエンに向けてメイファが鋭い爪を向ける。
押し倒したメイファの上着を破り取るように首を振って素早くアウントゥエンはクロードの元に戻った。
「クロード、指輪を。護法神はこの中だ」
「うん」
上着を探ると、刺繍に入った袋がぽろりとクロードの手の中におちる。　急いであけると手の中に握った。
『変じよ』クロードの声に応じて指輪は長剣に姿を変えた。
「指輪はおれの元に帰ってきたようだぜ、メイファ」
「ううん、苛々するなぁ。雑魚のくせしてちょろちょろと動き回りやがって」
メイファはクロードが『護法神』を取り戻したのを見て戦意を消失したのか、嫌そうに呟くと姿を豹に戻して屋根に飛び上がった。
「クロードさま、もうなんのかんの言わないで逃げましょうね」
ラドビアスが子どもを叱るようにクロードを見る。

「分ったよ、そんな言い方すんな」
魔獣に乗り込んだ途端にたくさんの矢が飛んでくる。ランケイを自分の前に荷物のようにのせたラドビアスがサウンティトゥーダに跨るとすぐさま魔獣は飛び上がった。
「乗れ、クロード」
クロードがアウントゥエンの背中に乗ったのを確認してアウントゥエンは空にまっすぐ飛んでいく。　クロードはあせってアウントゥエンにしがみついた。
やっと水平になるとアウントゥエンは下に向けて大きく口を開けた。　ごおっという音とともに吐き出したのは炎だった。
「やめろ、アウン」
クロードの言葉の甲斐も無く、聞こえるのは、大勢の阿鼻叫喚の叫び声で。　建物からも火の手が上がり、残った兵士もクロードどころでは無くなった。
「アウントゥエン……」
「クロード、こうなったのはおまえのせいだ」
ばしりとアウントゥエンに言われてクロードは言葉を失う。
「前に何人かの兵士を倒して逃げればこんな事にならなかった」
「……そうだな」
おれは、目先のことばかりに捕らわれていて、つい逃げてしまう。使役している魔獣に諭されるなんて笑えない。　むやみに人を傷つけるのは論外だが、それを嫌って結局もっと酷いことになる可能性を考えないといけないのだ。
「おれは指揮官失格だよな」
ぽつりと漏らすクロードにアウントゥエンが小さく火を吹いた。
「我はクロードのそういうところが好きだ。好き？　アイシテル？　好む？　まあこの中のどれか……だ」
「ありがとう、アウントゥエン。おれ、おまえたちが安心して命令を聞けるようになるから。今回は――」
クロードは、体を倒してアウントゥエンの首筋に顔を埋めた。

――ごめん、みんな。　燃えてしまった人も何もかも。ごめん。
あの兵士たちにも家族がいて、生きるべき人生があったはず。
何を優先して何を諦めなければいけないのか。　自分には考えなければならないことが多い。　だけど、次は読み間違えないと強く心に誓った。

「今、ここを出ていくなら見逃してやるが」
ラドビアスが独り言のように前を向きながら言う。
「嫌と言ったら？」
体を起こしてラドビアスの前に座った少女もラドビアスを見ない。
「メイファは引き上げたようだ。おまえも引け」
「何のことだか分らない。意地悪ね、あんたは」
ふんと鼻を鳴らすラドビアスにランケイは斜め後ろにいるクロードに顔を向ける。
「クロードに変な事を吹き込まないでよ、ラドビアス」
「クロードさまは聡い方だ。気づいているかもな、おまえのきな臭さに」
ランケイは、唇を噛んで黙り込んだ。　自分がやっていることの卑怯なやり口は、否定できない。　クロードの親切心に付けこむ自分は最低だと分っているから。
「だけどあたしは弟を助けたいのよ」
「わたしに弁解しても仕方ない。良心が痛むのを軽減するためにする打ち明け話などに興味も無い」
冷たく言い放つラドビアスの言葉がランケイの頬を打つようだ。
「この先、これ以上わたしの主人を窮地に陥れることが分ったら弟には会えないと覚悟をすることだ」
そこでサウンティトゥーダが賛同するように大きく吼える。　彼にしても主人に災厄が降りかかるのはごめんなのだ。

「クロードは愛されてるのね」
その彼を騙そうとする自分は罰が堕ちるのだと思う。　分ってる、分ってるのだ。　だけど地獄に行くのは弟が無事に帰ってきてからにしてくださいとランケイは手を組んで祈った。

秘めた感情

「おまえが失敗するとはね」
高い位置で結んだ髪がゆらり、と揺れた。
「ふんっ、たまには俺だってしくじることもある」
メイファが威嚇するように「シャーッ」と声を上げた。
「人型なんてやめて、猫のままでいたほうが良くないか？　そうすれば主もお側につけて可愛がってくれるさ。可愛い猫ちゃん」
「うるさいっ」
飛び掛ったメイファの鋭い爪は相手の細い剣で弾かれた。
「今度はわたしが行くとするか」
男は釣り上がった一重の目を細めて剣を腰に収めた。
「主の元に帰っておけ、メイファ」
男は、大きな鷹に姿を変えると空へ飛び立った。

じりじりと焼けるような日差しを避けて岩山の影に潜んでいたクロードは、柔らかいものがふいに触れたのを感じて足元に目を移す。
「アウントゥエン、どうした？」
ずっと寝ているのにも飽きたのか、赤い魔獣が構ってくれとその長い尻尾をクロードの頬に押し付けてくる。
「なんだ？　もう少し休んでろ。夜になったらまたおれたちを乗せて飛ばなきゃならないんだぞ」
言いながら、耳の後ろを撫でさすってやると魔獣が目を細めて大きい頭を摺り寄せてきた。
「クロード、あいつは何か変だぞ。あの女」
ごろごろと喉を鳴らしながら言う言葉にクロードは「そうだな」と笑った。
「知っていたか？」

「うん」
「実は前にサウンティトゥーダに調べさせたんだ」
サウンティトゥーダの名前を出されてアウントゥエンは鼻息を荒く横を向く。　それを見てクロードはわしゃわしゃと魔獣の頭をかいてやった。
「ランケイの村は全焼していた。生き残っていた人間に話を聞いたよ。攫われたのは弟だけじゃなかった」
ん？　と顔を向けた魔獣にクロードは淡々と答える。
「ランケイも捕まっていたんだよ」
「おそらくおれたちの動向をさぐるのと、メイファのもとに誘導する役目を担わされていたんだと思う」
「だったらやっぱりあいつは敵だ。喰っていいか？」
「だめ」
ぽんぽんと頭をたたくとクロードは声を潜めた。
「これはおれとサウンティトゥーダとおまえだけの秘密だ。いいな」
「秘密か……それは面白い」
獰猛な顔で魔獣が笑うの見てクロードは立ち上がった。
「水をもらってくる」
そのままもう一つの大きな日陰にいるラドビアスのところに行こうとしたクロードの足が止まる。　クロードから少し離れた岩の上に水筒が置いてあった。
「ラドビアス、来たのか」
ここからは、岩の影になって彼の姿は見えない。　いつまでたっても彼は気安くはならない。　従者の立場を守っていて友人という間柄には決してならない。　なんでも分っているという安心感と、線を引かれているという緊張感。
そこから一歩も前進も後進もしない。　寂しくもあるがべたべたとされるのもクロードには馴染めないものだ。
「誰が黒幕なのか、ランケイから目を離さないでくれよ」
当たり前だというように魔獣が低く唸り声を上げる。　クロード

はそれを見ながら自分の手をゆっくりと開いた。
――この手はどんどん汚れていく。　この目はどんどん殺戮に慣れていく。　人は一度でも人を殺してしまうと歯止めがきかなくなるのか。
ランケイの両親や住んでいた村民がほとんど殺されたと聞いても前のように憐憫の情ばかりでない自分は確かに変わったのだ。
ランケイと弟を攫ったのは、ハイラだったのだろうか。　やり方が捻くれていて背後の人間が楽しんでいるような気すらする。　ベオークの人間全員を知っているわけではないが、心当たりならある。
それは、ユリウスと名乗っていたクロードの兄であり、魔道の師でもあったカルラの実の兄だ。　カルラと番うために必要に追い回していた。　そのバサラのためにユリウスは命を落とした。
悪辣な事も笑顔でこなす人間。
そして……依然としてラドビアスの主人なのだ。　ラドビアスには彼の龍印が背中に刻まれている。　バサラの龍印のおかげで命を永らえている。
それは揺るがない事実なのだ。
バサラなんだろうか。　彼だとしたら、少年はまだ生きているだろう。　それならランケイの行動も理解できる。　おれをあっさり攫うこともできるだろうに、わざとこんな罠をしかけてくるのはあの男だからのような気がする。
ラドビアスは、バサラをどう思っているのだろう。　ユリウスが死んで彼の竜印が消えた今、彼の体にはバサラの刻印した龍印があるだけだ。　僕（しもべ）はそれを刻印された主人を慕うものだというのに。
だとしたら、彼はどうなのだろう。　直接聞けばいいのかもしれないが聞いてもラドビアスが素直に答えるかは分らない。
心に秘めている感情は彼のもので。
命令して聞きだすものではないのだから。

案内人

「クロード、いつまで待つの？」
ランケイに声をかけられてクロードは意識を戻し、彼女に向けて水筒を差し出した。
「日が翳ったら出発するよ、もう少し待ってランケイ」
水筒を受け取りながらランケイはクロードを見る。　自分より二つは下に見える華奢な体。　艶やかでわずかな光りにも反射する銀が勝った金髪。　深い湖の底のような瞳。　どれをとってもこんな乾燥した岩山で汚れたマントに身を包んでいる人物では無いと思う。
そう思う気持ち、これはなんだろう。　恋なんだろうか。　いや、憧れに近いのだと思う。　貧乏で親の無い自分にとってのあこがれ。
魔術に秀でて、優秀な従者と眷属を持った少年。　神と言われるベオークの神も一目置く存在。　憧れと同時に感じるのは、深い嫉妬だ。　生まれでこんなに人は生き方に差が出る。　置かれた立場も何も。
選んだわけじゃないのに。
羨ましくてくやしい。　自分はだからクロードを騙しているのだ。
弟という存在を隠れ蓑にして。
「肩の力を抜いて、ランケイ」
覗きこむように顔を見られてランケイは赤くなって水筒から水をごくりと飲んだ。　生暖かい、しかし奇跡のように美味いと感じる。
だが、自分は一人きりだ。　今この瞬間もクロードを騙しているのだと思った途端に喉の奥で甘露が泥水に変わった。

日が沈むと、砂漠は驚くほどその姿を変えていく。
どんどんと下がる気温は寒いと感じるほどになる。　そして、あれほど死んだように何もなかった真っ白な土地に灯る二対の目、目。
捕食者たちが、夜に動くものを襲うためにねぐらから出てきてい

るのだ。　活気があるとさえ見える夜の砂漠に、クロードたちも動き出した。
「今晩中に次のオアシスまで行きますよ」
魔獣につけた鞍の調子を見ながらラドビアスが声をかけてきた。
「うん、それとランケイに薄い毛布を出してあげて。上空は寒い」
「承知しました」
クロードのことなら、どんな些細なことにだって気を使うラドビアスだが、相手が違うと途端に無頓着なのだ、この男。
上を見上げれば、漆黒の空にちりばめられた宝石の数々。　瞳が反射して光る。
「綺麗だな」
魔獣の上から見る景色にクロードは夢中で声を上げる。
「あの光はなんだろう？」
一列に並んだ光りが砂漠の真ん中を渡っていくのが見えたのだ。
「あれは砂漠の民、楼蘭族をやとったキャラバンが砂漠を越えているのですよ」
「キャラバン？」
はい、と応えてラドビアスが自分が乗ったサウンティトゥーダをクロードとランケイの乗ったアウントゥエンの真横につける。
「この砂漠を越えようとすれば、大回りをするか、砂漠を横切るしかありません。ですが、なんの準備も無しでここは超えられません」
「肉食獣が狙ってるから？」
「それもありますが、旅人を狙うのは獣ばかりではありません。楼蘭族の裏の顔は盗賊ですから」
「ええ？」
「一般にここを旅するには、金を払って商人のキャラバンと一緒に行動するのが普通です」
広大な砂漠は、ともすると自分の位置を見うしなってしまう。
朝までに予定していたオアシスに着かなければ確実に死んでしまう。
昼間は灼熱の鍋底にいるようなものなのだ。

「獣よけの薬草を混ぜた松明が無ければ、容易く人間など襲われてしまいます」
だから案内人を雇う商人のキャラバンにお金を渡して一行に入れてもらうのが一般的だ。
個人で案内人を雇うのはかなりの金持ちだということでもある。
「貧乏人はここを渡れない――そういうことか」
どんな過酷な自然よりも、やはり人が恐い。　そういうことだとクロードは思う。　ちらちらと小さい松明がまばらに見えるのはきっと、お金を用意できなかった旅人なのだ。
案内人を雇えない者は、危険を侵すしかない。　仕事にあぶれた案内人たちは、途端に追いはぎに姿を変えるということか。
知らずに眺めていた時にはあんなに綺麗だと思った光りが今は禍々しく見える。　人は知らない者にはとことん残虐にも卑劣にもなれるのだ。　右手でお金を受け取りながら、左手には刀を携えている。
気をつけないと、人は良い人ではいられない。　放っておくとどんどん悪に向かうものだとクロードは思った。　――そしておれもすでに潔白ではない。
馬のような大型の背中にこぶのある動物にのった小隊が現れて、クロードの下からアウントゥエンの緊張した声が聞こえた。
「あいつらは、弓矢を持ってる。我らを襲うつもりだぞ、高度を上げるか」
「おれたちを？」
空にいるおれたちを襲うなんて偶然なんだろうか。　考える暇も無く、たくさんの矢がクロードたちにめがけて飛んできた。
「わたしが落としますから手をお出しにならないでください」
ラドビアスが印を組む直前にアウントゥエンが火を吹いた。
「止めろ、アウントゥエン！」
慌てたように言うラドビアスが消火の呪文を唱えようとしたが、火の勢いは思いの他早く、下にいた盗賊団を焼き払った。

「どうした、ラドビアス」
「アウントゥエン、サウンティトゥーダ、高く飛べっ」
クロードに応えることもなく、叫ぶラドビアスの声が終る前に、何かが恐ろしい勢いで飛び出してきた気配をクロードは感じた。闇の中から砂を巻き上げて伸びる長いものが何本も地面から突き出ていた。
その何かが体に巻きついて大きく振り回されて、クロードは意識を失いかけるのをぐっと堪えて大声を出す。
「変化せよ」
指輪を剣にして、ただもうやみくもに振り回した。最後の一振りに手ごたえを感じたと思ったら、地響きのような低音の唸り声と共にクロードは大きく振り飛ばされて今度こそ意識を失った。

「ラドビアス……」
一体どうしたんだと問いかけて、さっきの出来事がいきなり蘇ってクロードは目を覚ました。上体を起こして周りを見ると、そこは薄暗くて湿ったところだった。だんだんと目が慣れてくるにつれて、ここが地下なのではないかと気がつく。穴倉のような乱暴に掘られた横穴。地上からどのくらい下なのかは分からないが、かなりひんやりしていた。今が昼間ならかなり深いとみたほうがいいのか。
慣れた目に穴の隅に転がっている人が見えた。こちらに寝返りを打ったかと思うと、目が合った。
「おい、やっと気がついたか」
がっしりとした手が伸びてきてクロードの頭をかき混ぜた。
「あなたは誰ですか」
「俺か？　俺は案内人さ」
男は笑いを含ませて答えた。

旅の道連れ

「案内人？　楼蘭族なんですか」
さっきのラドビアスの話を思い出してクロードは笑顔を作ろうとしたが上手くいかない。
「ああ、俺は楼蘭族だな」
赤銅色の肌には呪学的な刺青がいたるところにある。　きっと服の下の体も同じなのだろう。　黒っぽい茶色の髪は逆立つように短くしてあり、顎のしっかりした顔の造作は、アーリア人に近い。
「おれ何も持ってないですけど」
「なに？」
クロードの言葉に一瞬きょとんとした顔をした男は、クロードの言ったことの意味が分かって豪快に笑った。
「おまえ、砂漠のど真ん中に転がっていたんだぞ。放っておいたら今頃黒こげだった。金が欲しいんだったら、放っておいたさ」
「良かった。だって小父さん、恐い顔してるんだもん」
こどもを装って無邪気に笑いかけながら、クロードは油断無く辺りを窺う。　にこやかに笑っている人が腹の中もそうだと信じるにはクロードは経験を積みすぎている。
人は生活のためにはいくらでも顔を作ることは造作もない。　金が無いのならクロード自身が商品になる――つい、この間あったことだ。
「おれ、仲間とはぐれてしまったみたいなんだ」
「そうか、俺がおまえを見つけたときにはおまえは一人きりだったな。おまえ、サラマンダーに襲われたんだろうぜ。奴の痕跡があった。お仲間は今頃奴の腹ん中かもな」
言ってしまってから、男はしまったという顔をしてクロードを見た。
「俺の名前はザックだ。一人で案内人をしている。まあ、はぐれも

んだ」
「ザック、おれを助けてくれてありがとう。おれはクロード」
ああと頭をかきながら差し出したクロードの手を握る男は「さっきは済まんな。つい言っちまって」と頭を下げた。
「ううん、その可能性の方が高いんだろ？　でも、そのサラマンダーって何？」
さらっと言うクロードと名乗った少年の様子にザックのほうが驚く。　見知らぬ男に助けられて、自分の仲間はバケモノの腹の中かもしれないと聞かされたのにこの落ち着きようは一体なんだ。
見た目は、こんな細っこい体で旅をしてきたなど嘘のような少年。
着ている服はそれなりに年季がいっているようなんだが、どうにもそこらにいる子どもと同じに見えない。
ともかく、
「飯、食うか？」そう言って取り出したのは動物の干し肉と固焼きしたパンだった。
「ありがとう、ザック」
受けとって口に入れると味も何もついていない。　肉独特の匂い鼻につくが取りあえずお腹はふくれそうだった。
ザックは干し肉とパンを何も言わずに食べる少年を見て少し見直した。　それは、楼蘭族以外でこの食事を文句も言わず食べる人間はあまりいないからだ。　確かに味付けは薄い。　だがそれは理由がある。　塩気を効かすと喉が乾く。　水はここでは貴重なのだ。
塩分を効かさなくても砂漠では腐る心配は無い。
そして、煮炊きをするのは昼間だけに限る。　なぜなら――、
「松明以外で火を焚くのは非情に危険なんだ」
ザックは硬いパンを飲み下そうと四苦八苦している少年を見ながら話し出した。　一緒に行くにしても、別れるにしてもこれは知っておかなくてはならない。
「夜に地上で火を使うとその熱を感知してサラマンダーがやってくる」

「熱？」
ああ、だからアウントゥエンが火を吹くのをラドビアスは止めようとしたのだ。
「サラマンダーはとんでもなくでかいトカゲだ。砂漠の地下に棲んでいる。夜になると獲物を求めて地上すれすれのところを移動している」
「それで熱を感じると」
「大きな口を開けていくつにも分かれた舌で獲物を引き込んで食べる」
だから、と言ってザックは自分のせいのように黙りこんだ。　おまえの連れは生きていないだろうと言外に語っていた。
「そういうことか。ザック、ありがとう」
心配しているザックの気持ちを知ってか知らずか少年は笑顔を向けた。
「この先、何に気をつけないといけないか教えてよ、ザック」
「おまえ、恐くないのか？　いや、それより連れのこと、悲しくないのか？」
平然としている少年がほんの少し気味悪くなってザックは語気を強めた。　ザックの様子に少年は薄笑いで応える。
「おれの連れはなかなかしぶといからね、たぶん大丈夫だ。それより、ここから一番近いオアシスってどこなのかな？」
「一人で行く気か？」
「だっておれ、金目のもの持ってないからさ。ザック、金ないと雇えないだろ？」
「おまえ、度胸があるのか、ただ物を知らないバカなのか分からないな」
ザックは大きなため息をついた。　この砂漠をこの少年が一人で渡れるわけがない。　俺だってただ働きなんかごめんなんだが。死ぬと分かってるのにこのままこいつを一人で追い出すわけにもいかない。

「くそっ、おまえをここに運んで来るんじゃなかったぜ。次のオアシスまでついて行ってやるよ。その代わり、俺の言うことを聞けよ坊主」
ザックの言葉に思いがけず、満面の笑みが返ってきた。
「ありがとう、俺の連れに会えれば金は払えるよ。ザック、よろしく」
なんだか、初めからこうなると分かってやがったんじゃないかと思うくらい落ち着いた少年に、ザックはいまいましく思いながら「分かったよ」と返した。
まあ、こいつの連れが生きていればの話だが、それは言わないほうがいいだろう。落ち着いた振りをしていても、こいつはまだまだがきなのだ。それに実をいうと仕事にあぶれて次のオアシスに行こうとしていた所でもあったのだ。だが、それは恩に着せておくために黙っておこうとザックは思った。

隠れ家

「次のオアシスまで行くまでのおまえの立場だけど」
「ザックの弟子でいいよ、もちろん。連れがいない場合はお金払えないし」
ザックの話の先を読んだように少年は言った。
「いいよって、おまえ何様なんだ？　いいから俺の言うことを黙ってきけ」
目の前の少年の頭をはたいてザックは立ち上がった。
「ここは、俺たち楼蘭族だけが知っている非難所だ。こんな小さな穴倉が砂漠のあちこちにある」
そしてそれは楼蘭族が絶対漏らしたくない秘密であるのだろう。オアシスまでは何も無い。　そうでなければ案内人の仕事にも支障がおきる。　ここに楼蘭族でない少年を泊まらせたことが仲間に分かれば何かと問題にもなるだろう。
自分が思いのほか厄介な事に首を突っ込んでしまったのを今更思い知るザックだった。
「おまえ、いくつだ？」
「その質問には答えにくいなぁ。いくつに見える？」
「なんだよそれ、酒場の飯盛り女みたいな返事じゃねえか。もしかしておまえ女か？」
その年頃のこどもは性別が分かりにくい。　もしかして、危険回避のために女が男装しているのではないかとザックは思ったのだ。
見た目は、そう見えないでもない。　アーリア人は小さいうちは、華奢で美麗なこどもが多い。　この砂漠を越えるアーリア人のこどもなど数えるほどしか見たことが無いが、その中でもこいつはぴか一だと思う。
なにせこぎれいな顔なのだ。　銀色のような金髪は艶やかで、群青色の瞳は長い睫が影を作るほどだ。　高いが小鼻の小さい鼻に淡

い桃色の花びらみたいな唇。
「女みたいなんだよ、おまえの顔」
「ええ？　おれ、男だよ。見た目は十四歳くらいに見えるだろ？　実は十七歳なんだ。がきっぽいから言うの嫌なんだ」
ため息交じりでその少年、クロードはがっくりと肩を落としてみせた。
「十七歳？　そりゃ、見えんな。まあ、その頃っていうのは急に大きくなるからな。おまえもこれからかもしれないぞ」
なんだか、こいつに会ってから俺は失言ばかりしているとザックは思った。　いや、違う。失言なんて今まで考えもしなかった。結局気遣う相手に会わなかっただけかと思い至る。　がきの相手などしたことが無かったのだ。
繊細そうな顔を見せるアーリア人の子ども相手ということがザックを戸惑わせる要因らしい。
「なぁ、おまえどこまで行くんだ？」
「砂漠を抜けて、その先に」
具体的に言わないのは、警戒しているのだろう。　お坊ちゃんと見せていて、結構場数を踏んでいるらしいとザックは鼻を鳴らした。
「まあいいか。あと少しで日が沈む。そしたら出発だ」
「なあザック、あんたは一体幾つなんだ？」
「俺か？　二十八だ」
「二十八？　うそ」
「なんだよ、その嘘ってのは。歳より若いっていう言い方には聞こえなかったぞ」
おいおいとクロードを見ると彼は「二十八か」ともう一回言った。
「しつこいぞ、おまえ」
「いや、ごめんなさい。おれの知り合いに同じ歳がいるからさ。縁があるなと思ってさ」
「誰だよ、そりゃ」
うんと曖昧な返事を返してクロードはラドビアスのことを思い出

していた。　実際は五百歳以上なんだが、見た目は二十七、八歳。
　ついでに言えば、ユリウスの兄、そしてラドビアスの龍印の刻印の主バサラもそのくらい。　彼のもう一人のしもべ、インダラも同じはずだった。
「おれの連れだよ、はぐれた仲間」
　クロードの返事にああ、またやっちまったよとザックは頭を掻いた。
「そ、そりゃ思い出させて悪かったな」
「別にいいよ。ザック、おれにそんなに気を使わなくても大丈夫」
　なんだか反対に慰められてザックは調子が狂う。
「変な奴だな、おまえ。もういいや、靴にこの枠を嵌めろ。砂地でその靴じゃ歩きにくいだろう。おまえ、本当に砂漠を渡ろうとしてたのか？」
　投げるように渡された楕円の木枠がついたものを靴に嵌めて、ついていた革紐で結びながらクロードは苦笑する。
　――まさか、魔獣に乗って空を飛んでいくつもりでしたとは言えないよな。
「うん、まさかこんなに大変とは思わなくて。案内人のことも知らなかった」
「おまえ、死んでたな、やっぱり」
　そう断言してザックは持っていくものの点検を始めた。
　すっかり自分の支度を終えたザックがクロードを見ると、渡された必要最低限の生活用品と水筒を入れた鞄を斜めがけしてクロードも支度を終えていた。
「おまえさ、結構旅生活が長いのか」
　ふと思いついたように聞くとクロードは「そうだな、三年目に入るよ」とこちらも何気無く応えた。　返事を聞いてなにか込み入った事情がありそうだとザックは思ったが、ずかずか入る気もしない。
　自分を含めて人は何がしか降ろすことのできない荷物を背負って生きている。　それが他人から見えて小さいか大きいかなど本人に

は関係ないことだ。
「じゃっ、行くぞ」
「うん」
通路は暗くて人がやっと通れるくらいの土を固めたものだった。
手で触れてみてクロードはそれが粘土だと知る。　砂地の下には粘土の層があるらしい。
しばらく並行に歩いていたが急に天井が抜けて、見上げると粘土の層に石が等間隔に打ち込まれて足場になっていた。
「これを登るぞ、俺の後に来い」
ザックがすたすたと登っていく後をクロードも続く。
手も足も痺れてきたとクロードが思った頃、大きな石が軋む音とともに冷たい風が一気に穴に吹き込んできた。
「手に掴まれ」
先に上がったザックが差し出す手に捕まりながらクロードは新鮮な空気存分にを味わった。
「ありがとう、ザック」
「なんだよ、気持ち悪い。手を貸しただけだろ」
ザックの言葉にクロードが笑いながら言う。「違うよ」
「何が違うんだ？」
「あんなに長い壁をたぶん俺を背負って降りたんだろうなと思ってさ」
ああ、そのことかとザックは納得の表情になった。

砂漠の夜はなぜこんなに静かなのだろう。　聞こえるのは風が砂を連れ去ろうとするさらさらという音。　遠くには確かに肉食獣の呼び合う声もするのに、音は昼間よりずっと遠くへ拡散してしまうようだ。
空が眩しいほど明るいのと対象的に地面は漆黒で自分の身を守っている。　昼間に受けた火傷の跡を修復しているかのように寡黙だ。

その静寂を破ったのはザックの後ろから慣れない靴に苦労しながら歩いてくる少年だった。

「ねえザック、案内人を雇えない人間を襲うのはおかしいとは思わない？」

突然言われた言葉にザックは身構える。

「正義にもとるとか、人間としてうんぬんとか説教垂れる気ならごめんだぜ」

「そうじゃなくてさ」

「じゃあなんだよ」

「貧乏人なんて奴隷として売るしかない。あとは、案内人を雇うほうがいいという宣伝かな？　ともかく仕事にあぶれたのに、そんなんじゃたいした稼ぎにならないんじゃないかと思ってさ」

「そりゃそうだが」

ザックはいきなりこのがきは何を言うつもりなのかと恐ろしくなった。

砂漠に棲む悪魔

「狙うなら国の保護を受けた商人の隊列じゃない？」
「お、おまえ、何言ってる？」
サラマンダーの脅威さえ撥ね退けるほどの警備をつけたハオタイ国公認の商隊に斬り込めとこの少年は言っているのか。
「おまえばかかよ。あいつらときたら軍隊一つ連れて来てるみたいなんだぞ。あれに手を出すって何ばかなことを。もしできたとして報復にあったらどうするんだよ」
「だからさ、サラマンダーを使うんだよ。魔物相手だったら報復も何も仕方ないだろ？」
「げっ、何言い出すと思えば」
サラマンダーを使うなんてどうやるんだよ。　しかもそれを制御なんてできないだろ。　やっぱりこいつは頭の箍（たが）が緩んでいやがる。
気味の悪いものでも見るようにザックが自分の後ろで笑っている綺麗な人形のような少年を眺めた。
「一体ではだめなんだったら、二体か、三体でどう？」
「おい、いい加減にしろよ。出来もしないことを延々としゃべるなんて、おまえ本当にがきだな。口を閉じろ、前向いて大人しく歩きやがれ」
はっと大きく息を吐いてザックは踵を返して歩き出した。
「ザックたちの避難所のある所を地図に記しを付けてみてよ。そしたらサラマンダーの移動経路が分かる。昨日出現したところと前に出たところ、その他を吟味すればどこら辺にいるのか分かるんじゃないのか？」
「なんで？」
「ザックたちの避難場所は深く掘り下げてあったよな。たぶん、あの下も粘土層が続くならその部分はいくらでかい魔物だって避けるだろ。柔らかい砂を掘るのと、固まった粘土を掘るのとは労力が桁

違いだ。獣だったら本能的にそんなところは移動しないはずだからね」
ザックの足は完全に止まっていた。
「それにあんなに大きな個体がいくつも重なったテニトリーにいるわけがないんだから、おれが襲われた辺にいるのはあれ一体だと思う。番(つが)いという考えでもまあ二体。上手く誘導して狙わせればいい。人間が消えたあと、ゆっくりとお宝を頂戴すればいいんだよ、ザック」
こいつは本当にかわいそうなこどもなのか？　ザックはやっと気がついたように息を吐いた。
「おまえ、そんな恐ろしいことを良くも平気で言うよな。俺らは生活のためにやむなく非道を働いていることをいつだって腹ん中で思ってるっていうのによ」
「いくら腹で思っていたってやることやってるのなら、それは思ってないのと同じじゃないか。ザック、言い訳しながら悪いことするなんて止めたら？」

なんでか喉が乾いてならなかった。　ただ、酷く喉が乾く。
人は恐ろしいと感じたときにも喉が乾く。　――ザックは喘ぐように空気を飲んだ。
「で、堂々と悪いことをしろってか？　おまえ悪魔か？」
「生きる手立ての話をしてるんじゃなかった？　ザック。生きるためには何がしかを犠牲にしなくてはならない。それが、動物か、植物か、それとも同胞たる人か――その違いだと思うけどな」
「それだけっておまえ……」
外にいるのに狭いところに無理やり押し込められたような息苦しさでザックはいくら息を吸っても空気は肺まで届かない――そんな気がした。

「その話はまた後だ。先を急ぐぞ、がき」
「はいはい」
後ろをついて歩いてくるのは果たして本当の人間なんだろうか。
まさか本当に悪魔とかじゃないだろうなとザックは度々振り返った。　首の後ろが心細くて寒気がする。　こんな事は初めてだった。

砂漠には魔物が棲んでいると小さい頃よく聞いたものだ。　果たしてそれは親がこどもを脅かす戸棚にいるおばけ――その類のはずだった。
だが、大人になって砂漠を案内人として往復する生活になってみると、魔物は結構そこかしこにいるのに気づいた。
それは、前金だけ払って後金を渋って案内人を殺させる商人だったり、途中で強盗に姿を変えてしまった仲間だったり。　そして弱い人間から身ぐるみ剥いでいる自分の中にも魔物はいた。
だがこんなに綺麗な魔物は初めてだった。　可愛い顔で簡単だよと甘く囁く内容は驚くほど甘くは無かった。
「おまえさ、俺にそんな事をさせててめえが何か得することでも裏で考えているんじゃないだろうな？」
後ろを振り返らずにザックは大股で歩いている。　後ろからバタバタと慣れない履物でついてくる少年。　いや、もう実は十七歳だと言っていたか。　十七歳って言えばもう自分は大人について働いていた歳だった。　酒も飲んで女の味を覚えたのもそういや、十七の頃だった。　てぇことは、過保護にする歳でもあるまい。
「鋭いなザック。その通り。派手な狼煙を上げたいと思ってさ。この目印もあまりない砂漠は案内人以外の人間にとって待ち合わせには向かないからな」
思わず振り返ったザックに少年はにっこりと笑いかけた。
「ザック、大きな騒ぎを起こそうぜ」

砂漠の魔物

ああ……とザックはちょっとほっとしていた。　悪魔か魔物かと思っていたが、用は騒ぎをおこせば逸れたと思っている亡くした連れが気づいて会えるのではないか。　そう思っているのだ。　頭でっかちだがなんて、そうなんて可愛い。

いや、可愛くは無いか。　思いなおして咳払いするザックだった。

その晩も明けようとする頃、彼らは昨日の倍ほどの大きさの隠れ屋につく。

降りていくと、奥から光が漏れていた。　先に誰かが来ているらしい。

「ちょっとここで待て。俺が先に見てくる」

通路でザックはクロードを待たして大股で中に入っていく。　中に頭の固い年寄りでもいたら話がややこしくなる。　ここがだめなら急いで別の場所に移動しないと、自分たちが乾燥肉になってしまう。　無用ないざこざを起こす暇など無い。

暗い通路でクロードはひんやりした壁に背中を預けて、黒い魔獣を思い出していた。　艶のある黒い鱗を持つ魔獣。　暑かった夜は彼の背中に頭を預けていた。　寂しがっているだろう。　相棒の赤い魔獣ともどもあの二頭はとても寂しがりなのだ。

「おい、さっきから呼んでいるのに何ぼさっとしているんだよ」

太い声がクロードを考え事から引き戻す。

ここは、穴の中で、

おれは案内人の世話になっていたんだった。

「何ぼさっとしているんだよ」

手招くザックのについて中に入るとザックと同じ赤銅色の逞しい男たちが何人か円座になって酒を飲んでいた。　濃い乳白色の液体はかなりのアルコール度数らしい。　ちびちびと舐めるように飲んでいる。　酒にしても水分はここでは貴重品扱いらしい。

「良かったよ、俺の知り合いばかりだった。ここへ来い、クロード」
言われた場所に座りながらクロードが砂漠で一般的に多い、握りこぶしを両手で合わせて顔を見ながら頭を下げるお辞儀をする。
「おいおい、弟子を取ったってこいつか」
「楼蘭族じゃなかったのか」
「まあな」仲間がクロードを見て驚くことは織り込み済みとザックは軽くいなしてクロードの横に胡坐をかいた。
「ちょっと訳ありでな。次のオアシスまで連れていく。そりゃそうとおまえらこんなに集まって何してる？」
「こいつみたいな子供や女を襲って奴隷として売ろうとな。何人かでやったほうが楽にできるからな」
仲間の裏仕事をクロードに聞かれて、ザックは嫌な気分で黙り込んだ。　クロードに聞かせたくないと思ってしまう自分にも苛立つ。
俺たちに他の選択肢など無いと大見得を切りたいのに「ほら、やってるんじゃないか」と笑われそうで気が重い。
言い訳したいのか、したくないのか自分でも釈然としない。
なら、俺たちはこの不毛の土地でどう暮らせばいいというのか。
こども相手に詰め寄ってしまいそうになってザックは腹が落ち着かない。
そうだ、気持ちの持っていきようが分からず苛ついているのだ。
こんなガキに自分の生き方をどうすればいいかなどと問いつめてしまう予感にザックは参ったように額に手を当てた。
「小父さんたち、そんな事するより稼げる方法があるよ」
そら来たと牽制する間も無く、男たちはクロードの話に聞き入ってしまう。
円に座った男たちの前に広げられた茶けた羊皮紙。
それは、秘中の秘、この海のように広い砂漠の地図。　砂漠を制しようとする者にとって、ハオタイの皇帝にとっては喉から手が出るほどの宝だった。　これをハオ族に奪われることになれば、この砂漠の自治も砂上の城のように崩れることになる。

だが、彼らはそんなことまでは関知しない。　ただ、これが楼蘭族以外他出するものでは無いことだけは分かっている。
いつもは昔からの言い伝えや、小さい頃から体で覚えた道順で砂漠を行き来しているため大事にしまっている地図などわざわざ出して見る事などない。
その地図が今開かれていて、何人かの男とアーリア人の少年が囲んでいた。
「今、おれたちはどこにいるのかな」
そんな事も分からないのかと、ちゃかして誤魔化すつもりのザックの横の顎鬚のある男が地図に指をつけて「ここだ」と教える。
危ない、このがきの純真そうな顔に騙されて、調子のいい話の虜になっていく同胞の顔を見ながらザックは苦りきっていた。
やっぱり、こいつを拾ったのは間違いだった。ほんの出来心でやった人助けが自分の首をしめるなんて、神なんてやっぱりいないということか。
「……その話だとサラマンダーは、三日か四日をかけて右回りにここを中心にした円を描くように移動しているってことだよね」
男たちの話を聞きながらクロードが人差し指でぐるっと大きな円を描いた。
「前に出たのがここってことなら今はここら辺だよね。近くキータイに向かう商隊が通る情報とかないの？」
「そーいや、三日前にダルファンからキータイに向かう商隊があったよな。今はここら辺りじゃないかな」
薄明かりの中でクロードはにっこりと笑った。
「じゃ、これをいただこうよ」
「バザールの店先で物をねだっているんじゃねぇんだぞ、おいクロード」
たまらず声を上げたザックに周りの男たちが熱く語りかける。
「おい、やってみようぜ。なんか面白そうじゃないか」
「ちっ、面白そうで命を落としてたまるかよ。おまえら、こんなが

きにのせられやがって何夢みてんだよ。砂漠の魔物にでも化かされたんじゃないのか」
「違うよ、ザック」
ザックの言葉にクロードが笑いながら返す。
「砂漠の魔物の正体はおれたちさ。おれたちが魔物になるんだ」
「はぁ？」昼間もやばいが夜もやはり、砂漠はやばいとザックは言葉を飲み込んだ。

魔導師の弟子

「まずは、ここから近い場所でサラマンダーを続けて出没させる。その場所は近すぎても遠すぎてもダメだ。隊列がこの辺りなら安全だと思うように考えるとすれば……ここと、ここの辺だと思う」
おかしいことを言っていたら教えてくれよとクロードは話を続ける。　おかしいと言えば全部おかしいが今はそんな事を言える雰囲気では無い。
「サラマンダーを出没って、どうやるんだ。こっちにおいでとか言ってやってくるような可愛いもんじゃないだろうが」
ザックは釘を刺してやるとばかりに地図に手をつく。
「まあね、発火の呪符を使うよ。あとで紙とペンを貸してくれ。それをあらかじめ予定の場所に仕込んでおくんだ」
「発火の呪符っておまえ」
「ああ、ザック。言ってなかったけどおれ、魔導師なんだ」
「なんだとぉ？」
するりと言ったクロードの言葉に周りにいた全ての男たちが目を見開いた。
「魔導師って、本当か」
ザックの横にいた男が驚いた顔を隠しもしないでクロードの顔をじろじろ見る。　魔導師なんて本当にいたのか。　そう顔に書いてある。　大陸の西側や、東のハオタイ国の首都キータイ周辺ならそこら中に魔導師はいる。　だが、ここ砂漠にはそんな者はいない。
過酷な気象条件の中で生産性の無い魔導師などがいる余地は無いというところか。　話には聞いた事があるが、ここの男たちにとって魔導師などおとぎ話の登場人物でしかない。
「さっきの話だけどよ、大丈夫なのか」
いきなり疑い深くなった男たちにザックは笑みを浮かべた。
「だとさ、おまえ大丈夫なのかよ」

「勿論。計画をしっかり立てて、あとは小父さんたちがしっかりやれば、ね」
男たちの造反など毛ほども心配してないようにクロードは嫌味っぽく言った。　こいつ、大人に偉そうにする生活でもしていたのだろうか。　大人を顎で使いやがるとザックは舌打ちした。
その後二日は、その怪しげな呪符を作る作業とその発火の規模とサラマンダーを呼び寄せる距離、範囲などの詰めを行っていた。
釘で引っ掻いたようなおかしな文字を長細い紙にクロードはどんどん書いていく。
「こんなに要るのか？」
覗きこむザックに手を休めることなくクロードは応えた。
「一回には十枚もあれば足りるよ。ちょっと他に考えがある」
「一回にっておまえ何回やるつもりだ」
ザックは顔色を失ってクロードの手を掴んだ。　インクが溜まって染みが紙に広がる。
「一回じゃ旨みも少ない、だろ？」
「おまえ……何を考えてる？」
「恐い顔するなよ、ザック。おれの話をもう少し我慢して聞いてくれ」
「おまえ、その言い方やめろ」
煩くまとわりつく子どもをあやすようなクロードの言い方にむかついたザックだったが、ここは大人らしく黙ってやると口をつぐんだ。
「何回か同じことをやらかしてハオタイ国のやつらを思いっきり脅かす」
「……で？」
「その前に手を離せよ、ザック。手は動かしながら話すよ」
「ああ……悪い」
慌てて手をどかしたザックに笑顔を向けてクロードは話を続けた。
「そこで、あんたの登場だ。砂漠の外れ、キータイ郊外か、反対側

のダルファンで商隊と接触するんだ。上手くサラマンダーをかわす方法があると交渉するんだ」
「そ、そんな話にのってくるかな」
「大丈夫、彼らだって何回も莫大な損害をこうむっている。そして案内人の腕はすでに知っていたんだから。自分たちの軍隊が歯が立たないのが分かれば交渉のテーブルにつくさ」
「それって」
「これが成功したら独占的に楼蘭族が砂漠を横断する商隊を護衛できる。あんたの嫌いなあこぎなことをしなくても良くなるってことさ」
「おまえ、そこまで考えていたのか」
何をどう言えばいいのか、ただの暴れ好きなガキかと思ったらとんでもない策士だった。 俺たちの行く末まで考えていたとは。
「おまえ、本当に十七歳なんだろうな」
「あはははは、どうだろう？ どう思う？」
こいつは魔導師なんだと改めて見ると薄気味悪いことも無いでは無い。 一心不乱に札に字を書いている少年にザックは声もかけられず座り込んだ。
「なんだ、何を言ってるんだ？」
酒盛りで盛り上がっていた男たちが酒臭い息を吐きかけながらザックの肩に腕を回してきた。 それを胡乱そうに跳ね除けながらザックはクロードに顔を向けた。
「さっきのは、これが成功するまで誰にも言うなよ」
「それはおれの台詞だったよ、ザック」
ふんと鼻を鳴らしてザックは立ち上がった。 こいつと話しているとまるで老練なじじいにあしらわれているような気になる。
それでいて見た目は儚い美少年なのだ。
「ったく、魔導師っていう種族ってのはみんなおまえみたいなのか？」
「魔導師は種族じゃないし、生まれつきでもないよ。ザックにだっ

てなれる生業の一つだ。それに今回の発火の呪はおれが発動させるけど、その後はザックに任せるから」
「なんだと？」
大声を出しそうになって、ザックは自分の口を手で塞いだ。
「絶対ごめんだ。おまえが言い出したんだから最後まで面倒見ろよ」
「できたらそうするよ。だけど何があるか分からないだろ？」
ふうと息を吐いてクロードがペンを置く。　分厚い札の束が机がわりにしていた木箱の上に積み上がっていた。
「人間っていうのは、忘れ易い。ハオタイとの交渉が成功してもそのうちハオタイの方がまた高くつくのを嫌がって色々ふっかけてくるかもしれない。例えば随従する人間を多く用意するから案内人を減らせとか。契約料を下げろとかね」
そこでと言いながら机に置かれた札を指差す。
「これでまたサラマンダーを上手くおびき寄せて思い出させてやればいいんだよ。その時にはさすがにおれはいないだろ？　ザックが覚えなきゃ仕方ない」
理路整然と理由を言われてしまえば、なんとなく嫌だとかいうザックの思いは言い出しにくい。
「それってつまり、俺がおまえの……」
「弟子になるってことだな。魔導師の弟子だよ、ザック」
いきなり立場をひっくり返されてザックは口を歪めたが、考えてみればこの何日間俺が師匠らしかったことが、こいつが弟子らしくしおらしかったことがあったろうか。
「くそったれめ」
思わず口に出した言葉に、
「先生にその口の聞き方はないよな、ザック」と即座に先生の指導が始まった。

ログー

「すべての指を内側に組み伏せるのが、内縛印。そして左食指を立てて他は握り、立てた左食指を右手で握る。右親指は拳の中に入れてね。これが智拳印。最後に呪文を唱えるときは親指と食指を左右くっつけて他は伸ばして掌を押し出すようにする。日輪印というんだ」

クロードが説明しながら流れるように三種類の印を組んでいくがそれを唖然と見ているザックの反応が鈍い。

「分かった？」

「いや、全然」

「ええ？　一つくらいは覚えてよ、ザック」

「ばか言え、俺は魔導師じゃねえんだぞ。そんな手の先をくねくねさせるような事ができるかよ」

へっと唾を吐いていきがってみるが――、

「んじゃあ、このまま貧乏暮らしでもいいんだ。別におれは構わないけどさ。ただの旅行者だからな」

なんで俺が。そう言うもののクロードの言っていることの方に分があるのは分かりきっていた。

「ちくしょう、やってやるよ。もう一回、一個づつ教えやがれ、がき」

手を出したザックの前で少年が指を振った。

「ちっ、ちっ、違うだろ？　クロード先生だよ。忘れたの？」

「てめっ……」

振り上げた拳の降ろしどころが分からない。　暫く仁王立ちになっていたが、こいつを少年だと思うのは止めたとザックは目を閉じる。

「教えてくれ、先生」

「いいよ、じゃあゆっくりやってみるからね」

結局三つを間違いなくできる頃には外はもうじき太陽が暮れる時間になっていた。
「今日中に札を仕掛けに行こう。そして決行は明日。それまでに呪文も覚えてくれよ、ザック」
ああとうんざりした顔でザックは生返事を返す。
「おまえら魔導師っていうもんは毎日こんな事をしてんのか？」
「毎日？　さぁ、おれはしてないけど。慣れれば直ぐだよ、ザック。今日は僕がやることをしっかり見ていてくれよ。今度やるときにはおれはいないんだから」
ああ、こいつは道連れが絶対生きてると思ってやがるのかと複雑な気分になる。　この自信はどこから来るのか？　がき特有の根拠の無い自信、ってやつかもしれん。　そう思ったら少し夜の空気が身に染みた。
大人みたいな老練な物言いをしたかと思うと、いきなり子どもに戻ってやがる。　万華鏡のようにくるくる印象が変わるのについていくのに四苦八苦だ。
「砂漠を移動するのになんか乗り物は無いの？」
荷物を鞄に詰めて立ち上がったクロードが当然あるよね、という意味を含ませてザックを見上げる。
「隣の部屋に？いでる。おまえ、知ってて惚けてんじゃないのか？　ログーという馬みたいな鳥だ」
「鳥？」
首を傾げているクロードに、来いと手首を返して合図するとまだ寝込んでいる男たちを跨いで隣に続く引き戸に手をかけた。
ザックとクロードが部屋に入ると乏しい明かりの中、大きな影が二つ警戒したように動いた。　大きさは馬より若干小さめだが二本足じゃなかったら鳥だとは思えぬ大きさだ。
「こんなの初めて見たよ、すごいなぁ」
感心しながらクロードが近づくのをザックが手を出して止める。
「いきなり寄るな、蹴り殺されるぞ。こいつらは結構気性が激しい。

爪を見てみろ、こんな爪で一蹴りされるだけで死んじまうぞ」
なるほど一抱えもありそうな逞しい脚の先に上にぐっと持ち上げたような鉤爪が鋭く光っている。
長い首の上には体に不釣合いな小さい頭。だが嘴も結構鋭い。
「肉食ってことは？」
「普段は食わねえが雑食だからな。　砂漠じゃ何でも食わないと死んじまうからな」
ザックは「ゴワッ、ゴワッ」と声を出しながらその二羽に鞍をつけた。
「おい、先生。俺の真似してみな。こいつらは鳴き声で命令をきかすんだ」
「グルルッ、これがお座りだ。乗る時やこいつらを休ませたりする時に使う」
巻き舌に苦労しながらもクロードが真似ると嫌なのか、二、三度たたらを踏むように足踏みした後にログーはその場にしゃがみこんだ。
「ちぇっ、おまえ物覚え早過ぎねぇ？」
そう愚痴るものの、飲み込みの早い奴を相手にするのは悪い気がしない。
「んじゃあ、そこに足乗っけて乗ってみな」
「わかった」
ひょろひょろの坊ちゃんかと思えば、結構俊敏な動きでクロードは鳥にあっさりと跨る。
「じゃあ次はボッボッと言え。これが立てって合図になる」
次々と言われることを淡々とこなすクロードにまたしても愚痴が出てきた。
「おまえ、恐いって言葉知ってるか？」
「知ってるかって？　当然じゃないか。おれはまだ十七歳なんだよ、お子様なの。世の中は恐い事だらけだよ」
クロードが言えば言うほど嘘っぽく聞こえるのはどうしてなのか。

ログーから降りるとクロードは「行こうか、ザック」とログーの引き綱を引いて歩き出した。　会ってすぐ扱えるようなやつじゃないはずなのにと、ザックは少年に引かれていく大きな鳥の後ろを見送る。
「おまえ、馬のほかに何に乗れる？」
「うーん、狼とドラゴン」
「なんだと？」
すぐさま、返ってきたクロードの返事に嫌だ、嫌だとザックは頭を振る。
「やめてくれ、俺は空想世界の怪物なんかの話はごめんだ。俺まで引きずり込むなよ、先生」
「あははは、ザック、すでにあんたも俺の話の登場人物なんだけどね」
クロードの片目を瞑った姿にザックは大きなため息をつく。　なんだかこの何日かでどっと歳をくった気がする。　腰を擦りながら自分のログーの手綱を引いて暗く狭い坂道を上がった。
息苦しく狭い通路を抜けた瞬間、肺一杯冷たい空気で満たされる。
真っ黒なカーテンに縫い取られた数々の宝石。　すぐ近くに感じられるのに手を伸ばしても届く事は決してない。
俺の人生そのものだとクロードはしばし空から目が放せなかった。
幸せとは何なのか。どこに行けばあるのだろう。
どうやって手に入れるものなのかさえ、俺は知らないのだとクロードは視線を戻した。

悪魔の所業

歩幅の大きいログーの背中の上で、舌を噛みそうになりながらクロードは必死でしがみついているがログーが歩くたびに体が宙に浮く。

「ねえ、ザック。砂漠には馬みたいでこぶのあるもっと乗りやすい動物がいるんじゃ無い？」

ああ？　後ろを振り返ったザックがクロードの様子ににんまりする。

「おい先生よぉ、しっかり内股に力を入れないと振り落とされるぜ。それにおまえが言ってるのはハメルっていうやつだな。あれはお客様用だぜ。乗り心地はいいが、ログーほど速くねえからな」

「わ、わ、わっ、そうなの？　これって札を仕掛けて帰る頃にはおれ、どっかに落っこちてるよ」

「なら、体を縛っとくかよ、先生」

クロードの泣き言が聞けてザックは途端に機嫌が良くなる。

「ザック」

「なんだよ」

「あんた、ガキだな」

「言ってろ」ザックはログーのスピードを上げて後ろのクロードが乗ったログーに合図する。　途端にスピードを上げたログーにクロードは目を白黒させた。

予定していた場所につくと、クロードが札を置いていく。

「このままでいいのか？　風で飛んだりしないのか？」

ああと薄く笑いながらクロードは手を休めない。

「これはただの紙切れじゃない。ここに置いたら術の力でここからは動かない。昼間なら隠蔽魔術がいるだろうけど、動くのは夜なんだからそれはいいよ。それに砂がこれを隠してくれるだろうしね」

「魔法使いにまさか自分が関わるとはな」

ため息をつくザックにクロードが今度は顔を上げてきっぱりと言

う。
「魔法使いなんてこの世界にはいないよ。おれは魔導師だ。これには誰だってなれる。学問の一つだよ、ザック。覚えて使えば誰にでもできる」
つまりとザックを指さす。
「あんたにだってなれる。さあ、明日は次の場所だね。商隊が来る前に何度かサラマンダーを出しておかないとあいつらを目的の場所に誘導できないだろう？」
そうしておいて二人は大きな岩の影に隠れて商隊が通るのを待った。
「おまえさ、前はどんな生活をしていたんだ？　魔導師って金持ちなのか？　あっさりと人を使うわ、人見知りもしない。西側の国から来たにしては藩語もぺらぺらだしよ」
ぼそぼそと呟くように聞くザックにクロードは「おれ、王子様だったんだ」と振り向きもしないで答えた。
「おまえ……答えたくないってことか。何が王子様だよ、ちぇっ」
ザックの反応にクロードはふっと息を吐いた。
「だって本当のことだ」
「言ってろ。それより、お客様がおいでになったぜ」
まだ、濃い青の空間には何も見えないというのに、ザックはそう言い切って遥か遠くを指差した。
「何も見えないけど」
そう言ったあとに聞こえてきたのは大勢の足音。　一つ一つは小さいものなのだろうが、大きい隊列なのだろう。　ザクザクと合わせたように空気を震わせていた。
人の足音と荷物を積んだハメルの足音。　大きなソリのような物に荷物を満載し、三頭立てにして引かせている。　長い商隊は今までなら安全の権化だった。　前後左右に武装した兵隊が守りを固めている姿は盗賊や獣など寄せ付けない鉄壁の集団。
だが、今は違う。　獣避けの松明の光の中で大きなバケモノの口

の中に飲まれて行く生贄たちの死への隊列。
「本当に大丈夫なんだろうな？」
「それは、サラマンダーに言ってよね。おれは完璧さ。良く見とけよ、ザック。タイミングが大事なんだから」
隊列が呪符を仕掛けた場所に差し掛かる随分と前、クロードは印を組んで呪文を唱える。
『カノ、ハガラズ、ダガズ、オセル』
大きくはないその声はなぜか韻と空間に響き渡る。　風にのり、砂とともに運ばれる。　空気が変わったと感じてザックが辺りを探るように見上げた途端、商隊の前後から炎が火柱となって噴き上げる。　それはまるで間欠泉のような光景だった。
崩れる列と人々の叫び声、そしてハメルが悲鳴のような声を上げて砂の中に引きずり込まれた。　うねる地面が割れて何本もの触手が地上に突き出されていた。
「来やがったぜ」
うっかり漏らしてしまったと言うようにザックは僅かに後ずさりした。　だがそこは訓練された軍隊だ。　商隊についていた兵は分かれると大きな振動をおこす物体を取り囲むように包囲してその中に矢を雨のように射込んでいく。
「うそ、やられちゃうんじゃないのか、サラマンダーの野郎」
息を飲むザックにクロードはどうかなと他人事のように返す。
こいつの言う通りに動かされていたが、このガキの目的は別のところにある。
失敗してもし、軍隊に俺らが仕掛けたとバレたら俺たちを潰す格好の贈り物になる。　そう思うとザックは涼しい顔で戦いに見入っている少年を苦々しく睨み付けた。
矢を射掛けられたサラマンダーは触手を瞬時に引っ込めると砂の中に潜る。　急に辺りが静かになって、軍隊は落ち着きを取り戻した。　隊列を組み直し、残った荷を積みなおす。
出発かと思ったその時、地面が大きく振動した。　さっきの比で

は無い。　ザックが隠れている場所までが揺れる。
「一体なんだ？　戻ってきたのか」
「さっきのは子どもだったみたいだ。おっかさんが仕返しに来たんじゃないかな」
子ども？　さっきのが――とクロードの背中に問いかける。
「だって、おれが引っ張られた時には触手がかなり上まで伸びていたんだ」
今くらいにねと淡々とクロードが応えた。
今や軍隊は無数の触手に絡め取られて砂の中へ引きずり込まれていく。　距離を取って包囲していたはずがそこはサラマンダーの成獣にはまったくの攻撃範囲内だった。
商隊が持っていた松明が地面に落ちてそこはまるで蛍が止まっているようだ。　しかし、現実は熱を感知した他のサラマンダーも呼び込んだ激しい捕食の場になっていた。
いくつもの触手が巻き上げる砂で目の前も見えなくなる。　その中で聞こえる、サラマンダーの吼え声と逃げ惑うハメルの鳴き声。
そして触手と戦う兵士がふるう剣が肉を斬る音。
様々な音が混じりあい、作り上げる地獄絵図にザックは震えた。
延々と続くと思ったが、ふいにそれは終った。
夢だったかと思うほど急に静かになったがすぐには足が動かない。
汗が冷えて体を固めてしまったように動けなかった。
いや、正直に言えばザックは動きたくなかった。
この地獄を作ったのが自分だと知っていたから。　頭で描いていた計画など実際起こったことを見てしまえば砂上の城だ。　残酷で自分勝手な悪魔の所業だと思い知らされる。
――俺はこんな事をあと何回もやらなきゃいけないのか。
「なあクロード、俺は……」
「大成功だな、ザック。この分ならニ、三回すればおまえ達の話しに耳を貸すと思うよ」
嬉しそうに笑う少年にザックの言葉は空気に消えた。

神の啓示

これほど夜が恐いと思ったことは今まで無かった。
いままで、恐ろしいのは昼間のほうで、その目の前に広がる真っ白な光は禍々しい魂胆を秘めているものだと思っていた。
優しく人を慈しむように日差しという凶器から暗幕をかけて守ってくれている。　それが夜だと思っていたのに。
息もつけないほどの恐怖が足から立ち上ってくるのだ。　絡み付いてくる蔦のように足を登り、心臓を包む。　真っ暗な大地と輝く星空。

散らばった荷を歓声を上げて集めている仲間を見たあと、ザックは背中を向けている少年に視線を移す。
こいつは俺等とはまったく違う次元にいる。　大きく空から物事を見ているのだとザックは思う。　そのために流す血は仕方ないという無情なやり方を躊躇い無くすることですら、上に立つ者の考え方なのだ。
王者の器――前に自分でどこかの国の王子だと言っていたのもあながち嘘でなかったのかもしれない。
王子で魔導師だという少年はこれからどこへ向かうのか。
大成功だと笑う奴らもクロードが汚した手の代わりをすることはしない。　死んだやつらにも家族がいたんだぜと、そう思うのは簡単だ。
相手を思いやる振りをするのは容易いことだ。　だからと言って仲間の誰かがそれをやったのを咎めはしない。
自分は非道では無いと対岸にいたい。　それは特別なことでは無い。　俺だってそうだ。
だが、誰かがやらないといけないのであれば、仕方ない。

俺もこの先の桜蘭族の行く末を考えるために非情にならなくてはならない。　ザックは自分を奮いたたせる。　もう仲間のように無邪気に残された商隊の荷を奪う気にはなれなかった。　これからの事が重く圧し掛かって来る。
上手くやらなければ。
なんで俺がと思うが、仕方ないのかもと諦める気持ち。
人にはそれぞれやらなくてはいけない事があるのだと。
その時が俺にも来たのだと思った。
そこに――、
「お迎えに上がるのが遅くなって申し訳ありません」
羽ばたきの音と、頭上から声が聞こえた。
驚いて顔を上げるとそこにいたのは、翼をはためかせた赤い狼と闇の中で光るような大きなドラゴン。
「気がついたんだ」
手を伸ばしたクロードに向けて、空中に止まっていた狼のほうが急降下してくる。　近づくと恐ろしいほど狼は大きく、そこに声の主が乗っていた。
「それは気づきますよ、あれだけ大きな花火が上がっていれば」
抱き上げるように男はクロードを自分の前に乗せる。
「おい、クロード。行っちまうのか」
「うん、頑張れよザック。軌道に乗ったらしょぼい貧乏人には手を出すな。ハオタイは金持ちなんだから。そこからうんと取ってやれ」
クロードの連れはクロードにしか興味が無いのか、「いいですか」と話を打ち切らせる。
「おい、おまえも気をつけていけよ」
ザックの声に分かった、と言ったのだろうか。　それともさようならと言われたのか。
唐突に最初からいなかったみたいに少年の姿は空高く見えなくなった。
「こんな魔法みたいなこと。俺は信じねえからな」

魔導師や、ドラゴン。それに翼のある赤い狼だと？　子ども向けの寝物語でもあるまいし。
ザックは空を見上げてそう呟く。　砂漠の蜃気楼を見ることは死の前触れだと言われる。　今までのこともすべて夢で、俺は死に掛かっているんじゃないのか。
灼熱の砂漠のど真ん中で干からびて死にそうになっているのではないか。
だけど今は夜で、やったことはこの手が覚えている。　そしてあいつの事も覚えている。　生意気な魔導師、いやガキだったな。
思うように俺らを引っ掻き回しやがって。
そのツケを払わされる俺の身にもなってくれとザックは空を仰いでいた。
絶対成功させて今度会ったときに自慢してやる。　ついでにクロード、おまえからも金を取ってやるとザックは自分の頬を両手で叩いて気合を入れた。
「おまえら、手早く撤収だ。次もあるんだからな」
ザックは大声を出すと仲間の下に駆け出した。

「捜しましたよ」
「そう？」
クロードのあっさりとした返事にラドビアスは軽くため息をつく。
自分の主人は儚げに見えて実は図太い。　どこででも生きていけるのではと時々思う。
それは、体に封印された経典を取り出せば、自由に生きることが彼の幸せだという事実を突きつけられているようだ。
魔導師でもなく、一人の青年としての人生を。
その時、わたしはどうしたらいいのかとラドビアスは自分の主人の細い背中を見つめた。
「楼欄族の暮らしぶりが分かって結構面白かった」

「面白い？　サラマンダーを使ってハオタイ皇国公認の商隊を全滅させたのが、ですか？」
「そう、人は動くのを待っている。与えられた運命を、神の啓示を待っているものだと良く分かった」
冷めた物言いにラドビアスは心が痛む。　声に出さなければ、気に病んでしまうのだろう。　クロードは殺生を嫌う性質なのだ。
「いつか、食ってやる」
二人の話に突然アウントゥエンが入ってくる。
「何を？」クロードが魔獣の眉間辺りを優しく撫でると、ごろごろと喉を魔獣は鳴らした。
「あのオオトカゲに決まってる」
「そうだな、帰りに寄ろう。楽しみだ」
クロードはそう言って闇に消えたザックに別れを告げた。
次ぎに会うときはきっとお互い違った立場だと思いながら。
「さようなら、ザック。上手くやれよ」

キータイへの道

「わたしに連絡を頂くなら他にもっと楽なやり方があると思われますが」
さっきから背中に次々とお小言の山でクロードは耳を塞ぐ。
「なんか派手にしたかったんだよ。やりすぎたかもしれないけどさあ、もう終ったことだし。それに」
言葉を切って急に後ろを振り返られてラドビアスが驚いた顔を見せる。
「なんですか」
「おまえがサラマンダーの事をおれや、魔獣たちに先に言って無かったのが悪いんだよ」
「つまり、わたしが悪いと仰りたいのですか、クロード様」
まあ要はそういう事だとクロードは話を打ち切って寝た振りをした。　ラドビアスはため息をついてクロードが魔獣からずり落ちないように体を支えた。

「おまえたち、一晩でどのくらい飛べるのだ」
大きなオアシスに夜が明ける寸前辿り付いたクロードたちはやっと宿に落ち着く。　厳しい日差しを落とすのはここでも砂漠でも同じはずなのに、オアシスに限っては昼間も人に穏やかな顔を見せている。
恵み深い慈愛の笑みを浮かべているような陽光。　だが、それはかりそめの姿だともうクロードには分かっていた。
久しぶりに見る昼間の明るい日差しの中、レストランの丸い卓を囲んでいたラドビアスが夢中で食事をしている魔獣に顔を向けた。
「おやっさん、あれはきっと砂漠の魔物が化けているんですぜ」
コックの一人が恐ろしそうに腹の出たいかにも商売人風の男を捕まえて陰に隠れて訴えた。

「あの客か。確かに胡散臭いがこの場所に胡散臭くないやつが来たことがあるか？　金は全て金貨だぞ。金払いが良ければ魔物だろうが鬼だろうが大事なお客だ」
自分の経営方針をしっかり言ってから、店主はこっそりとレストランのバルコニー席を占領した客を盗み見た。
背の高いアーリア系の男が付き従っているのは一見女の子かと思うほどの美形の少年。　月の光を集めたような髪はこの辺では珍しい。
下女風のハオ族の娘も同じテーブルについているのがおかしいが、もっとおかしいのは体の大きい赤毛の男と青白い体の黒髪の男。
人間を装ってはいるが注文から食事の所作から――獣じみている。
金貨を積まれては何も言えない。早く出て行ってもらうのを願うだけだ。
特に注文をつけて生焼け状態にしてもらった骨付きの羊肉を、両手で持って顔を埋めるように貪っているのはアウントゥエン。　これまた驚く店主に頼んで八割がた羊の血を少量のワインで割ったものを水のように飲んでいるサウンティトゥーダが煩そうに唸る。
「その後、姿が戻るまで消えていいならキータイまで行ける」
脂ぎった肉を飲み込んでアウントゥエンが一息にそう言うとまた肉を齧った。
「おまえはどうだ、サウンティトゥーダ」
「問題ない」
血に酔ったのか、気持ち良さそうにサウンティトゥーダがゆるりと答えてまた杯を煽った。
「キータイ？　もうキータイに行けるの？」
ランケイが嬉しそうな声を上げる。
キータイ。大陸の大半を占める領土を有するハオタイ皇国の首都がキータイだった。　天の災害をもキータイを避けるとも言われる大都市。　あらゆる世界中の物資と人種が集まるその都は千年の長きに渡ってハオタイの首都であり続けていた。

その間、どこからの侵略も王朝の交代も無く綿々と続くハオ族の国。　初代皇帝ロン・イーの血脈が今も青き龍の生まれ変わりとしてこの国を治めているのだ。
その繁栄はこの国が持つ、特殊な国との関りと大きく関係していた。　広大なハオタイの首都キータイは大陸の東に位置している。
そのキータイの北にあるベオーク自治国。　飛び地のようにハオタイ皇国の中にある他国。
大きさは大きめの市街くらいしかない。　周りを高い城壁で囲い、出入り口は一箇所のみ。
そこを訪れるのはハオタイでも限られた貴人か、各国の王侯。
その国は大陸全土に影響を与えている魔道教の総本山なのだ。
教皇ビカラは齢千年を超えると言われている。　それが本当なのか、真偽を確かめる術は無い。教皇を頂点にその血族だけで構成された神と称される人々。　魔導師だけが住んでいいる謎の多いその国との遥か昔の契約。
ロン・イーとビカラの契約からハオタイ皇国歴史は始まったと言われる。　しかし、その創始を知るものなどこの世にはビカラしかいない。
そのベオーク自治国を目指しているクロードやランケイにとって、キータイに行き着くことはその一端に辿り付いたということだ。
「もう少しで助けに行ける」
ランケイは感極まって胸に自分の拳を当てた。
教皇一族の一人に捕まってしまった弟。　やっと会えると思うといてもたってもいられない。
「早く行きたいわ。いつ、発つの？」
「今晩にも発ちますか、クロードさま」
相変わらずランケイには知らん顔で、ラドビアスはクロードの鼻についたソースを拭った。
「うん、いいよ。でもランケイ、君とはベオーク自治国への街道で別れよう」

「な、なんで？」
「そういう約束だったから」
クロードは淡々とランケイに告げる。
「酷い、一緒に行けるかと思っていたのに」
どこで引導を渡せばいいのかクロードはずっと考えていた。　生まれ故郷に近いオアシスの方がいいか。　それともキータイかと。
どこに暮らしても身寄りの無い貧乏人には辛い生活だろうが。田舎よりもかえって大都会のほうが懐は深い。　見知らぬ隣人が一人増えたとしても気にする者もいまい。
クロードはそう思って言われるままに連れてきたのだ。　ランケイの村はもう焼失してないのだから。
自分の身も守れるか分らないベオークにランケイを連れて行くことはできない。　弟は自分が見つけてやれればと思っていた。
「キータイで別れるのが一番いい」
「足手まといだから？」
息巻くランケイに「その通り、分かってるのなら言うことはありませんね」ラドビアスが冷たく言った。
「急にあたしのことなんか、面倒になったのね。いいわよ、別れてやるわよ」
ランケイはそこにあったワインの残りをクロードに勢いよくかけると店を飛び出して行く。
「あんな不義理な子どものことなど放っておいたらいいのですよ。クロードさまの人の良さにはあきれます」憤懣やるかたないとラドビアスが戸口を睨みながら言った。
「俺も自分で今ちらっと思った」
ラドビアスに服を拭いてもらいながらクロードが笑いながら言った。
泣きながら人ごみを走っていたランケイは、いきなり腕を掴まれてテントの一つに引き込まれた。
「何やってるんだ、ランケイ。おや？　泣いているのか」

「あんたは……誰？」
ランケイを捕まえた男がにやりと笑った。　一重の目がきゅっと上がっている。　ハオ族の男。　細い体に沿うように襟の高い長めの上着を腰で縛っている。
髪は頭の頂点で結んで後ろに垂らしていた。
「わたしはベオークの眷属だよ、おまえ勝手なことをしてんじゃないよ」
ランケイは、掴まれた腕が痛くて仕方なかった。　しかも自分がベオークの手先だと思いださされて胸も――痛くなった。

龍の主人

「おまえの弟を助けたいんだろう？」
「セイシンは痛い目にあったりしてないんでしょうね」
ランケイが精一杯睨みつけると男は「どうかな」と笑った。
「おまえが言いつけを守らないと足の一本くらいは無くなっているかもな」
ひっと小さく悲鳴を上げるランケイに男はふんと鼻を鳴らす。
「すぐさま奴らの所へ戻れ。後でまた連絡する」
「セイシンに会わせて」
ランケイの声は何も無い空間に消えた。　弟を取り戻したいだけなのに一体自分は何をさせられるのだろう。　誰に助けを求めてもいいか分らない。
「ごめんね、クロード」
本人に言えない謝罪の言葉をランケイは道路の端に零した。

「姉さんに会うか、セイシン」
道路わきの高い塔の上から頭が二つ覗いていた。　亜麻色の髪の長い一見アーリア人に見える貴人。　淡い水色の瞳が陽の光りを受けて金剛石のような輝きを見せていた。　長い袖のせいで抱かれている少年の姿はよく見えないが歳が十ばかりのハオ族らしい。　横の貴人と同じような上等の黒い絹地の丈の長い上着を着ている。
「オラはバサラさまの眷属になったんだから、もう姉ちゃんとは関係ないです」
「おや、それはダメだよ。家族じゃないか。姉さんとは仲良くしなさい。本当の思いは胸にしまっておけばいいのだから」
少年の頭を撫でていると後ろから声がかかる。
「バサラさま、セイシンをお連れになるなら、そうと言ってくださ

い。どうします？　お帰りになりますか？」
「そうだな、帰りはおまえに乗って帰ろう。セイシン、龍に乗ってみたいだろう？」
「はい、バサラさま」
　二人の会話に男は大きくため息をつく。
「わたしは面白い乗り物ではございませんよ。子どもが振り落とされても知りませんからね」
「昔はおまえも可愛かったのに。いたいけなあの頃が懐かしいな」
「一つ言っておきますが、あなたさまは十のときからいたいけではありませんでしたよ、バサラさま」
「おや、インダラ。もしかしておまえセイシンに嫉妬してるのか？」
「いやに楽しそうですが、そんな訳ないでしょう。バサラさま」
　ここにいなさいと少年から手を離したバサラと呼ばれた男が、印を片手で組みながらもう片手を男の背中にのせた。
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
　言葉の後にインダラと呼ばれた従者の男に変化が起こる。　背中が湾曲してどんどん胴体が伸びていく。　顔の口のところが大きく裂けて前に大きく張り出して。　その大きな口には鋭い歯がびっしりと生えている。　額を割って大きな鹿のような角が二本にゅうと生えてきた。
　体にはきらきらとした魚のような鱗が全身を覆う。
「すごい、すごいです。本物の龍ですね、バサラさま」
「そうだよ、そら手をお出し。抱いてのせてあげよう」
　二人に向かって、龍が小さく唸り声をあげた。
「はいはい、主人に向かって早くしろとは態度が悪いしもべだ。セイシン、しっかり捕まっておきなさい」
「はい、バサラさま」
　二人が乗ったことを確認した龍が必要以上に速度を上げて空に飛び上がっていった。

茜色から紫へ夜は砂漠もオアシスも等しく訪れる。
見上げた空は砂漠よりも薄く煙幕が張っているようだった。　オアシスのバザールから漏れる明かりは空の闇を凌駕しようとしているかのように。
「出かけますか、クロードさま」
ラドビアスが長椅子に横になっていたクロードを軽く揺する。
「え？　もう夜なの？」
起き上がったクロードが周りを見回す。
「ランケイは帰って来た？」
「いいえ」
だから今出発するんですよとばかりにつんとラドビアスがクロードに上着を着せ掛ける。
「だめだよ、キータイまでは連れて行くことにしたんだから。おまえたち、ちょっと探してきてよ」
声をかけられて長椅子の足元で寝そべっていた魔獣が顔を上げた。
「帰ってくる」
「そうかな」
「だってあいつは……」
アウントゥエンが言いかけたのをクロードが手を振って止める。
「探してきてよ、アウントゥエン」
ええ？　という顔を見せたが、アウントゥエンは大きく伸びをすると体をぶるぶると震わせてからバルコニーから姿を闇に躍らせた。

魔獣の思いと裏切り者の思い

アウントゥエンが屋根伝いに走りながら細い辻を見回していると、石畳の道の端に座り込んでいたランケイの姿を見つけた。

「何やってる？」

屋根から声をかけるとランケイがはっと顔を上げた。　このところ人の姿をしていることが多く、人語を喋ることにも慣れてきたのか、魔獣たちはかなり発音も流暢になってきている。

一瞬、あのベオークの魔導師が帰ってきたのかとランケイは思って震えた。　前に現れたメイファといい、今のインダラというハオ族の魔導師といい、魔導師とはこんなに冷たいものかと思わせる男たちだった。　とはいうものの、貧乏人にはどこの誰もが優しくない。　村にいた時だって貧乏な自分たちへの風当たりはきついものだった。

どうすれば貧しいという運命を変えられるのか、ランケイには考えもつかない。　貧乏な家に生まれた自分は無学なまま、貧乏人に嫁ぐ。　そして、子どもの世話と畑仕事に明け暮れて死んでいく。

深く考えないまま、漠然とそう思っていた。　それが特段に悲しくも無かった。　ランケイの村の女たちはほとんどそんな生涯を送っている。

でも自分には帰る家も残ってはいない――それでもセイシンはきっと。　あの子はもう少しましな生活を遅らせてやりたい。　そのためにも姉ちゃんがきっと助けてあげるからとランケイは記憶の中の弟に優しく告げた。

「アウントゥエン」

「どうした、出発するぞ。腹でも痛いのか」

「大丈夫。あんたにのってもいい？」

ランケイの言葉に赤い狼は首を傾げる。　どうしようかと悩んで

いるのだ。　主人しかのせたくない。　自分はお安くないんだぜと思うが、その主人の命でこの女を捜していたんだからのせるしかないかと。　そんな風にちらりと考えていた。
だけどこいつをのせるのは不本意だと伝えてやりたい――そんな事を考えるようになるとは。　実はアウントゥエン自身も考えていなかった。
主人とは、魔経典を使って呼び出されて使役されるだけの関係。
契約が終れば、いつも元主人を即座に食い殺してやった。
だが今の主人はどうも食べたくない。　食べでが無い、そういうことで自分をも納得させてみようと思ってみるがどうも上手くいかない。
契約とは別に。
クロードと一緒にいると気持ちいい。耳の後ろを撫でられると眠くなるほどだ。　体に触れさせて落ち着くなんてことは、大昔にやはり子どもに使役されて以来だった。
結局――その子どもも食べてしまったのだけど。
この先、自分はいつ開放されるのか。
クロードはどう思っているのだろう？　ずっと側にいるという選択、それもありかと思うこの頃。　大好きなクロードの敵だと知っているだけに、ついアウントゥエンは口を滑らせてしまった。
「乗せてやる。ありがたく思え、裏切り者」
自分の前に一瞬にして降りてきた狼の言葉にランケイは目を見張った。
「うらぎりものって」
「行くぞ、乗れ」
今この魔獣はあたしを裏切り者だと言った。　魔獣が知っているということは、その主人が知っているということではないのか。
ランケイは自分の罪をクロードに知られたのではないかという疑念を胃の中に無理やり押し込んだ。
認めてはいけない。

知らないふりをしていよう。　そうでなければ、弟を助けられなくなる。

弟を取り戻すためなら、自分は裏切り者でも卑怯者でもなんでもなるんだとランケイは唇を硬く噛み締めた。

キータイ到着

「戻って良かったよ、ランケイ」
クロードがバルコニーに降りたランケイに声をかける。
「ごめんなさい」
「悪いと思っているならやらなければいいんです。時間が無いから直ぐ行きますよ」
ばっさりとランケイの謝罪を切ったラドビアスにクロードが苦い顔を見せる。　が、彼はそれを気付かない振りをした。
勿論、自分の主人の立ち振る舞いはおろか、顔の表情まで、彼が気付かぬことがあるわけは無い。　しかしラドビアスにとって、主人を脅かす可能性のあるものに心を一片でも動かす道理もない。立ち尽くすランケイを片手で避けるようにして、ラドビアスはアウントゥエンの背に鞍を置いた。
「ランケイ、俺は俺の信念でベオークに行く。君には君の譲れないものがあるんだろ。だったら自分の役目をこなすことを恐れなくていいよ」
「クロード、あんたあたしのことを……」
やっぱり分かっているのだとランケイは確信して言葉が途切れる。
自分を裏切っているのを知っているにも関わらず、クロードはそれを不問にしている。
「だいぶ上空を飛ぶから寒い」
サウンティトゥーダは鞍の付け心地が悪いのか、そう言って身を揺らした。
「だったら、クロードは我がのせる」
アウントゥエンは体の体温をやや上げてみせると、挑戦的に傍らの魔獣を見る。
「グワァアアッ」
サウンティトゥーダの威嚇する声が響いていきなり、その場の雰

囲気が変わる。　魔獣らは別に一緒にいるからといって自分の都合が悪くなるとその関係も即座に変わる。　人とは違う倫理観や社会感、別の理の中にいる彼らはあっという間に戦いを選ぶのだ。
「止めろ、おまえたち。アウントゥエンにランケイを乗せたいから俺もアウントゥエンに乗るよ。サウンティトゥーダにも後で乗ってやるから文句を言うな」
「ガウウウッ」
「ギュワアアア」
抗議の声と威嚇の声、それを冷たく抑える声が部屋に響く。
「このまま騒ぐのを止めないとくつわを嵌めますよ、おまえたち」
　二頭の魔獣が不服そうに鼻を鳴らす。
「では、キータイに着くまでは降りることはできませんからね。落ちないように腰を紐で括っておきます」
　風に直接当たらないようにクロードはランケイを後ろにのせる。
「しんどいかもしれないけど頑張ってね、ランケイ」
「分ったわ」
　分かったつもりでいたランケイは空に舞い上がってからこの旅の困難さに気づく。　息苦しいのだ。前に飛んでいた空域よりはるかに高く、体に当たる風も半端なく刺さるように冷たかった。
　体を毛布で覆っているのに裸なのではないかと錯覚するほどの強風の中、ランケイは目も開けることができないでいた。
「ランケイ、頭まで毛布にくるまらなきゃだめだよ。アウントゥエンも今は体温を上げることができないくらい急いでいるんだ」
　後ろを振り向いてクロードがランケイの毛布を引き上げる。　朝までに砂漠を越えなくてはならない。　広大な砂漠の真ん中を過ぎたといえども、魔獣にとってさえ一晩で砂漠を越えることは並大抵のことではない。
　風を切る音と魔獣の荒い息だけが耳に聞こえる。
　ほどなくランケイはクロードの背中にもたれるように気を失った。
「思ったより頑張っていたな」

アウントゥエンの低い唸り声がする。
「うん、もう遠慮は要らないから存分に飛ばしてくれ」
クロードが静かにそれに応えた。
軽く炎を吹いた後、アウントゥエンが頭を低くする。　クロードも背後にランケイをかつぎながら姿勢を低くした。
ゴオゴオと唸る風の渦の中を魔獣は、流れの速い気流にのる。あっという間にその姿は闇に消えた。
ここは現実か夢の中なのか。
渦巻く風の中で感覚も無くなってきた頃、辺りがふっと明るくなった。
うす赤い紫の稜線が地平を縁取る。
間もなく夜が明けるのだ。
慈悲深い夜が明けて、悪魔の微笑みをたたえた朝がやってきたのだ。
アウントゥエンは口を明けたまま涎を垂らしている。　サウンティトゥーダは明らかに高度を落としていた。
二頭の疲労も限界を迎えている。
「あれを」
ラドビアスの声にクロードが体を起こす。　目の前にまぶしいほどの緑が見えた。　砂漠とキータイの境に植えられているのか、キータイを囲むように緑が続き、その中には見渡すかぎりの青い色が昇り始めた陽の光に反射して連なっていた。
「キータイに着いたんだな」
「ええ、なんとか間に合ったようです」
緑の一角に降り立った途端に魔獣の姿は煙るように消える。
「いなくなってしまった。大丈夫なのか、ラドビアス」
ああと魔獣の消えた跡を眺めながらラドビアスはその場に残された荷物を整理し始める。
「あまりに魔力を使いすぎて形を保っていられなくなったのでしょう。魔界ならすぐに魔力は戻りますが、ここではそうはいきますま

い。何、十日ぐらいでまた戻ってきます」
「そうなの？」
「ええ、人通りの多いキータイではかえって好都合ですよ。さあ、荷物を一つは持っていただかないといけません。よろしいですか？」
勿論と頷いてからクロードはラドビアスが触れたがらない事を指摘する。
「で、ランケイはどうする？」
「ここでお別れとかは不味いですか」
「当たり前だろう」
当たり前ですかねと軽くため息をついてみせて、ラドビアスは荷物のようにランケイを肩に担ぎあげた。
改めて見渡すとキータイは恐ろしいほどの大きな都だった。　大きな通りはすべて黒い石で舗装されている。　大通りに面している屋敷はみな三階建てくらいの木造で屋根には青い瓦がのせられていた。
「空から見たとき、これが青く光っていたんだな。それにしても奇麗な都だな」
「この青は、ハオタイの帝が青い龍の末裔と言われていることに由来しているのですよ。龍の末裔がおわす都はすべからく青で満たされねばならない、とね」

傀儡の国

だんだんと砂漠を東に向かうたびに人種もハオ族がほとんどになり、装束も上着を左右に打ち合わせてボタンでは無く腰に巻いた平帯で留める形式になる。　袖は太い筒状で膝上までである上着の下には細いズボンを男女ともに履いていた。

建物も西側とはまったく違っている。　赤く塗った太い柱を土壁で囲っている。　窓には格子状に板が組んであり、中に硝子がはまっている。

そう、西側では裕福な豪商か、貴族の家にしか無い硝子がどの家の窓すべてに嵌っている。　そこからもキータイが豊かなのが見て取れる。　それは千年の永きに亘って続いているハオタイ皇国の繁栄をこの都市を訪れた者にあまねく知らしめているのだ。

ここを訪れた他国の使者に自国の威光を思い知らせる。　それは圧倒的な豊かさで、連なる甍の海で。

キータイの在り方、それこそがハオタイ皇国が他国をどう見ているかを表している。

今、この国に面と向かって戦をしかけることのできる国は大陸のどこを探しても無い。

そして、この都は……。

「結界で守られている」

クロードは延々とつづく緑を見ながら呟いた。　あの木々は結界を隠ぺい魔法で姿を変えているに違いない。

どこまでも続く緑にはたっぷりと魔術の痕跡が見て取れる。

「なあ、ラドビアス。ハオタイ皇国は、ベオーク自治国を取り込んでいるのではなくて。その実、ベオーク自治国の傀儡国なんじゃないのか？」

ラドビアスが驚いた顔で自分の主人を見下ろす。

「なぜそう思われます？」

「ユリウス、いやイーヴァルアイ。それともカルラと言ったほうがいい？　とにかく彼が同じ事をしただろ？　魔道師の住むゴート山脈からレイモンドール国を裏から動かしていた。きっと、彼は自分の故郷を模倣したんじゃないかと思ったんだ」
クロードの目の前でラドビアスが口を手に当てて笑った。
「何がおかしい？」
いえ、失礼しましたとラドビアスは笑いの名残を口に残したまま答える。
「クロードさまって本当に聡い方なんだと思いまして。そうですよ、青い龍の末裔ではなく、ハオタイ皇国の歴代の皇帝に侍っている者が青い龍なのですよ」
「ベオークのしもべってことだよね」
はいとラドビアスが口角を上げた。
「この国が出来たときから皇帝の傍にあるのは、ビカラさまのしもべです」
「上から見たときに、中心の城を中心として延びる道路や構造物の様子からきっと巨大な魔方陣なのではないかと思ったんだ。色んなもので分かりにくくしてあるけど」
クロードが淡々と語る話にラドビアスは改めて自分の主人の顔を見つめた。　手を尽くして彼の生国の王に即位させるべきだったのではないか。
少なくとも彼は今のレイモンドールには必要な人材だろう。　彼の双子の兄は喜んで彼を城に迎えるはずだ。
そこまで考えて、しかしその後のことを思うと自分はまた逃げていたのだとラドビアスは気づく。
出来が良すぎる王の兄弟など、国が落ち着いた後はいらぬ混乱の故なのは分り切っている。　クロードがどう思おうとクロードを国王に押す一派が現れて王宮は二分される。　それはそれでクロードが王座に着くつもりがあるのなら自分はこの手を汚すことは何も躊躇することなどない。

だが、自分の主人はそれを良しとはしない。
彼は肉親の情に恵まれなかった分、それを大事にする気持ちは並大抵ではない。　自分の行為によって争いがおこることは決して望みはしないだろう。
「ラドビアス、どうした？」
考え込んでいたラドビアスはクロードの声にぐっと引き戻される。
「いえ、なんでもございません。さて、今日の宿を探しに参りましょうか」
「うん、着る物も変えたいな。今のじゃ目立ちすぎるし」
目立つのはその容姿なのだがとラドビアスは思ったが口には出さない。　キータイはハオ族が大半だが、国際都市に似つかわしくかなりな人数の外国人も流入している。　だいたいがハオタイ皇国自体が大陸の大半を領土としているために、あらゆる人種を抱えている。　そんなに多くはないが、アーリア人もいないでは無い。
だが、クロードはその中でも人目をひくだろう。
美しい銀に近いブロンドに藍色の大きな瞳。　もし襤褸（ぼろ）をまとっていたにせよ、育ちの良さは隠せない。
つまりは、やはりクロードの言う通り服装だけでも変える必要はある。
「いつまで寝ているつもりですか、起きなさい」
植えられていた木の根元に降ろされていたランケイに呪を飛ばしながらラドビアスが肩に触れると、ランケイの体がぶるっと震えた。
「……ここは？　あたし落ちちゃったの？」
「ううん、よく頑張ったね。ここはキータイだよ。砂漠を抜けたんだ」
「キータイ……」
噛みしめるようにランケイは声に出す。　やっと実感が湧いてきて嬉しさがこみあげてくる。
とうとうやって来たんだと。　弟がいるはずのベオーク自治国へもあとわずかなのだ。　やっと会えると思うと嬉しいはずが色んな

感情が押し寄せてきて胸が詰まった。
ランケイは知らなかった。
攫われたはずの弟がベオークの王族の一人の眷属になっていることを。

「ようこそ、キータイへ」
物陰から見ていたハオ族の男がニマリと笑った。　それにつれて頭の頭頂部で結んだ長い髪が背中でゆらりと揺れる。
長い髪を一本引き抜くと男は呪を唱えて息を吹きかける。　髪は一瞬溶けたように見えたあとに鴉に姿を変えると男の手から飛び立って「カァ」と鳴いた。
「バサラさまにクロードがキータイに到着したとお伝えしろ」
低く言う声にもう一度鴉は「カァ」と応えて飛んでいった。

厄介事ー1

「ここからは会話はすべて藩語になっております。お気をつけください」
「うん、ランケイは藩語分る？」
「話言葉ならなんとか」
ランケイの返事にラドビアスの眉が上がる。
「片言なんかで話すくらいなら黙っておきなさい」
「おいおい、ラドビアス」
本当にこいつときたら子供みたいに感情丸出しなんだからとクロードはため息をついた。
宿のある方へ歩き出した三人の前にいきなり男が滑り込んできて行く手を遮られる。
「お頼もうします、旅のお方」
そう言ってラドビアスに向かって頭を下げるのは、身なりの良いハオ族の男だった。　ラドビアスがちらりとクロードを見る。
「宿に泊まられるのですよね。あなた方の一行にわたしと主人を加えて欲しいのです。お金ならあります」
「別にお金に不自由してはいないですが。何かわけありのようですね」
ラドビアスの言葉に男はとまどいながら、言うか言うまいか逡巡するように相手を見上げた。
「はい、旅の道中、悪い者にお嬢様が懸想され、しつこく追われておりまして」
「お嬢様？」
はい、あちらにと指さす建物の蔭から若い女性が心配そうにこちらを見ていた。
「それは大変でしょうね」
「はい」同情するようなラドビアスの言葉に男は安堵するように頷

くが。
「しかし、そんなわけをお持ちのあなた方を一行に加えるなんてできませんね。わたしの主人が巻き込まれたら大変ですから。他をお当たりください」
一瞬何を言われたのか分らないように男はぽかんとしていたが、徐々に驚きが怒りに変わったようにラドビアスの腕を掴んだ。
「おまえ、こちらがこんなに下手に出ているのにその言い方は無礼であろう」
語気を強める男にラドビアスがくくくっと笑う。
「やっと尻尾を出しましたか。へたな嘘をつくからですよ。いずれにせよ、何かきな臭いあなた方に関わってはろくなことにならない」
「あうっ」簡単に男に掴まれた腕を逆にひねり返すと、ラドビアスが男の喉元に男の腕を押し付けたまま近くの塀に体を押さえこんだ。
一見物腰が穏やかそうに見える相手の思ってみなかったすばやい攻撃に男は息を飲む。　そこに彼の連れだと思った少年が口を出してきた。
「もういいだろラドビアス。彼女はきっと貴族の姫か何かじゃない？　助けてあげたいけど選んだ相手が悪かったね。おれらを頼ると君らの方が危ない」
「クロードさま」
クロードの言葉にラドビアスは手を離すが、その前に男の鳩尾に肘を打ちつけるのを忘れない。
「おや、失礼。わざとじゃないんですが」
「わざとじゃないってどう見てもわざとだろう」
呻いて崩れる男の姿に苦笑しながらクロードは自分の従者を目で咎める。
「どうするの、クロード？」
「どうって、どうも……」
ランケイの問いに答えようとしたクロードの前に、くだんの姫が走ってきて自分の従者にしがみついた。

「この者をどうしようと言うのじゃ、下郎どもめ。狼藉を働くとわらわが許さぬ」
「ランカ様」
目の前で始まった、なんだかむず痒い展開にクロードとランケイも顔を合わせる。
「名前をこんな往来で言っちゃっていいの？　話っぷりも思いっきり上流風だし。狙ってくださいって言ってるみたいだけど」
クロードの言葉に傷ついたような顔の女性は、たぶん自分やランケイとあまり歳も違わないだろうと思われる。　どんな訳があるのか知らないが、城下に逃げるにしてはあまりにも目立つ服と髪型。
透けるほど薄い絹の着物は細かい刺繍が隙間無く刺してあり、その上から着た華やかなつるつるした生地の上着を前で重ねて豪奢な金色の帯で結んである。　帯は前で凝った細工で花のように結んであった。
また髪は横に張り出すようなハオタイの貴族の娘がしているもので、この娘を連れていたらさぞかし目立つことは明らかだと思われた。
「クロードさま、急いでここを立ち去りましょう」
ラドビアスにとっては相手の窮状だとか、身分だとか、そんなものはまったく考えの糧にはならないようだ。
ここで衆目の的になるわけにはいかない。　それこそが彼の心配なのであって、自分たちが見放した後、二人がどうなろうと全然興味の外だった。
「だけど関わらないのはもう無理みたいだよ、ラドビアス」
「まったく、ついてない」
吐き捨てるように言ったラドビアスが懐から素早く短剣を立て続けに走ってきた無頼者たちに向けて放った。
「無頼者に見せていて、かなりの腕ですね。どうします、時間も無いし術で眠らせますか？」
ラドビアスが放った短剣は、男たちに弾かれる。　簡単に投げて

いるように見せてはいるが、ラドビアスは走ってくる男たちの速度を読んで足を狙って投げていた。
それを弾き返すとは、かなりの手だれだということだ。
「そうだな、足を止めてくれ、ラドビアス」
「了解しました」
ラドビアスが印を組んで呪を唱えてその口元に指を持っていくと、それを取り囲む男たちを指さすように振った。
『縛せよ』
途端に男たちがバタバタと倒れた。　まるで体を縛られてしまったかのように身動き一つしない彼らは唯一動く目を必死で動かしていた。
「半刻もすれば術の効力も解けます。行きましょうか、クロードさま」
「うん」
ところが、歩き出したクロードの上着を腹を押さえた男が掴んでいた。
「お願いがあります」
ああとクロードはため息をつく。　厄介事は避けようとしてもあっちからやってくるんだった。何かに巻き込まれたと思ったときには、その中心にいたようなそんな悪い予感がしてきたクロードだった。

厄介事ー2

「あなた方は魔術を使われるのですか？　姫を一晩匿っていただきたいのです。お約束していただけるなら私の命でもなんでも差し上げます」
　掴まれた上着の裾を振り払うとクロードは薄く笑う。
「命って……おれたちはまるで化け物扱いだな」
　まあ、当たらずとも遠からずなんだがと独りごとを呟く。
「別に人間の命なんて欲しくないよ。言っとくけどおれたちと一緒にいると困るのは君らだよ。仕方ないなぁ、話だけなら聞いてやる」
「クロードさまっ」
「話を聞くだけだよ、ラドビアス。急いでランケイとここら辺の者が着る古着を調達してきてよ。こんな目立つ格好じゃ宿に行ったところでそこの主人に通報される」
「クロードさま、いけません」
「早くしてくれ、ラドビアス」
　一瞬目を閉じてラドビアスは肩を落とすと路地裏を指さした。
「わたしが帰ってくるまであちらにいらしてください」
　頷くクロードに一礼するとラドビアスは踵を返して速足で通りを歩きながら、背中越しに厳しい声を出した。
「ぼさっとしないで早く来なさい、ランケイ」
「分ってるわよ」
　八つ当たりされて、眉をひそめながらもランケイはラドビアスの後を追って行った。
　薄暗い路地裏に身を潜めてからクロードはくだんの男に話しかける。
「で、本当はなんなの？　王宮から逃げだしたんだろ、君の主人は。嘘の話はもうごめんだからね。そんな派手な身なりで旅の途中とかばかにされてるみたいだから」

「無礼者、良くもわらわにそんな口を！」
大きな声で叱責しようとするのを男が必死に押さえる。
「ここでは、この者にすがるしかありません。耐えがたいのはわたしも同じですが堪えていただきたく切にお願い申し上げます」
「わかったわ」
目に見えてほっとした男を多少白けた顔で見ていたクロードが右手を上げる。
「変化しろ」
手の中で指輪は長い長剣になり、男の喉元を掠めるように突きつけられた。
「おれもそんなに気が長い方じゃない。さっさと話さないと追手にやられるより先にくたばっちまうことになるぞ」
「ぶ、無礼者！」
「何者かを言わないと本当に無礼なマネをすることになる。おまえらが何者なのかが分らないのにどう敬えばいいのさ。それと女、おまえ煩い。それ以上言うとこの男の喉をかき切るからな」
ひっと息を飲んだのを見てクロードの目が細くなる。
「で？」
つんと剣の先を視線を戻した男に当てると男の喉仏がごくりと上下した。
「このお方は恐れ多くもハオタイ皇帝の御息女様にあらせられます」
男はクロードがどう出るかを見定めるように一旦言葉を止める。そこへ刃先がわずかに首に食い込む。
「続けろ、話を止めていいなんて誰が言った？」
ラドビアスとかいう背の高い男に守られている西から来た商人の子供に見えた少年が、実は一番やっかいだったのだと男は気付く。
「ハオタイのロン皇帝には五十人ものお手付き娼妃がいるらしいからな。子供だってそれなりだろ。それで？」
「このたび、砂漠のある地所から自治を任せろと嘆願があったらしいのです。最近急にまとまって行動するようになった楼蘭族ですが」

「楼蘭族？」
「何か？」
いや、と首をクロードは振って顎をしゃくって先を促す。
「族長というのが、それは野蛮な男らしいのですが、ここ最近ハオタイの旅団は楼蘭族の手引きなしでは砂漠を横断することは不可能になっていて、皇帝も認めざるを得ないのです」
「最低限の自治をお認めになる証として、ランカ様を落都させられ、その族長に嫁すことに」
それが嫌で逃げだした――そういう訳かとクロードは納得顔でランカと呼ばれた娘を見た。　姫の格としてはきっと低い。　母親の身分がそう高く無いのだろう。　だが、広大な宮殿の敷地から一歩も出たことが無かった高貴な身では、砂漠の族長などという得体のしれない男に嫁ぐのは恐ろしいことかもしれなかった。
だが、たぶんその族長はクロードが知っている男だと思う。　浅黒く逞しい体でまっすぐで行動力があった。　ザックならきっと幸せにしてくれそうだと思う。　思うが彼女に説明はできないし、きっと分るとも思えなかった。

厄介事ー3

「間もなくその族長が皇帝に謁見を受けにこのキータイに参ります。そうなったらランカ様はいくばくかのうちに辺境の地に落ちて行かねばなりません」

男の話にクロードは問いかけもせず、黙って聞いていた。

「助けて頂けますでしょうか」

「聞きたいんだけど」

はいと言う男にクロードは剣先を外した。

『変化せよ』

その言葉に剣が姿を消す。

「それでお姫さまが逃げたいと思ったのは、まあ考えが足りないとは思うものの仕方ないと思うけど、なんでおまえはそれを諌(いさ)めないでついてきたんだ？」

初めから答えは分っているがと思いながらクロードはあえて口にする。

「世間知らずの姫が父帝の命に背いて逃げたとして、どうするつもりだった？」

うなだれる男になおも辛辣な言葉が投げられる。

「どこに逃げるつもりだった？　自分の故郷にでも逃げるのか？　逃げて所帯でも持とうと思った？　手配書は全国に周り、身の回りの世話を何一つできない目立つ女を連れて隠しおおせることができるとでも？　おまえの半端な忠義心のおかげで、姫は罪人扱いになるし、おまえも死罪は免れない。おまえだけで済めばいいがそうはいかないだろう。一族郎党皆殺される」

「止めなさい。コウユウはわらわの境遇を慮(おもんぱか)って一緒に逃げてくれたのよ。おまえみたいな下郎にわらわの無念さなど到底分らないわ」

ランカがクロードの胸をどんっと突いた。

「分らないよ、ぬるま湯みたいなところで甘やかされてきた了見の

狭い娘の気持ちなんてさ」
「なんですって？」
手を出したランカの手をパシンと打ち払ってクロードは逆に彼女の胸倉を掴んだ。
「自分のことばかり、きゃあきゃあ喚いてんじゃない。別にあんたは死ぬわけでもなんでもないだろうが。自分が何で良い暮らしができてんのか考えてみたことがあるのか」
「離しなさい、下郎。もちろん知ってるわ。わらわが皇女だからに決まってるでしょ」
高らかに応えるランカを突き放してクロードは鋭い視線を向ける。
「そうだよ、あんたは身分が高い。何もしなくても贅沢な暮しができる。それはなぜかと聞いているんだ。人はそれぞれ与えられた物に対する対価を払う必要があるんだ」
「言ってることが分らないわ」
「おまえが皇女だと言うのなら皇女という立場にもそれ相応の責任があるということだ。国のためにできること。それは今回で言えば、おまえが嫁に行くということで内乱を防ぎ、国内の結束を固める礎となること。それも逃げてはいけないおまえの責任なんじゃないのか」
「なんでわらわが……」
「あんたは、身分をはき違えている。何もしないでも良い暮らしなんてどこにもありはしない。国の長である皇帝だってその肩には誰も肩代わりができない重いものがどっしりとのっている。それでこその威光であり、尊厳であるとおれは思う」
「分らないわよ、分りたくない」
ランカは耳を押さえてしゃがみこんだ。
「……あなたは一体？」
コウユウと呼ばれた男は見直すように少年を見た。　上に立つものの心構えを説くこの少年がただの商人の息子には見えなかった。
さっきの魔法のような仕草といい、今の堂々とした話しぶりとい

い、彼は人の上に立つ者特有の風格を漂わせている。
「お待たせいたしました、クロードさま」
そこへ、荷物を抱えてラドビアスとランケイが姿を見せた。
「じゃあ、この方の着替えを手伝うからあんたたちは向こうへ行ってよね。誰も入ってこさせないでよ」
「了解」
クロード、ラドビアスがコウユウと共に背を向けたのを確認して、ランケイは着飾っている自分と同じ年頃の娘に声をかけた。
「これに着替えてくれる？」
「分った」
そう言って何もしない相手の様子に首をかしげる。
「あの、それ、いま着てる服を脱がなきゃ」
「だから早くすればいいではないか」
やっと彼女が自分では服を脱ぐ気が無いのに気付いた。　手がかかると思いつつもきっと彼女にとっては人がかしづくのは当たり前のことなのだ。　宮中ならともかく、ここでも同じような扱いを受けられると思っているのには苛つくが、放っておいても何も変わらない。
「まだ？」
あっさりと着替えたクロードが後ろを向いたままで聞いてくる。
「後は髪を下ろすだけだからもういいわよ」
振り返ったクロードは内心驚きを隠せなかった。　街着を着て髪を下ろして化粧も落とした顔はランケイに似ている。
「準備はいいですか。さっさと宿に向かいますよ」
ラドビアスが待ちくたびれたように言う。　彼にとっては益々面白くない状況だといえる。
大陸に渡ってすぐにランケイを拾い、そして今度はハオタイの皇女とは。
「人が良いのにもほどがありますよ、クロードさま」
思わず愚痴が飛び出した自分にラドビアスはため息をついた。

何百年生きてきたとしても人間は達観などできはしないと。

厄介事ー4

宿屋に着くとラドビアスは流暢に藩語を操り、二つの部屋を確保した。
「寝るときは、ランケイと姫はそちらの部屋でお休みください」
「わらわがこの者と相部屋になるのか」
不満を口にするランカに構わず、ラドビアスが部屋の戸を開けた。
「では、それまではご自分の従者と隣のお部屋へどうぞ」
「ランカさま、少しお休みを」
ふんと鼻を鳴らして部屋を出たランカに続いてコウユウも部屋を出た。
「やな感じだわ、あのお姫様」
ランケイが遠慮なく戸が閉まった途端に大きな声を出す。
「あんなじゃじゃ馬を嫁に貰うなんてザックも大変だなぁ」
クロードは、戸を眺めながら少し前に一緒にいた男に思いを馳せる。
「やっぱりクロードはあの姫がその楼蘭族の族長のところに行くのがいいと思っているの？」
ランケイが複雑な顔で聞いてくる。あんな性格の悪い娘は気に食わないが、意に染まない結婚をさせられると聞けば可哀そうだと思うのも自分の気持ちだ。
「それがやっぱり一番いいと思うよ。どうせ、ここで逃れたとしたって捕まって牢に繋がれるか、下官にでも払い下げられるのが落ちさ」
そう容易く追手を出し抜くことはできはしない。　短期間ならともかく、このままどこかに身を潜める場所などありはしない。
「皇女として生まれて自由恋愛なんて考えても仕方ないだろ。身分が高いということはそれだけ自分の身の値打ちがあるということだ。婚姻は血を流さないで物事を納めることのできる上手い手だと思う

けど」
食うための職を探し、寝るための家を見つける。　そのどこかできっと捕まる。コウユウの縁者や知り合い全てに追手の目が光っていると思っていい。
コウユウはハオタイ皇国の皇女を連れて逃げている大罪人なのだ。国の威信をかけて捕まえようとしているはずだ。
「逃げられないのかしら。きっとコウユウは姫のこと好きなのよ。だいたいクロードって誰かを好きなったことあるの？　酷い言い方だわ」
「放っといてくれよ。それに彼女は下町には染まれない。いつまで経ってもお姫様気どりは治らないと思う。ある程度はそれを寛容できる男に嫁いだほうがいいと思うけど」
身分の高い女は金と手間がかかるものだとクロードは思ったが口にはしなかった。　どう考えてもランケイが憤慨するのは目に見えている。
女の子ってやつはどこまでも愛とかですべてが解決するなんてことを思っているのだから手に負えない。
それとも何か手があるのか？　ランケイと皇女が似ているということが使えるのなら面白いことになるかもしれない。
「ともかくおれはさっさとベオーク自治国に行きたいんだ」
「それはご自分がせっせと邪魔しているんですよ、クロードさま」
我が意を得たりとラドビアスが口を出す。
言い返したかったがまさにラドビアスの言うことは真実だったので、クロードは苦虫を噛んだような表情で黙りこんだ。
「これからどうなさいます？」
窓の桟に腰掛けて外を眺めているクロードにラドビアスが話かける。
「皇帝の側にいるのがベオーク皇国のビカラのしもべだと言ってたよな」
顔は外に向けたままクロードが問う。

「はい、そうですが」
「おまえは会ったことがある？」
「あります。もう五百年は昔のことですが」
ラドビアスが卓に置いてある茶器でお茶を入れていく。　西側のお茶とは違う澄んだ爽やかな香りがあたりに漂った。
「お茶が入りましたよ、クロードさま」
「うん」ぴょんと足をついて席につくとクロードは茶器を掌で持つと、ラドビアスに目を向けた。
「おれも見てみたい気がする。それに宮中のどこからか、ベオークに抜ける道がある。そうだろ？　きっとそこには龍の道が開けているんだ」
「良くおわかりに」
「だったら俺がしたこともそうバカなことでは無かった。おれたちは結構いい土産物を持っているのだから」
「なるほど」
ラドビアスが頷いて部屋の右に視線を向ける。　その壁の向こう側には確かに血眼になっているものがある。
「信じられない、あんたって本当に人間なの？」
クロードとラドビアスの話の行く先を知ってランケイが呟いた。
「ベオークに行ける手立てがあるのに、それをみすみす逃すのか、ランケイ。君こそそんな事言うとは思わなかったよ。いいんじゃない？　博愛主義も」
「そんなこと言ってないわよ」
自分だって弟を助けたい気持ちは本当だ。　なんでもやると思った思いに嘘なんてない。
「このまま捕まれば、姫はともかくコウユウは死罪、または宮刑。家族や親せきまでが巻き込まれる。それならここで上手く立ちまわってやればコウユウを助けられる」
クロードはあの若い官吏の身を案じていたのかとランケイは気付く。　巻き込まれたのは彼も一緒なのだろうから。

厄介事ー5

「ランケイもベオークに行きたいんだろ？　前言撤回するよ、一緒に行こう」
「本当に？」
「クロードさま」
勢い込むランケイと咎めるようなラドビアスの声が交差する。
「ランケイ、姫の様子見て来てくれない？」
「分ったわ」
部屋を出て行くのを見計らったようにラドビアスがクロードを見る。
「クロードさま、一体……」
それを手で制してクロードがお茶を一口飲んでからラドビアスに座れと指で示す。　溜息をつきながらラドビアスが座ったのを確認して彼の話が始まった。
「ランカ姫の代わりにランケイを送り込んじゃダメかな？　コウユウはおまえが変化すればいいし。おれはそれを手土産に宮城に潜り込むよ」
「二人を逃がして何の得が？」
不服そうな顔のラドビアスにクロードは噴き出してしまう。
「おれが人助けするのがおかしいかな？」
「おかしくはありませんが、その意図が測りかねます」
「そうだな……あんな我儘娘にはザックは勿体ないと思ったからかな。それに二人が本当にあれで幸せになれるのかちょっと興味もある」
「ランケイも厄介払いできますしね」
すまして言う従者の横顔をクロードはおいおいと眺めた。
「おれが多少手を貸して逃がしてやったとして、逃げきれるかどうかも分らないけど。姿が戻った魔獣にでも頼んで南にでも逃がすか

な？」
「ランケイが大人しく砂漠に戻りますかね」
そこなんだよね、とクロードはにやりと笑った。
「宮城内で忘却術をかけてやろうと思ってさ」
さらっとクロードが言った言葉にラドビアスが顔色を失くす。
レイモンドール国で一度クロードは忘却術をモンド州城全域にかけたことはあるにはあったが。　あれは、カルラが書いた術式を単に披露したに過ぎない。
特定の人やわずかな場所にかける術式ならそんなに難しくは無いだろうが、広大なハオタイの宮城一体を網羅する術式など無茶な計画に思えた。
「何を消そうと思っていらっしゃるんです？」
「ベオーク自治国の記憶だよ」
不敵に笑う自分の主人を時の間、唖然と見つめるしかラドビアスはできなかった。
「クロードさまが目指しておられるのは、御自分の御身から教典を抜くことですよね」
恐る恐る確認するラドビアスに彼の主人はあっさりと身も凍る宣言をする。
「おれはベオーク自治国を潰したいんだ」
言葉を失くすラドビアスの様子にクロードは静かに言葉を継いだ。
「それでもおまえはおれについてくる？」
クロードのまっすぐな視線を受け止めきれずにラドビアスは立ち上がった。
「お茶を入れ替えてまいります」
主人を失くすことを恐れている自分にとって、問題なのはクロードがベオークの実態を知らないことだ。　教皇一族のけた外れの強さの一端しか彼は知らない。
どうやって止めさせればいいのか。　しかも彼は自分の決めたことを曲げることはほとんど無い。　思案しながら廊下に出ると、目

の前に良く知っている男が腕を組んで立っていた。
「久しぶりだな、ちょっと痩せた？」
「体調など変わらないさ、何の用だインダラ」
「なんか、お困りのようだからさ、手助けをと思ってね」
長身のハオ族の男はそう言って両側の口の端を釣り上げて手を差し出してきた。
「わたしが死ぬほど困っていたにせよ、おまえにだけは助けなど求めない」
ぱしんと大きな音が廊下に響く。
「おやおや、人がせっかくおまえの大事な御主人さまを助けてあげようと思ってやってきたのにさ。ついでに言えば、おまえの本当の主人はベオークにおいでになる。いい加減自分の立場を思い出せよ、サンテラ」
「うるさい、消えろ」
ラドビアスが懐から短剣を立て続けに男に突きたてる。
「おまえってバカな男だ。何百年経っても」
男は薄ら笑いとともにただの烏に姿を代えて床に落ちた。　おびただしい血と黒い羽根があたりに散らばる。
「サンテラ、また会おう」
烏の頭がくるりとラドビアスを見上げてそう言うと跡形も無く消えた。
「くそっ」
ラドビアスは右手で握った拳を左手に打ち付ける。
どうにもならない事はある。
だが――、
ベオークの内部はもうすでに衰退の道を歩んでいる。
ひっそりとその一族は数を減らし続けて今や片手に足りるほどになっている。　このまま子供ができないとすれば、クロードが手を下さずともいずれはベオーク自治国は消滅するのだ。
それが今すぐだと断言できないだけで。　彼らの寿命は遥かに長

い。
ベオーク自治国の終焉が自分の命の終わりでもあるとラドビアスは胸を押さえた。　それは自分にとっての厄災なのか、それとも福音であるのか。
ついてこれるかと言ったクロードに答えを言わなくてはならない。
ラドビアスは踵を返して部屋に向かった。

分かっている事

「クロードさま、わたしはあなたの従者です。あなたが行くというのなら、どこへなりとお伴するのがわたしの意思です」
部屋の窓枠の縁にまた腰を降ろしていたクロードは、入って来たラドビアスの言葉に顔を向ける。
「おまえならそう言うだろうと思った」
「術式を行うための羊被紙を調達してまいります」
ああと頷く主人に頭を下げてラドビアスは宿を出て行く。　その後ろ姿をクロードは追いかけようとして――止まる。
「……ラドビアス」
しかしその呼びかけも、力なく呟きにとどまった。
行かせなかったほうが良かったのか、クロードは自分の意気地の無さに唇を噛む。
ユリウスは、こういう時どうしたのだろう。
ラドビアスは自分の眷属では無い。　自分の意思でクロードについてきたのだ。　その先を望むのは身勝手なのかもしれない。
でも――、
本当なら殴ってでも行かせないほうがいいのだろう、自分にとっては。
主人としての覚悟も無いのかと自嘲の溜息が洩れた。
そうだ、自分は自信が無い。
大それたことを口にして言質を取らないと行動できないのではないかと心配になる。　自分の実力の無さなど人に聞くまでもなく分っている。
それでも、
それでも自分が生まれてきた意味を自分は信じたい。
現実には、誰もが生きていることに大それた役目を追っているものではない。　いるとしても神は一人一人にそんなものを与える余

裕などないだろう。
人はただ生きるために生き、死んでいくものだ。　それだけのものでしか無い。　だが、人がどう思うが関係なく。
――おれがおれであり続けるために、おれは大きな役目を持つと思わなければ。　潰れてしまう。　ただ偶然の重なりで翻弄されているなどと言うのなら、とっくに生きる意味などうしなっていた。
だけど一人では当然できなくて。
ラドビアスがおれの側にいるのが必然だと思っていたいのに。
ああ、こんなにもおれは自分に自信が無いのだと認めるのが怖くて。　従者の気持ちさえ引きとめておく事もできないのだ。　クロードは、ラドビアスの出て行った扉を力なく見つめる。
ラドビアスがさっきの返事をすると思ったように、おれはもう一つ思っていることがある。
「ラドビアスは……おれを裏切る」
ぽつりと落ちたのは涙だったのか。言葉だったのか。クロードには判然としなかった。

ラドビアスが路地を曲がったところで、一羽の烏が彼のほんの目の先にふわりと止まる。
「サンテラ、何か用がありそうだが？」
人の言葉の後に「かあ」と鳴いて烏が首を傾げて見せた。
「分っているくせに惚けるのは止めろ。烏のふりなどやめろ、インダラ。話がある」
「何の話だろ、興味津津だな」
そう言った烏は、周りに一羽ではきかないほどの黒い羽根を撒き散らしながら姿をあいまいにする。
かと思うと――、
いつの間にか一人のハオ族の男の姿がそこにあった。
濃い緑色の合わせが片方に寄っている襟。　膝までの上着は足さ

ばきが良いように両側に切り込みが入っている。　その下はゆったりしたズボンになっていた。　ハオタイの様式では無いそれは、ベオーク自治国の物だった。
「インダラ、バサラさまにお目通りしたい」
　ええ？　と、大げさに驚くマネをするインダラにラドビアスの眉がくっと上がる。
「聞えなかったか、インダラ」
「おやおや、何を言い出すのかと思えば。おまえみたいな物騒な男を大事な主人に会わすわけないじゃないか」
　頭の頭頂部で結んだ長い黒髪が笑うたびにゆらゆらと揺れる。
「インダラ」
「バサラさまにお会いしたいと言うのなら、それ相応の話しなんだろうな」
　くどいと睨んだラドビアスに、インダラと呼ばれた男はその切れ長の目を糸のように細くした。
　バサラのしもべであるインダラは主人に似て人の心を弄ぶのが好きらしい。　ラドビアスが苛々するのが楽しくて仕方無いのか、ますますのらりくらりと言葉を繋ぐ。
「できそこないの眷属が自分の御主人さまに会うのだから、慎重になるのは仕方ないと思うけどね」
「わたしはクロードさまの命をお助けしたいだけだ」
「ふうん、では龍道で行くか、隼にでもなる？　面白いのは隼かな、やっぱり」
　くすりと笑った男は素早く隼に姿を変えて空に飛び立つ。
「待て」
　ラドビアスは大きく舌打ちをして姿を鷹に変えて隼を追った。

二人のしもべ

気流の道が見える。　緩やかに蛇行しながら続くその道は、鳥類になったから見えるのか、しもべだからなのかはラドビアスにも分らない。

恐ろしいほどの風の流れに乗り、速度を上げて北に飛び続けていた二羽の猛禽がある境を飛び越えた。　その瞬間、空間が歪んで空気の流れが大きくかき回される。

それは水に小石が落ちたときの波紋のように輪になって広がり、やがて消えて行く。

そこはベオーク自治国との境、厳重な結界だった。

しかし、ベオーク自治国の主である一族の眷属には何の影響も与えない。

つまりは、ラドビアスの体に刻まれているしもべの印は今もバサラのものなのだ。　思いうんぬんの前に彼の主人は今もってバサラであった。

クロードへの忠誠を誓う心の反対側には、常にバサラに縛られている自分がいるのをラドビアスは意識しないではいられない。

それほどに刻まれる龍印は、しもべを心身ともに主人に握られる立場に至らしめるものなのだ。

それを愛だと誤解するほどに。

インダラは主人であるバサラに全てを差し出している。　自分が向ける愛情を疑ったりしたことは無いのだろう。

なぜ同じように同じ印を刻まれた自分はそういう境地になれないのか。　バサラをかつては慕い、敬っていたはずなのに。

理由なら――ある。

バサラが自分の妻にしようとした人を自分もまた愛してしまったから。　しもべの分際で自分は主人からカルラを五百年前にここから奪い逃げたのだ。

果たして自分は今もバサラの眷属の意味があるのだろうか。
問えない疑問を胸に抱いて、ラドビアスは自分を眷属たらしめているバサラに会おうとしていた。
結界を突き抜けた先で、連なる稜線の淡い水墨画のような景観がラドビアスを迎える。
もう二度と戻ることは無いのではないかと思っていた。　こうやって戻ってくるなどと五百年前、カルラについて逃げるように国境を越えた頃は思いもしなかった。
「ここに帰ってくるのは実に五百年ぶりなのではないか？　まったくもって不実なしもべだよ、おまえは」
返事など端から期待していないのか、隼はそのまま高度を落とす。
黒い瓦が打ち寄せる波のように連なっている。　赤い柱の一本一本に龍が巻きついた意匠が施されていた。　広大な宮が渡り廊下で繋がれて山脈を囲むように造られている。
その一つの宮の前庭に二羽の猛禽が舞い降りる。
「ここで待ってろ」
人の姿に戻ったインダラが宮の中に入っていく。　中には何人もの魔導師が立ち働いていた。　その宮の離れに彼の主はいるはずだった。
「ううんっ……ああん」
甘い女の声が抑えきれないと言った風情に切れ切れに聞えてくる。
室の入口に立ったところで、インダラは中の様子に気付いて天を仰いだ。
「ただいま戻りました。なんですか、バサラさま。人が必死で帰って来てみれば、戸を開けっぱなしで飼い猫とお戯れとは」
インダラの不平にくすりと笑う声が寝台から洩れる。　薄い布をかき分けて顔を出した主人はにっこりとインダラに笑いかけた。
「おまえが遅いからだよ、インダラ。偉そうに言うところを見ると何か収穫があったんだろう？　ご苦労だったな」
「バサラさま、もう終わりですか？」

バサラの背中に手を回した女が名残惜しそうにぺろりとバサラの耳を舐め上げる。　砂色の滑らかな肌に艶のある純白の長い髪が流れるようにかかっていた。　金色の大きな目が物欲しげにバサラを見つめていた。
「おまえは際限が無いからな。また抱いてやるから手をどけろ、メイファ」
バサラが肩に置いたメイファの手をどける。
「ミャア」
甘えた声を出して寝台から降りたのは、すでに女の姿ではなかった。
抜けるような白い毛を持った大きな雪豹がインダラを見て、大きく唸り声を上げた。
「わたしが大きな獲物を持って帰ったから、おまえはもう用済みだ、メイファ」
インダラの言葉にメイファの唇がまくれ上がる。
「シャアアアッ」
大きな牙を見せて威嚇した後、ツンとインダラから顔を逸らせて優雅に伸びをした魔獣はインダラの脇をすり抜けて外に出て行った。
「あんな獣と交わるなんて酔狂にもほどがありますよ、バサラさま」
「あはははは、妬いてるの？　あの子は抱き心地が人間の女より具合がいいんだ。おまえもいつか試してみる？」
「冗談ですよね、真っ平ですよ」
「おやおや、ずいぶん嫌ったものだな。でもあれはわたしの可愛い愛玩物だからね。傷つけたらだめだよ、インダラ」
「頼まれたってしませんよ、バサラさま。前庭にサンテラを連れてきております」
「サンテラが？」
バサラは、インダラに体を拭かせながら花が咲いたように笑った。
――この方がこんな風に笑うときはろくな事を考えてない。
インダラはそう思いながら自分の主人に新しい服を着せかけた。
「やっとインダラも目が覚めたのかな。どう思う？」

亜麻色の髪を掻きあげながら自分を見上げた主人の色香に、インダラは思わず見とれそうになって顔を引き締めた。
まだ少年の頃にバサラのもとで働きだしてからずっと主人に魅了され続けている。　美しい外見も策略好きなところも残酷な面でさえ、彼の魅力を損なうことは無い。　それが彼に刻印された龍印のせいなのかどうなのか。
自分の血の一滴まで主人のものなのだと。　しもべなら疑う余地は無いはずなのに、サンテラは違う。　そこがインダラには理解できない。
――始まりから違っていたからか。
「あの者は死ぬまで目など覚めませんよ。バサラさまもご存じでしょう？」
インダラの返事にバサラは「だろうな」と水色の淡い瞳をすっと細めた。
「呼んでおいで、わたしの不肖のしもべを」

裏切りとその裏

「お久しぶりでございます、バサラさま」
入口に見えたしもべの姿にバサラは笑みを浮かべた。
「そんな端にいないで入っておいで」
「わたしがここにお願いに上がったのは……」
「クロードの命だろ、そんなことは分ってるさ。わたしが関心あるのは教典なんだから。それを取りだしたら彼はおまえに進呈するよ、サンテラ」
優雅に手を振るバサラにラドビアスは頷いて彼の元に歩み寄る。
「では、ビカラさまにはご内密にして頂けるのですか」
「そうだな、兄上を出し抜いて教典を奪っちゃうっていうのは面白い」
にやりと笑うバサラは裏に何かある。　そうは思うが今はバサラに縋るしかない。　教皇であるビカラがクロードの命を助けるなどあるわけもない。
魔教典はベオーク自治国の宝重であり、ビカラ所有の教典だったのだ。　末の弟であるカルラによって五百年前盗み出され、その後、長い間西の辺境の島国で強力な結界を敷くために使われていた。ベオーク自治国の魔導師たちにしても、その魔力ゆえになかなか手出しができなかったのだ。
それが今、目と鼻の先にある。
「クロードさまはわたしがここに連れて参ります。お約束いただけますか。どうか……」
「くどいよ、あんまりひつこいのは嫌いだな。インダラ、来い」
その声にどこにいたのか、一羽の烏がバサラの肩にふわりと止まった。
「お呼びですか」
「インダラ、わたしの肩を止まり木代わりにするとは。まったくお

まえは不遜なやつだな。サンテラの用は済んだ。後の事はおまえに任す。だけどわざわざ変化して連れてくるなんておまえも酔狂だね」
　主人の指を軽く突いてみせて烏は、またもふわりと飛び上がるとバサラの前に立つラドビアスの横に舞い降りて姿を変えた。
「そりゃ、酔狂なことが大好きな主人に仕えているんですからね。酔狂にもなりますよ。では、今度は龍にでも変わりますか？」
　長い黒髪を一振りしてインダラが膝をつくと、バサラが「めんどくさい」と印を組んだ。
「龍道を行け、龍に変えるのはサンテラがクロードをここに連れ帰った時でいい」
　インダラからラドビアスに視線を向けてバサラは唇の端を引き上げる。
「クロードの命を助けたら、おまえはわたしが龍に変えて死ぬまで飼殺してやるよ、サンテラ」
　自分の言葉に黙っているしもべにバサラが眉を顰めて、頭を垂れているラドビアスの髪を掴んで顔を上げさせた。
「それでいいの？　主人の言葉にしらんふりはないだろ、サンテラ」
「……クロードさまのお命を助けて頂けるなら、わたしなどバサラさまのお好きになさってください」
　はあ、と大きい溜息が漏れた。
「今の聞いたか、インダラ。サンテラって本当に面白みの無い男だよな。ここでクロードを裏切っちゃうとか、自分の身の保身とか、もうちょっとあがくと面白いのにさ」
「裏切るって言えば、もう五百年も昔にサンテラはバサラさまを裏切ってますよ、お忘れみたいですけど」
　インダラは思い出させるようにバサラにそう言うと、さっさと印を組んだ。
「う～ん、それじゃあわたしが一番みっともないじゃないか。そこは思い出さなくていいんだよ、インダラ。おまえはいつも一言多いんだから」

不貞腐れたように唇を尖らす主人にインダラは取り合わない。
「わたしがいなかったら、バサラさまは暴走してしまいますからね。では、サンテラを送って参ります」
ついて来いとぽっかりと空いた暗闇にインダラは消え、ラドビアスは最後にもう一度バサラに頭を下げると続いて闇に消えた。
いきなり現れた闇は、現れた時と同じように一瞬で跡かたも無く消え失せる。
だが、それも日常のことなのか、気にすることも無く、バサラは寝台に座りなおした。
「クロードか。あの子は使い道があるよな。それ用に手に入れたハオ族の子どもなんかよりよっぽどわたしの好みに合う。あの銀の髪と藍の瞳は綺麗だし。姉さまと兄さまの子どもなんてきっと化け物に違いないからな。教典を使って子どもの魂をまるごとクロードに転生させてやる」
くくくと笑いながらバサラは龍道の消えた辺りに目を向ける。
「そのために教典はわたしが頂く。そして女にしたクロードを同族にしてわたしのものにしてしまおう。カルラのときは失敗したが今度は目を離したりしないようにしなくてはね。それにしてもクロードがごつい大人になる前に成長が止まっていて良かった。あれなら充分に女性化できる」
誰もいない寝室に笑い声がしばらく続いた。
「サンテラの大事なものを奪うって何て楽しいんだろうね。あいつは絶対許しはしない。わたしからカルラを奪ったんだから」
楽しそうな声の調子とは裏腹に、バサラは側にあった硝子の杯を床に叩きつけた。　欠片になった一つ一つに、険しい顔の自分の姿が写っているのに気付いてバサラは鼻を鳴らした。
血族としか、子孫を残せない。　今やその縛りは自分たちを破滅へと追い立てていた。　今や自分の血族の中の女性はハイラしかいない。　そのハイラときたら、中世の剣闘士も驚くほどのごつい女なのだ。　食指が動かないのも無理はないだろう。

そのハイラと今回数百年ぶりに子どもを作ることに成功したのが、兄のメキラである。　バサラの兄弟の中でも一番容貌に特徴があると言っていい。　何もかもが、三つづつあるのだから。
その二人の子どもがじきに産まれる。
そんなことがあっていいはずが無い。　全てにおいて血族の中で優れている自分が次世代の血を残さなくてはならないはずだ。
――だからこそ、
「クロードを使って、わたしの子どもを作ってやる。じゃまはさせないからな、サンテラ」
それこそが彼の生きる目的なのだ。　自分の血を残す、自分の血がこの世界を支配するのだ。　その目論見が五百年前に一人の男にじゃまされていた。
「思ったより私は執念深いよ、サンテラ」
呟いたバサラの口の端にはしかし、笑みが浮かんでいた。

かける罠とかかる罠

窓の桟に腰掛けていたはずのクロードは今、床に転がっていた。ただ転がっていたのでは無く、大型の獣のその大きな前足で押さえこまれていた。獣は、唸り声を上げながらクロードを大きな舌で舐めまわしている。長い舌で左右に振られると、それだけでクロードは頭を大きく持って行かれそうになっていて、ついでに目も回ってくる。

「もう、止めろっ。顔が無くなっちゃうよ」

主人の悲鳴めいた声に、はあはあと荒い息を吐きながら獣は陰惨な笑い顔を見せる。

いや、凶悪な顔に見えるが実はこの魔獣は上機嫌で、それをクロードも分っていた。

「我は元に戻った。クロード、嬉しいか？」

「もちろん」

クロードがくしゃくしゃと長い体毛に手を突っ込んで掻きまわすように撫でてやると獣はまたもや、恐ろしい咆哮を上げた。

もちろんこれも嬉しさのために上げた歓喜の声なのだが。

「はいつは？」

体がこの世界に上手くなじむには、しばらく時間がかかるのか、魔獣はまだ上手く発音できないようだ。

「はいつ？　あいつってこと？」

ああ、とクロードは赤い狼を見上げる。この魔獣と同じ時に召喚した黒いドラゴンの事を言っているのだと分った。

仲が良いのか、悪いのか。

ともかくもお互いに気になる立場なのは間違い無い。

「サウンティトゥーダは先に姿を見せたよ。今はおれのお使いでちょっと出かけてる」

予想通り、クロードの言葉に赤い魔獣は不満そうな声を上げた。

自分がまず先に主人に会いたかったのだと低く喉を鳴らす。その狼の喉元を荒っぽく撫でてクロードは起き上がった。
「アウントゥエン、おまえにも頼みたいことがある」
「聞いてやらんこともない」
大きな口を開いて赤い狼が牙を見せた。その牙をこんっと叩いてクロードは狼の耳元に言葉を流し込むように言葉をかける。
「分った？」
「了解した」
そう言うと赤い狼はまたもや姿を床に溶け込ませるように消えていった。それを眺めてクロードは「顔がべたべただ」と袖でごしごしと拭う。そのすぐ後に、隣の部屋から獣の声を聞きつけてランケイとコウユウが入ってくる。
油断ない目つきで剣を抜き放ったコウユウが眉間に皺を寄せてクロードを見た。
「恐ろしい声が聞こえたが、大丈夫か？」
「声？　さあおれは何も聞いてないけど」
クロードの返事にランケイは眉を引き上げた。彼女には今のが何なのかは、がさすがに分っているらしい。
「ランカさまが今の音に怯えていらっしゃる。惚けるのは止めろ。一体なんだったんだ？」
再び詮議の声を出すコウユウにクロードはあっさりと言った。
「空耳だよ。これ以上は答えない。答えるつもりもない。姫には、宿の下で野犬が騒いでいるのが窓を通して聞こえたとでも言っとくんだな」
「それが答えか」
コウユウにクロードは頷いた。
「それが答えだ。今おれは眷属の一つを南にやって門を突破できるか調べている。できるという報告があったらおまえたちは南に逃がすことにするよ。アシャンタ王国あたりがいいかもしれない」
クロードの言葉が急には飲みこめなかったのか、コウユウが口を

開けたままこちらを見ていた。
「どうやって。各門関の守りは硬いぞ」
やっと口にした問いにクロードはうんと頭を下げて、そのあとにっこりと笑顔を向ける。一見邪気の無い少年の顔にコウユウはどう言ったらいいのか判じかねて口を結んだ。
「空は手薄だと思うんだよね。きみらはおれの眷属に乗ってキータイから出る。そのまま南へ向かってくれ」
「そんな事をして……いや、それが本当なら嬉しいが。君らにはなんの益もないではないか」
釈然としない顔でそう言ったコウユウにクロードは笑顔を向ける。
「いや、きみらはせいぜい頑張って逃げてもらうよ。おれらはきみらを騙って宮城に乗り込むつもりなんだからね」
「私たちになり済ますということか？」
「ああ。今キータイ全域に回っている手配書は君のものだけだ。まさか、姫の顔まで手配書に描くわけにはいかないだろうからね。だけど所詮、似顔絵だ。どうとでもなる。それに俺の従者は化けるのが上手いからな、まずバレないと思うよ。俺は君たちを通報した善良な市民として宮城でたんまり褒美でも貰うことにする」
本当に信じていいのだろうか。コウユウの顔がそう聞いている。
「信じる信じないはそちらの自由だ。だけどここにいたって捕まるのを待つだけなんじゃないかな」
飲みこめないほどの不味い物を飲み下すようにコウユウは苦い顔を見せて隣の部屋に戻って行った。
「今の話本当なの？」
ランケイが机の上にあった赤い実を一つ取って齧る。しかし、視線だけは外さない。きちんとした応え以外聞くつもりは無いと言外に語っているようだ。
「半分本当で半分嘘かも」
「やっぱり」
溜息をついてランケイは窓際のクロードを見る。そんなランケイ

にクロードは悪戯っぽく笑った。
「途中でサウンティトゥーダには騒動をおこしてもらおうと思ってる」
「わざと見つかるように仕向ける気なのね」
「俺たちは宮城内からベオーク自治国に向かうつもりだから」
クロードの言葉にランケイははっと息を飲んだ。それ以上の説明は要らない。弟のところへ行けるのなら、他のことなんて目を瞑って耳を塞いでみせる。

運命の槍

「ランケイ、君は弟がもう生きていなかったとしたらどうするの？」
クロードの問いかけにすぐに反応できない。
その可能性の方が高いのは分かっていた。子どもを食糧として捕獲するのなら、もう弟はハイラ神の腹の中だと。
だけど、弟を助ける――そう思わないと生きていられない。自分が置かれた何もかもを忘れてしまうために。そのために弟の救出に必死になっている。
つまり、自分のためだと。
認めてしまうともう前に進めない。
鬱々としている自分に比べて淡々と物事を進めていくクロードが憎らしく思えてくる。ためらいとか、躊躇するとか。そんな片鱗の一つ見せないで自分の思った通りに事を進めていける技量と境遇にさえ、嫉妬する。
だから素直になれないのだとランケイは声を荒げてしまう。
「そんな事クロードには関係ないでしょ。あんたこそ、ベオークに行った後どうするつもりなのよ」
ランケイが言い返すとクロードはだよなあと笑う。
「考えて無かった」
「考えてない？」
うんと十四歳くらいの見かけどおりにクロードは頷く。
アーリア人特有の抜けるような白い顔にピンク色の粉を刷毛で一つはたいたような顔色。本物の銀も負けるのではないかと思うくらいのシルバーブロンドの髪。大きいアーモンドの形の藍色の瞳。通った細い鼻、ほんのりと赤い唇。
女の子と男の子の間の危うい均衡。この歳くらいの少年しか持てない色香がクロードにはある。いっそ儚いと表現したほうがいいと思える可憐な少年。

だが、これに騙されてはいけない。
内面は恐ろしく策略家で冷静で骨太なのだ。
見せかけに騙されると痛い目に合う。どう見ても十代初めくらいの容貌なのに実際は自分と同じ十七歳なのだ。だが、これも本当かどうかなど分からない。
もしかしたら、中身は恐ろしいほどの老人かもしれない。魔導師には分からないことが多すぎる。
「おれは破壊者だからね。おれが行くところ、行くところぶっ壊していく。そして帰るところすら無くなっているのかもしれない」
「破壊者？」
自分はもしかして人では無かったのかもしれないとクロードは思う。なんかの拍子に感情を持ってしまった厄災。何をしようとしても結局は壊してしまう方を選ぶ。もとより、ベオークを潰して生き残れる保証などどこにもないのだ。これこそが自分が産まれてきた役目なのかもしれない。力を持ちすぎたものへの神の怒り。
それがおれ、おれの正体。
神の下す怒りの『運命の槍』、おれの役目はそれなのかもしれない。そうであったなら、その後におれは生きているわけはない。
そうじゃないとしたって、
何百年も生きている者たちの悲哀を知って、歳を重ねていけない悲しみの一端を知ったおれはただの人には戻れない。
「奪った者たちの元におれも行くのが一番いいと思う」
「それってどこ？」
「どこだろう、行ってみなきゃ分からないだろうな」
黄泉の国、あるのか、どうか。本当はどうなのか、誰も知らない。
肉体が朽ちればそれでお終い。土地を構成する塵芥に戻るだけ。
そうなのかもしれない。
「お姫さまに上手く化けてよ、ランケイ」
「できるかしら、あたしに」
「外見ならたぶん」

煩いと茶碗を投げてきたのを笑いながら避けてみせてクロードはランケイの手を取った。
「君は幸せになる権利がある。失うものばかりじゃないさ、きっと」
「失うって」
何も言わなくてもそれがなんなのか、分かっていたが口に出せない。文句を言いたいのに声が出なかった。
「いつ出発するの？」
「アウントゥエンが帰ってきたら分かる」
クロードが計っているのは、楼蘭族の族長一行がキータイに来る頃合いだった。ザックに一暴れさせようとも思っている。
暴動や、罪人の逃亡。
そして魔獣に宮城内で暴れさせる。
一挙に色んな事を企ててキータイの意識を分散させる。
キータイにいる教皇ビカラのしもべを他の問題で足止めするのが目的。
結界に守られて今まで何事も無かった大国で起こる騒動の数々にきっと警備は手薄になる。
クロードが狙っているのは、ベオーク自治国への扉。
龍門を使ってベオークに行く。教典が身の内にあるクロードも、バサラの眷属であるラドビアスも無事だろうが。
ランケイは無理だ。ただの人である彼女には龍道は灼熱地獄となる。それを教えていないのは彼女を連れて行くつもりはクロードには無かったからだ。
ザックには彼女を妃として連れ帰ってもらう腹積もりでいた。
実際の皇女だろうがなかろうがそんな事はどうでもいい。言ってしまえば、キータイ側だとしてもその者が本人かどうかなど実はどうでもいい。そういう看板を背負った高貴な女、いわんやそう見える女性であればいい。キータイが本物だと言い、本人が名を名乗る。それこそが大事なのだ。

動くー1

ランケイの弟はすでに生きてはいないだろう。それを知って自棄に走っても、何も事態は変わらない。過酷な運命にもがく人間ならこの世界には五万といる。一人を救ったとしてただの自己満足なんだということも分っているが。

自分が出会った、それこそがなにか意味があると思っていたい。

「一つくらいは良い事をしたって罰は当たらないんじゃない？」

「なんの事？」

何でもないと手を振ってクロードは迫る気配に眉を上げた。

「ただいま戻りました」

扉を開けて見慣れた顔が頭を下げた。いつものように、そっけないほどあっさりと戻って来た自分の従者にクロードは何かを言いかけて止めた。

「何です？」

「いやなんでもない」

「気になりますね、何か仰りたいのでしょう？　何です」

「おまえ何か連れてきた？」

はっ？　思わずラドビアスは、後ろを振り返ったがそこには当たり前だが何も無い。

「何も……どういうことでしょうか」

「北の気配。おまえ、沙羅の匂いがする」

クロードの言葉にラドビアスは一拍遅れてふっと笑った。沙羅の木はベオーク自治国の国木として朝陽宮の城壁に沿って植えられている。

「ここら辺には沙羅はありませんが。何かとお間違えになっておられますよ」

「かもな」

交差する視線をラドビアスはかわして首を傾げた。

「魔獣が戻りましたか、クロードさま」
「いや、まだだ」
口元は笑っているが目が笑っていない。今まで感じた事のない緊張感がクロードを満たす。
彼の師だったユリウスの孤独が今は良く分かる。初めから自分と一緒にいる従者が裏切っているかもしれないと言う疑念。
それは内側から侵食されていくような苦痛だった。
――おまえしか頼れるものはいないのに。
おれはただ一人でこの先を歩くのだろうか。ラドビアスの献身を疑うわけではないが、所詮彼はおれの眷属では無いのだ。
クロードはにっこりと笑ってラドビアスを見上げた。
「今日の晩御飯は何にする？」
「さようですね、宿の主人に聞いてまいりましょう」
深追いすることなく、ラドビアスはそう言うと部屋を出て行く。お互いに相手が気づいているのではないかと思っているのだ。猜疑というものは、容易く人に近づいて知らずに本人をのっとってしまう。気を付けないと自分を見失うとクロードはラドビアスの背中を見ながら唇を噛んだ。
俺は捻くれただけの十四歳のがきだったのに。妾腹の州公の三男、陽の当らない境遇でもそこそこ幸せだった。それが今は――。
あれから三年しか経ってないのが信じられない。随分とおれは運命の女神に嫌われているもんだ。それとも遊ばれているのか。
「クロード、あんた人なの？　それともあんたが連れている獣と同じなの？」
「獣？」
ランケイの問いにクロードはすぐに答えられない。実際、自分は人の範疇にまだいるのだろうかと思う。俺が魔教典を体内に封印した時から。いや、実は産まれてきた時から、魔導師側に引き渡された時から自分は人では無かったのかもしれない。
「ランケイ、君にはどう見える？」

「そうね、外見は完ぺき西の貴族の息子だけど、中身はおっさんだわ。腹黒の」
ランケイの素直な意見にクロードは噴き出した。
どう深刻に考えてみても、他人から見ればその程度の違いなのだ。
「戻った」
赤い塊が窓からするっと入ってきて、クロードの横についた。
「どうだった？」
「明後日にはキータイの入り口に着くな。総勢たったの千人足らずだったぞ。キータイを守る禁軍は二万は下らない。どうする」
クロードに喉を撫でられて赤い狼は翼をやや広げて主人に見せる。翼の付け根を軽く揉まれるのも気持ちがいいのだ。
「ランケイ、そろそろ姫を南に逃がそう」
おねだりに相好を崩してクロードは魔獣の翼の付け根を揉みながらランケイを見た。
「……そうね」
そう言ったものの、ランケイは膝が震えるのを止められない。途中で黒いドラゴンは二人を見捨てるのか。それとも派手に暴れて正体を知らせるつもりなのだ。
そこで軍隊はどれほど動くのか。そして、楼蘭族の表敬訪問を反乱に仕立て上げる。
これで軍は半分以上動くだろう。
身分を偽って入り込んだ自分たちが、そこで騒動を起こす。
上手くいくのか、クロードを問い詰めたいが、それには彼だって応えられないだろう。また人が死ぬ。それをどう自分の中で消化すればいい？
「ラドビアスが戻ったら、そろそろ動く」
クロードに頷いてみせてランケイはさっきの答えが間違っていたと思った。どう見ても貴族のお坊ちゃんには見えなかった。
あんたは死神だと口の中でランケイは呟いた。

動く1-2

「今日は饅頭と野菜の炒め物らしいです……おや、アウントゥエン帰りましたか。サウンティトゥーダは、まだなんですか？」
ラドビアスがドアを開けた。
「そうだな。サウンティトゥーダが戻ったら姫は出発してもらう」
「承知しました。話してきます」
ふんっと大きな鼻息が聞こえる。　注意を即すような魔獣の態度にクロードが窓を見ると黒いものがこちらへ向かって飛んできていた。　どんどんとそれは大きくなっていく。
「お帰り、サウンティトゥーダ。どうだった？」
あっと言う間に窓からその長い髭をくるりとクロードに回してドラゴンは姿を一回り小さくした。
「国境は流石に警備は厳重だが、空はなんということもない」
「国境までじゃなく、その途中で森かなんかを壊せ、注意を引きつけろ。　なんなら同胞を呼び出してもいい」
「同胞？」
薄ら惚ける魔獣にクロードは髭を？まえて軽く引っ張る。
魔界から沁み出るように小物がこの世界に出ているのは事実だった。　山に住んでいる二股の蛇、沼に住む大きなナマズ。　そんな話の主たちはおそらく魔物。　ある意味、地元民たちは本当のことを言っている。
「そう、おまえの同胞だ。惚けるんじゃない。そこら辺にいるんだろ」
「同胞なものか。あいつらは考える頭も持たないただの雑鬼どもだ」
一緒にされるのが我慢ならないというようにサウンティトゥーダが棘のある尻尾をぶんっと振った。
「とにかくそれらを総動員して大騒ぎしろ。魔獣が主から離れて命を破ったってことでいいだろう」

「言っとくが自分はそんなばかじゃないぞ」
横で赤い狼が笑うように鼻に皺を寄せる。　それに気づいてドラゴンが殺気だった。　空気がぐっと重くなったのを感じて、クロードはいつも一言多い赤い狼を一睨みする。
「おいおい、ここで暴れろなんて言ってない。サウンティトゥーダ、アウントゥエンに構うな。アウントゥエン、おまえ黙れ」
つんと横を向いて顎を前足に置いた赤い狼にため息をつきながら、クロードは隣の部屋に入った。
「いきなり部屋に入るなど無礼であろう」
コウユウがランカ姫を庇うように立ち上がった。
「出発してもらうよ、おれの眷属が戻ったからな」
クロードはそう言って手に持っていた古着をコウユウの手に置いた。　その頼りない重みにコウユウは絶句する。　頼りない自分に見えない未来。　これで良かったのかと急に足が竦む――そんな様子にクロードは思う。
今更だと。　今更思い悩んでどうする。　姫の手を取った瞬間に二人の行く選択は限られていたのだ。
冷静に対処するなら、賢明な者なら。
自分の立場を諭して、自分は職を辞して姿を消すのが一番だった。
何が変えたのか。　それは愚かな恋心というやっかいなもののせいだったのだろう。
愚かだが、御しがたい強い欲求。　捕われてしまって、姫の手を取ったのだから。　そして偶然とは言え、おれの前に現れてしまったのだから。
捕まって処刑されるか、万が一助かって人知れず生きていくか。
そして今はおれの手駒となってぎりぎりまで逃げてくれなければ。
「行かなきゃ、そのためにここにいるんだろ。二人で生きろ」
「そうだ……そうだな、ありがとう」
コウユウの肩に手をぽんと置いてにこりとクロードはほほ笑んだ。
邪気の無い笑顔、それはいくらでも作れる。

「着替えたらおれの眷属を紹介するよ、無口だけど良いやつだからね。ランケイ、姫の着替え手伝って差し上げて」
自分とすれ違いに入って行くランケイが咎めるようにクロードを見る。　それもクロードはにっこりと受け流して部屋を出た。
「ラドビアス、羊皮紙あった？」
ええ、こちらにとラドビアスが卓の上に丸めた羊皮紙を広げて四隅に重しを置いた。
「インクが手に入らなかったのでこれを」
「何？」
「墨と言います。大陸の東ではインクでは無く、これを細い筆に含ませて使うのですよ」
初めて使う筆は太さを一定にするのは結構大変だが、藩字を書くのには向いているのだと知った。　藩字は装飾的な文字でクロードが使っていたアーリア系の横に書いていく文字とは明らかに違う。
古代レーン文字とも違うそれは、この筆で本来書かれるものだったのだろうと知れた。
円が切れないように苦労して新円を何個か組み合わせて、そこに相対する線を引き、藩字を書き入れていく。　一つでも間違えると術は発動しない。　手が擦れて線を消してしまってもダメだ。　慣れない筆を使っての作業に遅々として作業は進まない。
「少し、休憩なされませ。墨も乾く時間が必要です」
「そうだな、ここまでで間違ってないか、見てくれラドビアス」
席を立って窓際に行くと赤い魔獣がクロードの手を舐める。　黒の魔獣の長い髭が腕に絡んだ。　二頭の間に座り込んでクロードは体を魔獣に預けて目を閉じた。
立ったままで羊皮紙を上から眺めているラドビアスは内心驚いていた。　ここまでどこにもわずかな間違いが無い。　前にこれを見たのは三、四年も前のはず。　何百年も生きる自分たちは記憶が常人と違い掠れる事が無い。　積み重なっていくだけだ。　それと同じくらいクロードの記憶能力が優れていると思わざるを得ない。

カルラが描いた内容をこれほど緻密に覚えているとは思っていなかった。

これは本当に忘却術をかけることになりそうだと目を閉じている主人に視線を向けた。

動く－3

主人は、クロードはどこに向かおうとしているのか。
「命を、大事にして頂きたいとお願いしてよろしいですか」
「……失うことをためらって、もっと失うことになるかもしれない。そんなのは嫌だ」
魔獣に凭れかかったままクロードは目を開けてラドビアスを見ていた。
「他人の命など関係無く、わたしは主のことを言っているのです。あなたのことです」
ラドビアスの言葉にクロードは声を上げて笑った。
「あはははは、おまえってやつは。おれはなかなかしぶといよ。おまえだって知っているだろう？　だけど、おれが死んだって悲しむやつなんていない」
「いえ、ここに」
「そうだな、でもおれが死ぬときはおまえら全部道連れなんだから、やっぱり悲しむ人はいないんだよ」
だよなとクロードが顔を上げるとラドビアスはやっと頷いた。
「そういうことなら依存ありません」
彼にとって、生から死への境はあまりにも低い。　彼が危惧しているのは主人の死後、自分が生き延びていることへの恐れ、それ以外に無い。
主人以外の人間の生き死になど、実を言えばどうでもいい。　自分も連れていくというのなら、自分の死さえ歓迎できる――そう思った。
あまりにも長く生き過ぎて、生を実感することも無くなっていた。
人を人たらんとしているものは、生への執着、あるいは死への恐れなのだろう。　どっちにも関心の無い自分はすでに人では無い。
普通、人は五百年以上も生きてはいない。

自分はバサラに龍印を刻印された時にすでに人では無くなっている。　その寿命を超えた後の亡霊のように現世に彷徨う自分を断ち切ってくれるというなら、やはりわたしはこの主人とともに行かなくてはならない。
そう思いながらもクロードを死なせたくない一心で自分は主人を裏切るのだ。　主人の心に沿いたい自分と己の気持ちを優先したい自分と。
最後にはどうするのか、自分は腹を括らねばならないとラドビアスは魔獣に凭れている主人を見つめた。
「用意ができたわ、半分は」
ランケイがお手上げとばかり隣の部屋から出て来た。
「半分って？」
コウユウはすぐに着替えたけど、お姫様は古着なんて汚れた物に手を通すなんて一生の恥だそうよ」
ランケイの言葉に目を開けたクロードとラドビアスは顔を見合わせた。
「死んでしまったら恥もかけないだろうに。しょうがない、アウントゥエン、サウンティトゥーダ、おいで。姫様を説得しよう」
「言うことをきかない女を食っていいか？　クロード」
サウンティトゥーダが勢いよく起きてクロードの顔を窺う。　その横にいた赤い魔獣も猫のように背中を伸ばすと起き上がり、二頭の魔獣は期待に満ちた顔でクロードの言葉を待っていた。
「食べちゃだめ」
クロードの返事に、黒い魔獣は尻尾を彼にしては控えめに上下することで訴えるが、テーブルの足が折れて吹っ飛び、赤い魔獣の吐いたため息に含まれていた火の子がカーテンを燃やした。　片眉を上げたラドビアスが即座に術をかけて消火する。
「止めなさい、行儀の悪い獣ですね」
ラドビアスに向けて二頭の魔獣がいっせいに不満の声を上げようとするが、すかさずクロードが二頭に手をを向けてそれを阻止する。

「後で暴れさせてやるから今は我慢しろ」
　それでも尚、グルルと喉を鳴らすが「煩いですよ」ラドビアスは気にもしてない。
「わたしが話をしましょうか？」
「いや、いい。こういうの、嫌いじゃないしね」
　悪戯っぽく笑う主人にラドビアスが「そうでした」とこちらはあきれ顔で応じる。　トントンと扉を叩いてクロードが隣の部屋に入って行った。
「ランカ姫、なんだか御不興を買われるようなことがありましたか」
「おまえ、あの不躾な娘をどうにかなさい。煩いし、目上の者に対する言葉づかいもできないなんて。主人として失格ね」
「ランケイはわたしの使用人じゃないもので。ですが、姫。その大仰な成りじゃ自分がお尋ね者だと触れまわるようなものですよ。お気持ちは察し致しますが、何とぞこちらで用意差し上げたお召し物に着替えくださいますようお願いします」
「嫌よ、コウユウこの者を追い出して」
「姫」
「ま、こんな言葉で言うことを聞くなんて思って無かったけどね。あんたらを南に連れて行く俺の眷属を紹介するよ、その上でまだ我ままを言うなら要相談だ」
　クロードは不敵に笑って扉を振り返った。
「アウントゥエン、サウンティトゥーダ入っておいで」
　聞きなれない西側の名前にどんな大男が入ってくるかと思っていた二人の前に現れたのは思ってもみないものだった。
「こ、これは？」
　コウユウがしがみつくランカ姫を庇いながらクロードを見る。
　こんな動物を見たことが無い。　西側にはこんな変わった生きものがいるとでもいうのか。　深い暗褐色の狼の背には大きく実用的な羽が備わっている。　その横にいる黒い生きものはもうすでに空想上の生き物としか知らない。

「おれの可愛い眷属だと言ったろ。こっちの赤いのがアウントゥエン、黒いのがサウンティトゥーダ。おまえたちが一緒に行くのはこっちのサウンティトゥーダだよ」
「おまえたちは我々を騙していたのか？　こんな獣を一頭付けてどうするというのか」
　しかしコウユウはそれ以上何も言えなかった。　どうなったかも分らないうちに床に抑え込まれていた。顔にかかる生臭い息を吸わないように顔を必死で背けるしかない。
「ただの獣だとバカにしているのか、人間」
「しゃ……べれる……のか、この獣は」
　サウンティトゥーダがクロードの方に向いた。
「やっぱり食べていいか」
「そうだな、おれたちを下にみてるらしいからな。おれの眷属はそこらの動物なんかとはわけが違う。そしてあんたらはおれたちより立場は下なんだよ。そこをはき違えないほうがいいよ、コウユウ。アウントゥエンやれ」
　クロードの声の後に飛び出した赤い魔獣が寝台に飛び上がり姫を押し倒す。　寝台にあった天蓋を支える柱は蝋燭のように折れて飛んだ。
「甘やかすのはもう終わりだ、女」
　クロードがそう言って魔獣の足に触れる。
「ちょっと味見をしてみるか、アウントゥエン」
　ひっと息を飲む声がする。　そこに長い舌が伸びてランカ姫は気を失った。
「止めろ、姫に指一本でも触れると許さないぞ」
　コウユウが叫びながら魔獣から逃れようとするが抑えられている体はびくりとも動かない。

動く－4

「あははは、声だけは威勢がいいな。おれたちを頼ったのを後悔する？　でも言うことをきかない選択はないだろ。命が惜しいなら自分の女を着替えさせるくらいしろ、いいな。でないと守るべき女はおれの可愛い眷属の腹ん中だ」

この下品な言葉で自分を脅しているのは本当に目の前にいる少年なのか。　コウユウは息をするのを忘れて目の前で冷やかに笑う綺麗な少年を見上げた。華奢な腕を組んで何か楽しいことを話しているような口ぶり。　だが、内容は自分たちにとっては楽しいものではない。

「女と一緒に暮らしたい。それって二人が添うってことだろ？　このままでいいの？　苦労するよ、あんた。それが好みって言うんじゃ他人の出る幕は無いけどね。ただし、命が惜しいなら今はおれたちの言うことを聞いてもらう。おれの眷属はそこら辺の人間なんかよりよっぽどあてになるが、そこら辺のごろつきなんかよりよっぽど恐ろしいことを分らないと」

「分ったから姫から離れるようにあの獣に命じてくれ」

「アウントゥエンって名前だけど」

「そ、そのアウントゥエンをどけてくれ」

「アウントゥエン、降りろ」

クロードの声に飼い犬の従順さを見せて、赤い魔獣が音も無く寝台から降りる。　気をつければこんなに大きな体を感じさせないほど細やかな動きをすることもできる。　ふわりと床に降り立った赤い狼は伏せをしてクロードを見上げた。

「半刻後に出発だ。そこにある服をランカ姫に着せろ。自分でできないならランケイが手伝ってくれるように頼んでやるけど」

クロードは言うだけ言うと部屋を出て行こうとして、気が付いたかのように後ろを振り返った。

「アウントゥエン、サウンティトゥーダおいで」
伏せをしていた二頭の魔獣が少年の後について部屋を出て行くのをコウユウは茫然と見ていた。
優しい顔で自分たちの窮地を救ってくれると思っていたのは、悪魔だった。　一番会ってはいけない種類のもの。　分らないように人間に混じっていた魔物。　どうして声をかけてしまったのか。
「ランカさま、わたしが命に変えてもあなた様をお守りいたします。どうか、これにお召し変えをお願いします」
「コウユウ、怖いわ。どうなってしまうの？」
ランカの言葉にコウユウは唇を噛みしめた。　それは自分が一番聞きたいことだった。
コウユウとランカ姫を乗せたサウンティトゥーダが大きく開いた部屋のバルコニーから飛び立った。　それを見送ってクロードは置いていた巻物に目を向ける。
「さて、これを仕上げなきゃな」
「墨を磨っておきました。これをお使いください」
独特の匂いのある黒い液体に細筆を浸す。　俺は一つ一つ片付けていくだけだ。　人の心なんて今は要らない。　クロードは深呼吸をして羊皮紙に向かった。
「さて、ラドビアス。おまえは俺がこれを仕上げている間に、楼蘭族を出迎えに行ってくれ。自国の姫を嫁がすと言ってハオタイは偽者を掴ませて油断したところを襲うつもりだと言ってくれ。やり方は任す」
「わたしに任すなんて大雑把な事をおっしゃりますね」
「うん、おまえなら上手い事やるだろ？」
「やりますよ、勿論」
ラドビアスはそう言うと姿を隼に変える。
「では行ってまいります」
頷くクロードが顔を向ける前に隼は窓から飛び立っていった。
「おまえは悲しいか、クロード」

ふいに声をかけられてクロードは、筆を落としそうになって慌てて立ち上がった。　声の主は窓側に寝そべってこちらを見ている。
風が赤くて長い体毛をそよそよとなびかせていた。　思わず今のは幻聴かと思いそうになる拍子抜けするほど穏やかな光景。
「別に悲しくなんて……」
「匂いがする」
匂い？　もうそんな風に言われてしまったら、どう言い繕っても仕方ない。　クロードははぁとため息をついて寝転んでいる自分の眷属を見た。
「ときどき、自分は何をやっているのか分らなくなってさ。ぐらぐらすることがある」
近づいてきた赤い魔獣がふんふんと鼻を鳴らしてクロードの手を舐めた。
「揺れてないから大丈夫だ。ぐらぐらしてない」
安心させるみたいに断言するアウントゥエンにクロードに笑みが零れる。　心配させてしまった。　主人がどっしりとしていないと下は不安なのだ。　おれはいつまで経っても半人前だ。
「そう？　揺れてない？　それなら心配ないな」
魔獣の眉間の間を撫でてやると目を細めて猫のように喉を鳴らした。　そのわずかな時間、少しの中座がクロードには癒しになっていた。　人の裏ばかり見て、裏ばかりかいている自分が心底安心して心を預けられるのは、二頭の魔獣だけ。
――ああ、それってまたちょっと悲しいかも。
おれは、世話になった楼蘭族まで手駒として使おうとしている。
きっと何もかも終わったらおれは罰を受けるだろう。
「アウントゥエン、おまえ主人との契約が終わったらいつも元主人を食い殺していたんだろ？　おれも食べる？」
「我はそんな野蛮なことはしないぞ」
つんけんと魔獣は答えて顔を背けた。　魔獣は自分たちのことを語りたがらない。　寝たと思ったおれの傍らで、おまえの相棒と人

の味について語り合っていたのを聞いたと言ってやったらこの魔獣はどんな反応をするだろう。
「クロード、楽しそうだな」
「匂うかい？」
うん、ちょっと楽しくなったとクロードは笑った。

楼蘭族の憂鬱ー1

「キータイってえのはやっぱりでかい都なんだろうなあ」
「そりゃ、ハオタイの首都なんだからよぉ、旨いもんもたんとあるぜ」
「ハオ族の女も抱けるのかな」
過酷な砂漠を過ぎて、気候の穏やかな地域に入った楼蘭族の一行は、途端に気が緩んでしまったように姦しい。　まあ、今まで大人しかったのが奇跡というもんだろう。　ザックはログ―の背に揺られながら苦笑いを浮かべた。
しかし、困難なのはこれからなのだとザックは思う。　気象が厳しいのは織り込み済みで、俺達にはその方が馴染みがある。そうじゃなくて。
自分たちが向かうのは、この広大な国の本陣と言える場所。　そこに住む皇帝を頭に海千山千のやつらと渡り合おうのだから。　自治を求めて表敬訪問する――対等に見えて実は飛んで火に入る虫けらと奴らは思っているかもしれない。
交渉術、そんな高度な腹の探り合いなど経験したことが無い者ばかりの集団。　良く言えば純朴で、反対側からみれば世間知らずの田舎者。
それが俺らだと口に出せば横にいた副官の男が問うように首を傾げた。
「何でもない」
否定の言葉を口にして、何でもないことは無いよなとザックはひとりごちる。
その困難さに気づいているのが、ザックだけと言う甚だ心もとない集団があともう少しで大陸屈指の大国の首都『青い都キータイ』に乗り込もうとしていた。　その数九百五十、背中に反りの入っている剣を背負った色の浅黒い大男たちの集団は、街道を行くそこか

しこで注目を浴びていた。　しかも彼らが乗っているのはキータイでは見かけもしない大きく太い足を持った鳥。　目立たないわけが無い。　キータイの手前、ダイアンという街の宿、そこが今日の宿で、明日はとうとうキータイに入る。

――ここまで来て心底帰りたいと思っている俺は、相当な臆病者だ。　だが、自分たちの将来を考えるといつかは行動しないといけないのだろう。　それが何で俺なのか？　そこが割り切れないと言えばそうだ。

それもこれもあのガキのせいだったとザックは零す。　俺は、普通の砂漠の案内人だったはず。　それが、あの小生意気なガキの入れ知恵のせいで功績を立ててしまい、あれよあれよと言う間に楼蘭族の族長扱いになってしまったのだ。

楼蘭族は今まで固まって政治的集団を作ったことは無い。　勿論、数人から十数名ほどの人数が集まって行動することはある。　だが、それは利害の絡む場合上の事であり、請け負った仕事が終われば、また散り散りになっていく。　そのため長い歴史の中で楼蘭族の名が出てくることはまれであり、その正確な人数さえも把握されていない。

豊かにはなれないが、背負うべき責任も無い――それが変わる。正確な人数も所在も分らなかったゆえに支配者からの干渉も受けなかった。　それが、高額の通行税を受け取って分配する。　政治的集団となった途端にその土地と人民を領有し、権力を行使する立場の人間が必要になっていく。　好むと好まざるを別にして。

そして集団以外との抗争が始まる。

――昔は良かった。そんなことを皆の前で言うわけにはいかないが。

「くそっ、前は暢気で良かったぜ」

ザックの口からまたしても独り言が漏れる。　自分だけなら。野垂れ死にしたって好きに暮らしていればいい。　だが、先細っていく暮らしを黙っていられないと思ってしまったからには仕方ない

のか。
キータイからは、皇女の一人を俺に賜ると使者をたててきていた。
つまり、それで鉾を納めよということらしい。　俺達はその花嫁を迎えるために出向いている。
俺はその皇女を欲しいのか？　女に興味無いなどというつもりは毛頭無い。　興味はあるし、いい思いもしたい。　だがそれは体の欲を解消したい、そう思っているだけのことで。　皇女なんて手間のかかるもん、本当は欲しく何かない。
ザックは考えれば考えるほど鬱々としてくるのを無理やり頭から追い出した。
「隊を止めろ。街の外れで野営する。明日からは何があるか分らない。皆に充分に休息を取るように言ってくれ」
「隊列、止まれっ」
旗を持った男が集団の周りをログ―に乗って大きな声で駆けていくのをザックはため息交じりに眺めていた。
――羊を追う犬みてえ。
そんなことを思うなんて俺はバカかとザックは思った。　統制の取れてない隊を憂いこそすれ、面白がってどうする。　隊列などと言えないほど稚拙な集団なのだ。
だが、変わって行く。　変えていくのだ。
考え事をしていたザックの目の前を黒いものが横切る。　それは小さく一陣の風かと錯覚しそうなほどのもの。
「お話があります」
どこからの声か確かめるように頭を巡らすが、その声の主はいない。　ザックは嫌な予感を感じて自分の肩に目を移した。　そこには一匹の蝶がひらひらと羽を広げていた。　しかし、これがただの虫だと思うほどザックも純じゃない。
「おまえ、何もんだ。魔導師ってやつか」
呟く声に蝶は反応したかのように羽を上下させた。
「クロードさまの配下でございます。この度の婚儀の件について主

人からザックさまにお伝えしたいことがあります」
「婚儀？」
ザックが嫌そうに肩を動かす。　皇女との結婚だと浮かれているのは、俺の仲間だけだろう。　一体本当に皇女なのかも怪しいと言おうとしたザックの肩で蝶は長い触角を足でつるりと撫でた。
「差しだされた皇女は偽物ですよ、ザックさま」
「ちぇっ、んな事はこっちでもお見通しなんだぜ。だからクロードはなんだって言うんだよ」
「主は、兵を上げることをお望みです」
「はあ？」
ザックの大声に周りの男たちが飲んでいた水を噴き出した。

楼蘭族の憂鬱ー2

「な、なんだと？」
「聞こえませんでしたか」
「聞こえてるよ、耳元で喋ってるんだから。じゃなくて、俺が聞いたのはクロードの真意だよ」
後ろから肩を揺すられてザックは、はっと周りを見回した。　しんと静まり返った中で男たちが心配そうに彼を見ている。
俺が少しでも動揺したり、心配そうな素振りを見せたら駄目だと最近分ってきていた。　頭ってやつは、面倒くさいものだ。
「なんでもねえ、あれだ、独り言だ。おまえらあんましうろうろするなよ」
ザックが顔の前の蝿でも追い払うように手を振った。
「ちょっ、ここじゃそんな物騒な話はできねえぜ」
「では、少し目を閉じてください」
「変なまねすんじゃねえぞ」
目を閉じてね、なんて場末の飯盛り女でも言わねえとぶつくさ言いながら、ザックは目を閉じた。　途端に遠心力がかかったように外側に体を持っていかれそうになるのをぐっと踏ん張って止まる。
「もうよろしいですよ」
その声に目を開けると、ザックの目の前には以前クロードを迎えにきた彼の従者が立っていた。　背の高いアーリア人。　周りを見回すと、机とそれを挟んで椅子が二脚の簡素な部屋の中に二人はいるらしかった。
「ここはどこだ？」
「ここは結界の中です。殺風景なんで部屋風にしてみましたが、場所がどこかと言われたらさっきと同じ場所です」
前に会った時もいけ好かねえやつだと思ったが、しみじみ見てもやっぱり気にらねえ。　そんなことより、さっきの話だとザックは

目の前の男を睨んだ。
「俺達が兵を上げるってどういうことだよ」
「まあ、立ち話もなんですから座りませんか」
ザックの苛立ちを知らない素振りで、男は簡単な作りの椅子を指さした。　相手がどすんと座ったのを見届けてから、懐を探る。
「同じ王朝が長く続くのは闇も深い、そうは思いませんか」
「一体何が言いたいんだ、おまえ。奥歯に物が挟まったような言い方をすんじゃねえ。ちっとも分らん」
ザックの文句に目の前の男は薄っすらと笑う。　まったく、主人といい、家来といい、腹ん中が見えないという点においてはいい勝負だぜとザックは思った。
「これを使って、あなたはハオタイの玉座に座るというのはどうですか」
ぱさりと机の上に置かれた紙の束には見覚えがある。　というか、ザックにとってはお馴染みの物。
男が差し出した呪符はサラマンダーを操るためにザックが使っているものだった。
「何、言ってるんだ」
思わず椅子から立ち上がってザックは男を初めて見るように眺めた。　ばかな好事家に二束三文の掛け軸だか、壺だとかを売ってんじゃねえんだぞ。
ハオタイ皇国、大陸の大半を支配している、つまり大陸を支配してるのと一緒ってことだ。　そこに一族の自治を嘆願しに来たのが俺達だ。
つまり、自治さえも無い民草ってのが今の俺達だってのに。
頭がおかしい。　クロードに会ったときも相当に頭がおかしいと思ったもんだが、こいつだってなかなかだ。　たかが千人足らずの雑兵を率いている俺が大国の主人になる、だと？
「てめえ、俺が無学なのをバカにしやがって。一体どんな悪さを考えてんだよ。王様にしてくれるって聞けば、尻尾を振るって思って

るんだったら生憎だったな」
ザックの声が聞こえているんだかいないのだか、男は世間話をしているように顔色に一つも変わらない。　そこにまた腹が立つ。
「俺らはおまえらの企みの駒なんかじゃねえっ」
ばんっ、机を叩くとそれは粉々になって消えた。
――そうだった。クロードは魔導師だった。　つまり、こいつも魔導師なわけだ。　見えているものが全てとは限らないじゃないか。
魔導師は性根が腐っていると、祖母ちゃんがよく言っていたもんだ。　いや、祖母ちゃんが魔導師を直に知っていたという話は聞いていないが。
砂漠の民にとって、魔導師という種族ほど遠い物は無い。　西方のアーリア人や、南方のアシュラ族、東方のハオ族、それよりもずっと実態の無い空想上の生き物なのだ。
例えば、悪戯する子どもを叱るときに。　または、約束を守らない相手をなじるときに。　魔導師が攫いに来るよ、魔導師みたいに腹黒いやつだな、とか。
本物に会えば、そんな事は無いということが多い。　噂で極悪人だと言われているやつが、会ってみると結構気安い良い奴だったなんてことがある。
だが――とザックは目の前の男をねめつける。
魔導師だけは、言い伝えどおりだったよ。　そうザックは記憶の中の自分の祖母に語りかけた。
男が指を上下すると、机が元通りになっていた。　壊れたことなんて無かったかのように取り澄ましている。　そう思うのは目の前の男のせいか。
「乱暴ですね、勝算はあるから申し上げているんです。このままどこの馬の骨とも分らない娘一人連れて砂漠に帰ってもいいことなんかありませんよ」
男はザックの怒りなど鼻にもかけていないように淡々と話を続ける。

楼蘭族の憂鬱ー3

「砂漠にいるサラマンダーを纏めてキータイの境界におびき寄せましょう。キータイに敷かれている結界は地下までは及んでいないはずです」
「おびき寄せるって簡単に言うが、そんなことできるのか」
「できなかったら、こんな事わざわざ言いに来ません」
真面目な顔で男はあっさり言う。
「じゃあ聞くが、俺らが国盗りをしている最中に、おまえの腹黒い主人は一体何をしようって魂胆なんだ？」
まったくの親切心だなんてとてもじゃないが思えない。こいつは裏に何かあるはずだ。目の前の男を一睨みしてやると、相手はふっと口角をわずかに上げた。
「やっぱりな」
まったく魔導師ときたらろくでもねえ。俺らのためにとか表面では優しげな事を言いながら影で何やら企んでるに違いない。
「主はハオタイには興味がありません。『何か』を仕掛けるのはここでは無いのでご安心ください」
男は今度は明らかに笑顔を浮かべてザックに手を差し出した。だが、その手をザックは見ない振りをする。握手など西側の国の風習だ。いや、それを知ってる時点で、応えればいいのかもしれない。だが、したくないものはやっぱりしたくない。
こいつ、腹の中では何を思ってるんだ。
笑っているのにちらりとも親近感が湧かない。なんでそう思うのかが少し見えてくる。男の笑顔に情の欠片も無いのが透けてみえるからだとザックは気付く。こいつは主人以外に興味などまるっきり無いらしい。
人がどうなろうと関係ない、自分の主人以外はどうでもいい。そう思っているのが見えてしまうと信用なんてできない。

ガキの姿のくせして、やけに老成した印象だったクロードを思い出す。　こんな大人に囲まれていたのならあんな可愛げの無いやつに成長するのも分る気がする。　俺に預けたらもっと立派な大人にしてやるのにな。　結局あいつは俺たちに稼ぐ道を、キータイに認めさせる道具を与えてくれたのだ。

そっけない態度の裏に見える優しさと大局を見る器は持って生まれた物だろう。　上に立つ者に備わっている気質。　結構好きだったと思う。俺について来いと、いやどうだろう。　実際俺が関わっていたいと思っている。

「そのばかげた提案をあんたの主人は知っているのか」

「ええ、それが？」

大きく息を吐いてザックは目の前の男を見た。　自分の一言で仲間の運命が変わってしまう。　そんな重圧を背負わされるには自分は非力だ。　実は恐ろしくて一歩も前に進みたくないと思っている矮小な自分。

それを投げ打って逃げる根性も無い。　だけど、俺はクロードを信じたい。

「畜生っ、魔導師なんか助けるんじゃなかったぜ」

どんっと机を叩くと、それは術で出したくせにやけに硬くて拳が痺れる。　まがいものだろうが、勢いだけだろうが自分が信じることで実体化する、そういうことか。

「てめえはこれっぽっちも信じられないが、てめえの主人には恩もある。幻の民族がキータイを乗っ取るっていうのもばかばかしくていいかもな」

「それは我々の申し出を受けると捉えてよろしいのですね」

「そーだよ、しつこいぞ、おまえ」

自分が決めたことなのに、ザックは苛々して当たり散らすが、男は平然としている。

「では、さっそくサラマンダーを誘いだしに行って参ります。晩には戻りますので、決起の間合いはまた謀ってからということで」

話を淡々と済ますと、男は一羽の隼に姿を変えて空に消え、途端にザックの耳に聞き慣れた仲間の声がわいわいと聞えてきた。
奴の結界が無くなった――そういうことか。　やっぱり気味悪いぜ、魔導師って奴はとザックはぶつくさと一人ごちた。
「族長、さっきからどこに行ってらしたんで？」
「え？」
三十初めの陽に焼けた顔を心配そうに向けて族長補佐を任せているグルバが話しかけてきた。　大柄で陽に焼けた気の良さそうな男。
人は良いんだよ、人は。ザックは回りをぐるっと見まわす。
だが、それだけじゃだめだ。
「いや、ちょっとな。それより、隊の長を全員集めてくれないか。大事な話しがある」
「大事な話？」
頭を傾げながら、グルバがログ―をくるりと返して走り去った。
それを目で追いながら、今から自分が仲間に告げるばかばかしい提案を思って冷や汗をかく。　皆が諸手を上げて喜ぶ姿が目に浮かぶ。
自分らが、大国の主になると大喜びするだろう。　まったくもって純朴すぎる。　政治の駆け引きも権力の行使にもまったく縁が無かったために楼蘭族は民族としての知力は子ども並みだ。　これが個人の利益になると、狡すっからいくらいに計算高くなるくせにとザックはため息をつく。
俺だって気楽に暮らせていたのに。ザックは頭を振った。　どれだけの事ができるかわからないが、俺は仲間を失わない。
こうなりゃ、本気でキータイを奪ってやると拳をにぎった。

いざ、行かんー1

「戻ったか」
窓から飛び込んできた隼に手を差し出してクロードはその猛禽の頭を撫でた。
「その様子だと上手く事が運んだようだな、ラドビアス」
隼は頭を上下してクロードの人さし指に頬ずりした。
「おい、ラドビアス」
クロードの呼びかけに頭を捻ると、クロードが残念そうに声を上げた。
「ずっと隼ならいいのに」
「それは承諾しかねます」
擬態を解いてラドビアスがクロードに断りを入れると、横で寝そべっていたアウントゥエンの鼻に皺が寄った。
「笑うなよ、アウントゥエン。だって、ラドビアスが首をこう可愛らしく傾けるなんて見られないだろ？」
「見せたくもありません。さあ、こちらも動いた方がよくはありませんか？」
ラドビアスが追い立てるようにクロードを椅子から追い出した。
「隼だったら食ってやれるのに」
アウントゥエンが伸びをしながら言う。
「そんなもん食ったら腹こわすぞ、やめとけって」
「わたしがそんなもんですか、クロードさま」
言い合いを防ごうと口を出したのに、ラドビアスは妙なところに引っかかって来ると、クロードは口を閉じる。
「着替えたわよ」
その時、隣の部屋とここを仕切る扉が開いて、ランケイが出て来た。
「びっくりした。結構女の子みたいに見える」

置いていった姫の服に着替えて出て来たランケイはぐっと女らしい。　ここにいるのが朴念仁二人と獣なのが惜しいほどだ。
「クロード、こいつは初めから雌だぞ」
「おまえだって雌じゃないか」
「そうだ、我は雌だ。可愛いか？」
「何、アウントゥエン可愛いって言ってもらいたいの？」
クロードの問いに赤い狼ははぁはぁと舌を出してクロードを見る。
「いつもおまえは可愛いよ。雌には見えないけど」
いつの間にか話題まで狼に取られていることに気づいて、ランケイはがっくりと肩を落とした。
「髪型と化粧をしなければ。こっちに来なさい」
変な反応ばかりにランケイは浮き立っていた気分も吹っ飛ぶ。どん理由があったとしたって綺麗に着飾るのは女の子にとっては嬉しいのだ。　それをお世辞でも褒めるのが礼儀というものだ。　だが、そんな事を分っている連中じゃない。
ランケイは椅子に座らされて、ラドビアスが器用に髪を結っていく。　本当に何をやらせてもこの男は器用だった。　あっと言う間に、束ねた髪を凝った形に結いあげると簪を何か所にも差し込まれた。
「目を閉じてください」
顔にたっぷりと刷毛で塗られて、ふわっと大きな柔らかい刷毛で粉をはたかれる。　目元に何かを塗られ、眉も描かれて、口元に移る。　ランケイは、今自分はどうなっているのかが分らず不安になる。　なにせ、この歳まで化粧なんてしたことが無い。
紅さえ引いたことが無いのだ。
――あたし、どんな風になっちゃってるの？　不安が募る。
そんな乙女なランケイの気持ちを推し量れる者がこの中にはいなかった。　ラドビアスはさっさとランケイの前に広げていた化粧品や道具をしまってしまう。　鏡を差し出す優しさを求めるのは贅沢なのかとランケイは苛々と男たちを見た。

「はい、これでいいでしょう」
「うわっ、顔真っ白だぞ。いいの？　ラドビアス」
「宮中は結構暗いのでこのように宮中の女性は顔を白く塗るんですよ、クロードさま」
「へぇえ、何か怖い」
「なんか臭いぞ、臭い」
「我慢しなさい、化粧品に含まれる香料の匂いです」
　これが変身の終わった乙女にかけられた最初の言葉なんて酷いとランケイは唸る。
「変じゃない？　ラドビアス？」
「わたしがしたことに変なことなんてありません」
　ばっさりと返ってきた言葉は的外れなものだった。　ここにも乙女の気持ちなど分らない男が一人。
「もう、いいわよ。出かけるんでしょっ」
「いや、出かけない」
　クロードが、はいと笑いながら太い紐をラドビアスに渡した。
「どういうこと？」
「ここに居ることを知らせたからもうすぐ捕縛に兵がやってくると思う。それまで君とラドビアスは紐で縛られていてね」
　そういうとクロードはアウントゥエンの背に手を置いて片手で印を組む。
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
　その声と共に狼の姿が赤毛の大男に変わった。
「きゃっ、早く服着てよ」
　素っ裸のアウントゥエンが大きく伸びをしながらそこら辺を歩くのを見て、ランケイが悲鳴を上げる。
「服着ろ、ラドビアス服出してやれ」
「服は窮屈だから好かん」
「そんなわけにもいかないだろ？　アウントゥエンはおれの叔父さんってことにしてる。とにかく子どもが二人を捕まえたなんて信じ

ちゃくれないからな」
不承不承着替えたアウントゥエンの腕にぶら下がりながら、クロードはコウユウに擬態したラドビアスに笑顔を向け、ラドビアスがそれに応える。
「いよいよだな」
「いよいよです」

いざ、行かんー2

ランケイとラドビアスを縛りあげた所にたくさんの足音が聞こえる。　程なく宿の主人の声がした。
「あ、あのお客さん。開けますよ」
その宿屋の主人の声が終わる間も無く、勢いよく扉を開かれた。
そこには十人ほどの兵士と、訳も分らず大変な客を泊めてしまったのかと青くなっている初老の男がいた。
「おまえが連絡をしたものか」
兵士の一人がアウントゥエンに顔を向ける。
「手配書の立て札を見た。こいつらだろ、金をくれ」
いつものアウントゥエンの喋り方だが、これはこれで無頼な感じに見えなくも無い。　手配書と縛られている二人を見比べて兵士は仲間に頷いた。
「本人らしいな。よし、おまえついてこい」
大人しく引きたてられる二人の後にアウントゥエンとクロードが続く。　宿屋の主人はそれを見てほっと息を吐いた。　金は前金で貰っているから面倒事さえ無くなってしまえば自分としては言うことはない。
だが、部屋にいた人物を見て首を傾げる。　下に降りてきていた人物はこんな赤い髪の大男だっただろうか？　もっと生粋のアーリア人のような男だった気がする。
後ろからついて階段を下りて行く少年だけは見覚えがある。　アーリア人にしてもかなり美形な少年だから良く目立つのだ。
「あの……今晩のお泊まりは？」
後ろ姿に小さく聞くが当たり前のように返事は無い。　だったら置いて行った荷物はこちらで処分するしかないな。
「めんどくさいことだ」
何か金目のものがあればいいがと主人は部屋を見まわした。

「あんたはこっちだ」
ランケイだけは別に幌のついた馬車に乗せられる。　罪人扱いとはいえ、相手は姫なわけで、そうそう邪険な扱いはできないのだろう。
「おれたちはこっちなのか？」
二台目の幌無しの馬車に乗せられたクロードが文句を言うとコウユウを見張っている兵士がふんと鼻を鳴らした。
「これから、たんまり褒賞金を貰おうっていうんだから多少は我慢しな、坊主。父ちゃんを見習え」
「父ちゃん？」
噴きそうそうになりながらクロードは自分の隣に座っている赤毛の男を見上げると、アウントゥエンがにまりと笑った。
大きな石造りの門を抜けて、クロード達は宮殿の前庭で降ろされる。　前を行く馬車はそのまま脇を抜けて中に入っていった。
「おまえらは、そこの外殿で沙汰を待つように」
「そう言うと、手足に枷を付けられたコウユウを突き飛ばすように兵士は引き立てて行ってしまった。
「さて」
クロードは立ち上がってアウントゥエンを見る。
「ここで待ってるのもなんだから出発する？　父ちゃん」
獣の時のように鼻に皺を寄せてアウントゥエンが笑う。　二人はそっと入れられた部屋から外を覗いた。　果たして兵士が二人逃げられないように槍を合わすようにして戸口に立っている。
「これじゃあ、おれたちも罪人みたいな扱いじゃないか」
褒賞金など初めから出すつもりなどないのだ。　というより、皇姫を目にした平民など生かしておくつもりが無い――そういうことなのだろう。
「あの、小父さん。おしっこ行きたいんだけど」
どんどんと扉を叩いてクロードが騒ぐと、がらりと音がしてごつい男が扉を顔の分だけ開けて大声で怒鳴ってくる。

「煩いっ、静かに待っておけと言ってるだろう」
「だったら、ここでしちゃってもいいの？」
大きな舌打ちの音がして扉が開く。
「こっちに来……」
兵士の声がそこで途切れ、もう一人の兵士が反撃する間も無かった。　顔を出したアウントゥエンが二人の頭を掴んでぶつけたのだ。
大きな骨の折れる音がする。　どさりと投げ出すと、扉を全開にしてアウントゥエンは後ろを見た。
「行こう、クロード」
「加減しろよ、父ちゃん」
クロードが低く言って左右を見渡すと内殿へ続く門に顔を向ける。
「穏行してあの門番を仕留めて門を開けろ、アウントゥエン」
囁くように命を下すとクロードはアウントゥエンの背中に触れて呪を唱えた。
『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
赤い魔獣は音も無くどろどろに地面に溶けたように姿を消した。
空気の流れだけが彼の気配を知らしめていたが、気付くものはいない。
いきなり、隣の兵士が塀を超えて飛ばされたのに唖然とする間も無く、姿の見えないものに掴まれたと同時にその兵士も飛ばされて気を失う。
張り番の兵士がいなくなった大門の扉が金属の音をさせながら開く。　クロードは口角を上げて扉をすり抜けた。
「アウントゥエン、屋根を行こう」
クロードの声に姿を現せた魔獣は、クロードを乗せるとぐんと跳躍して宮殿の屋根に飛び上がった。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

「おまえはランカさまじゃない」
「だから人違いだと何回も言ったわ」
濃紺の長い上着には銀糸で細かい刺繍が施してある。　細い一重のつり上がった目元はハオ族特有の者だ。　まだ随分と若い外見の男がランケイの顎に手をかける。
「その服はどうした、女」
「あたしのと替えて欲しいって言ったから替えてやったのよ」
大きな舌打ちの音がして、男は控えていた軍服の男に声をかける。
「亥将軍、南に目撃された二人組が当たりのようです。追跡の増員は国境警備から回してください」
手を組んで頭を下げた将軍が部屋を出るのを見ながら男は自分の額に手をやった。
「それにしても、キータイからこんなに簡単に逃げられるものだろうか」
何か、おかしい。　何かよくないことが、ずっと悪いことがおこりそうだと男は部屋を出る。　情報を一か所に集めて事態を把握しなければ。
長い安定に少し、気が緩んでいたのかもしれないと頬を叩いた。

いざ、行かんー3

長い安定――、確かに長い。　ハオタイは千年の長きに渡って一つの王朝を保ってきた。　それもこれも我らが力だが。
男はこの国の始まりから知っている。　彼はベオーク自治国から送られたビカラのしもべ。　ハオタイはとどのつまり、建国当初からベオーク自治国の傀儡国なのだ。
次々と帝が変わっても綿々とつづく。
皇帝を支えていると見せて実は支配している。　この先もずっとそうでなくてはならない。
「シンダラさま、キータイの手前の宿場町に桜蘭族が集結しております。帝への謁見、どう致しましょう」
「桜蘭族……忘れていた」
こんな時にとシンダラは壁に拳を打ちつける。　外殿のどれかを開けて宴でも開いてやれば何日かは持つだろう。　しかしそれでも猶予は無い。　ランカ姫を出す約束をいくらなんでも反故にはできない。
なんとはなれば、ごろごろいる姫のうちの誰かか、または……。
シンダラがランケイをゆっくりと見降ろす。
この娘でもいい。　術で縛ってしまえば用は足りるだろう。　どうせ、楼蘭族など上流の暮らしなど知らないはず。　もとより、姫の中身など関係ないことは初めから分っている。　帝の娘が腰入れする――そのことが大事なのだ。
「誰か、この者に食事をさせてやれ。それと着替えも」
シンダラはその言葉と共にランケイへの関心を失って部屋を出た。
希少な香木を巧みに組み合わせた廊下の意匠を見るとは無く眺める。
自分はこの木がまだ淡い色合いだった頃を知っている。　香木の香りがむせかえるようだった頃から遥かに時は流れ、何百年経った

というのか。
鏡面のようだと思っていた。
それが今、静かに揺らぐ予感がするのはどうしてなのか。　建国初頭、もっと緊迫してもっと慌ただしかった。　その中でもこの国が永命と続くことに何の疑問を抱くことなど無かったのに。
小さな石の波紋が思わぬ事態を呼ぶ。　そんな恐れがシンダラの身の内を支配していた。

「ランケイを助けるか」
短く聞くアウントゥエンに、クロードは「いや」と答えた。　ランケイには今のところ身の危険など感じていない。　それよりも楼蘭族のあの男に会いに行くべきか。　本当は自分が行きたい。　なんとなく一緒にいて居心地の良いという印象が残っている。
直ぐに闇に取り込まれそうな自分の横でひっくり返って日光浴をしていそうな。　ハオタイを牛耳ってやれと言ったのは、半分噛ませ犬としての本来の役割を期待していが。　実は残りの半分は本気だった。
自分が考えていることが現実になった場合、旧来のハオタイ皇国は滅びる。　自分の故国、レイモンドールに起こったことの数倍もの混乱がこの国に留まらず、大陸全土に及ぶだろう。
そうなった時に残るのは、えてしてこういう君主なのではなかろうか。　そこまで考えてクロードはおかしくなる。
「おれの尻ぬぐいを頼む」
そう言ったらあの男はどういう顔をするだろうかと想像したら笑えてきたのだ。　だが、自分が行くと手間がかかる。　ラドビアスのように何かに擬態することも、アウントゥエンのように隠形することもできないのだから。

「おれって、だめだめじゃないか」
従者や、眷属に劣るってなんだか悲しいとも思うが、これも現実だ。　おれは未熟で、周りに助けてもらいながら進んでいく。　それを忘れてはならないとクロードは思う。
謙虚に相手に感謝する気持ちとずうずうしいくらいに傲慢にならないと攻めていけない状況。　どちらを取るのか。
――それならおれは、迷わず後者を選ぶ。
クロードは懐から小さな紙を取り出して背後の自分の眷属に振り返った。
「アウントゥエン、これを楼蘭族のザックという男に渡して来い」
小さい紙片に書かれていたのは、藩字を崩して簡単にした字で書かれたものだった。
「ここで待ってろ」
狼はそう言い残し、屋根に溶けるように姿を消した。
「いつになったら、合図ってのがあるんだよ」
じりじりと床にそのまま座って待っていたザックの尻の辺りから、ぬっと大きな口が現れた。
「な、なんだっ、おまえっ、危ないだろ」
危うく大声を出しそうになり、ザックは目を向いて床から突きだした口に文句を言うが、その口が人間のものじゃないことは明白だった。
俺、ばけもん相手に何やってんだ？
その大きな口の中に紙が入っている。
「これを取れってか？」
伺うように言うザックに大きな口がニヤリと笑ったように見えた。
「ったく、手を入れた途端にぱくんとか、止めてくれよ」
だが、こんなことする人間にまるっきり覚えが無い事もない。
ついこの前もふざけた野郎を使いに寄こした。
「おまえ、クロードのとこのやつか」
紙を口から取った途端にガツンと鋭い歯が噛み合う。

「てめえ……」
わずかに笑ったように口が震えたかと思うと、大きな口は床に沈む。　手に残されたのは掌に収まるほど小さな紙片だった。
目を向けると、『帝にめんかい。ランカ姫はべつじん。じちのやくそくをせまる。きょひされたらじゅふでサラマンダー呼ぶ』と簡略文字で箇条書きにしてある。
「くそっ、俺が字も読めねえと思ってやがんのか、あのくそがき」
確かに藩字で、しかも様式だって書かれた文章は何がなんだか分らない。　それをあのがきが知っていたということが小面憎いとザックは舌打ちをする。
――だが、
合図はあった。

ちいさな綻び

「グルバ、使者を頼む。あの青くでっかいばけもんの口の中に突っ込んで行こうぜ」
「よっしゃっ、任せとけ」
グルバは若い兵士の何人かを引き連れてログ―に跨った。
「ザック、行ってくる」
「ああ、俺が行けばいいんだけどな」
ザックの渋い声にグルバは笑う。
「何言ってやがる。先ぶれに総大将が行ってどうするよ。ヘマはしないから安心しろ」
「ん、ああ、そうだな」
どっかりと構えてないと。　そうは思うがキータイにそびえるこの城門を見てしまうと臆病な自分が顔を出してしまう。
自分たちが喧嘩をふっかけようとしているのは、大陸の大半を押さえている大国なのだ。
――くそっ、神さまがいると言うのなら今こそ姿を現しやがれ。
ザックは胸元に入れた呪符を服の上から握りしめた。

「シンダラさま、楼蘭族の副長が大門の前に来ております」
「そうか。仕方ないな、桜蘭族を外門の中へ招き入れなさい」
藍竜将軍の秦が浅く礼をすると部屋を出て行く。　その背中を眺めながらシンダラは側にいた小姓に耳打ちをする。
「例の娘を隣室に控えさせなさい」
そこにもう一人の側小姓が走り込んで来る。
「シンダラさま、捕えていた娘の連れが逃げたと報告が」
「何？」
次から次へと小さな不手際が重なるのに苛つく。　始まりは何だったのか？　不味い薬でも飲んだように苦いものが喉の奥に広がる

のをシンダラは感じた。
物事が傾くのはこういう時だということを長い年月のうちでシンダラは肝に命じている。　長い由緒ある王国が崩壊していくときも始まりはたわいない小さな綻びなのだ。
「すぐに捕えて口を塞ぐように。それと、あの者たちを連れて来た親子がいたな。それらも始末しなさい」
「かしこまりました」
小姓はそう言って印を組んだ。　途端に姿は消える。　小姓に見せていても彼らはシンダラと同じ魔導師だった。　見かけの歳はあてにならない。
「シンダラさま、いかがしました？」
「いや、何でも無い。娘まで逃がすなよ、ヤン」
胸騒ぎが収まらない。
その胸騒ぎは外殿の屋根の上に舞い降りた鴉のせいかもしれない。
鴉は羽を畳むと姿を変える。
ずずずと黒い染みのようなものにどろりと溶けたそれが、建物内部に入っていく。　そして、廊下に姿を現した小姓の後ろから黒い糸のようなものが彼を追って進んでいた。
するするとわざとその姿を蛇に似せているかのように左右に振れながら、その糸は小姓を追って行く。
「何者？」
気配に気づいた小姓の首に、すでにするりとその糸が足を伝って体を這いあがり、蛇のように巻きついていた。
「な、なんだこれっ」
驚いて首から引きちぎろうと小姓が引っ張る。　ところが細い糸のはずなのに、それはきりりと意志でもあるかのように首に巻きついてぐいぐいと皮膚に食い込んでくる。　指を首との間に入れようとするが、すでに息もできなくなりそうになっていた。
「それはわたしの髪の毛ですよ」
霞む目の先、腕を組んで説明するように声をかけてきたのは、ハ

オ族の特徴を備えた青年。　つり上がった一重の目が細くなる。
　それが笑っているのだと思う余裕は小姓には残されていなかった。
「インダラと言います。あなたが仕えているシンダラはわたしの同胞ということでしょうかね。わたしはバサラさまのしもべです」
「バサラさま？　……そのしもべが……なぜこのような？」
　その問いをやっと言い終った途端にぐぐっと髪はいっそう引き絞られる。　ひゅっと喉から最後の息が漏れた音がしたが、龍印を受けたものは首を絞めたぐらいでは死なない。
　青黒く変色してきた小姓の顔を一瞥してインダラの笑みが深くなる。
『夜陰、下弦、闇路を通り彼の者を滅せよ』
　インダラが組む印の先から次々と髪は飛びだすように伸び、たちまち小姓の上半身は黒一色になる。
「なぜと言う問いに答えてあげましょうか。バサラさまはシンダラを見限って他と手を組んだ。そういうことです」
「シ、シンダラ……さまを裏切る……ということは……ビカラさまを？　う、がぁあぁっ」
　呻く声の後にゴトリという音がして重い物が床に落ちたのが知れる。　それはごろごろと転がって柱にぶつかって止まった。　苦悶の表情を浮かべたままのその顔は自分の命が消えたのに気付いていないのかもしれない。
「うーん、ちょっと気持ち悪い光景ですね。次は気をつけないと」
　インダラはにまりと笑って抱いていた小姓の体を頭の側に降ろす。
　途端に小姓の死体は砂のようにぼろぼろと崩れて床に山を作った。
　死んで術が解け、本来の姿に戻ったらしい。　本来の彼の寿命はとっくに尽きているのだ。
　続いて床に広がった髪は、黒い煙になって天井に吸い込まれるように消えた。
「さて、クロードはどこにいるのかな？　朝陽宮じゃないと、どこに何があるか今一つ分らないな。次は聞くことを聞いてから始末し

ないと」
ぶつぶつと言いながらインダラが顔を廊下の先に向ける。
「いいところに来たな、サンテラ。クロードさまはどこだ？」
「それはわたしも知りたい」
コウユウの擬態を解いたラドビアスがぼそりと呟いた。

サラマンダー来襲―1

「シンダラさま、キータイと宋州の境の山岳地帯で騒乱が勃発したとの報告が」
「宋州？　ランカ様らしき者が目撃されたと報告があった場所と同じか？」
シンダラの問いに小姓が答える。
「男と二人、魔獣に乗っていると近隣の廟から言ってきております。どういう理由で彼らが魔獣を使役しているのかが不可解ですが、おそらくランカ様に間違いはないかと」
「それがどうして騒乱に？」
あの地は山岳地帯で住人はあまりいないはずだとシンダラは頭を捻る。　捜索中の姫と一緒の男らしい二人組を見かけたと報告があったために、近くの廟にいる魔導師たちに探させてはいた。
「暴れているのはそこに住む獣だと」
「獣？」
「双竜将軍が第一、第二騎兵隊を率いて鎮圧に向かいました」
「ばかな、何で双竜を？」
「帝の命でございます」
その言葉を聞いてシンダラは大きく舌打ちして顔を手で覆った。
獣が暴れているなど放っておけばいい。　都市部ならともかく山岳地帯なのだ。　そちらの二人が本物だったとしても今や何の利用価値もない人間二人に将軍と、騎兵の半分近くを出すとは。　あまりの考えなしのやり方に笑いが込み上げてくる。
いや笑っているわけにもいかない。　桜蘭族が目の前にやってきている上、不穏な気配を感じている今、帝に勝手をさせておくことはできない。
「それはいつの事だ」
呼び戻せるかと思いながら、すぐにそれを打ち消した。　それを

すれば帝は機嫌を損ねるだろう。
いつもは諾諾とこちらの言うことを聞いているくせに、こんな時にやる気にならなくてもいいだろうに。
「いや、いい。帝はどこにおられる？」
これ以上勝手に兵を動かされてはならない。　部屋を出ようとしたシンダラの元に当の帝本人がやってきた。
「シンダラ、ランカはここにはいない。煩く言ってくるようなら楼蘭族の兵など皆殺しにしてしまえ」
どうだ？　というように帝は自分の采配にご満悦の体である。子どものように頬が赤く自らが兵を動かすということに興奮しているのが明らかだった。
「左将軍のハンが今奴らを包囲しているはずだぞ」
「まさか、陛下それは本当のことですか」
鈍器で頭を殴られたような衝撃がシンダラを襲う。　これでは桜蘭族に偽の姫を押し付け、いくつかの裁量権を与えた上、恩をきせて治領に帰らせるという案は使えない。
「陛下、素早い御判断でわたしをお助けくださいましてありがとうございます。この後はわたしが陛下の御手を煩わすことの無いように処断いたします」
深くお辞儀をしながらシンダラが横の小姓に目で合図する。　即座に帝の両側に見目麗しい女官がやってくる。
「これから陛下にも御心労をおかけするやもしれません。お茶の支度ができております。少しお休みされてはいかがですか？」
「いや、兵を動かすのは面白い。朕は疲れてなどおらんが……茶を一杯飲むくらいの時間はある。何か動きがあったら朕を呼べ、シンダラ」
「御意」
両手を女官の差し出した手にのせて、帝は侍従を引き連れて部屋を出て行った。　完全に扉が閉まったのを確認してシンダラが側の小姓の背中に触れる。

『変成、変転、変容、我の命により辺幅、変化せよ』
印を片手で組みながら呪を唱えると小姓は小鳥に姿を変えてシンダラの手に乗った。
「外朝の中に入ってる楼蘭族の動向を探れ。ハン将軍に勝手をさせるな」
ちゅんと挨拶がわりに小鳥は一声鳴いて窓から飛び立っていく。
小姓が化けた女官たちには術を使って帝を眠らせるように指示した。 今やることは他に何が？ 解けはじめた場所を素早く繕ってシンダラは深く深呼吸する。
戦乱の時代ならともかく、兵は見せ金のように使うのが肝要なのだ。 へたに武力などを使うとろくなことにならない。
楼蘭族はどう出るのか？
彼らが怖いわけでは無い。 たいした数でも無いことは分っている。 そうではなくてこの宮中で兵を上げる民族がいるということが他に漏れることが問題なのだ。 ハオタイは大小様々な民族を抱えている。 一つ一つは小さくても、国中で紛争が頻発されるのは困る。
国中が混乱している――そう他国に思われることがさらに混乱を煽る。 大陸一の大国であるハオタイは千年に及んで揺らぐことが無く、未来においてもそれは続くと認識させることが必要なのだ。
――焦っているのか。 ベオークに戻って指示を仰ぐことも頭に入れながらシンダラは汗で湿った拳を握りしめた。

「おい、大将。こりゃ俺達は嵌められたってことか？」
招き入れられた大門の中でハオタイ風の凝った飾り切りでちまちまと盛られた料理と酒がふるまわれ、良い気持ちになっていたが、気付けば兵隊に囲まれている。

――ちっ、やっぱ来やがったか。　しゃあねえ、やるしかない。
ザックは持っていたやけに華奢な足の酒杯を床に投げつけて、クロードの従者にもらった合い図用の呪符を片手に印を組んだ。
――ったくまるで魔導師みたいじゃないか。　くそったれ。
「おまえら、全員地面に伏せろっ。建物に近づくんじゃねえっ。瓦に当たって死ぬぞ」
「なんだって？」
ザックの言葉が全員に行きわたった直後、地面がぐわんと大きく揺れ始めた。
「おおおおお、おい、これって……もしかして」
副将のグルバが青い顔で地面に伏せながらザックを見る。　ここにいる楼蘭族の一人としてこの地震の原因に思い至らない者はいないだろう。
「サラマンダーが来たんだな」
グルバの問いにザックは「ああ」と頷いた。

サラマンダー来襲ー2

――ああ俺達は後戻りのできない道への扉を開けちまった。　入ったと思った途端に帰ることは許されない道だ。
あえてそこを選ぶ者をあざ笑うかのような荒れ地がつづく道。ハオタイを敵に回すという破天荒な道を俺達は歩こうとしているんだぜ、兄弟。
泣きたいような、笑いたいような、喜怒哀楽のどれを取ったら正解なのかも分らない、そんな気持ちのザックだった。
「助けてくれ」
大きな地震だと思っているハオタイの兵士たちはもう楼蘭族どころでは無い。　秩序も序列も関係なく、あるの助かりたいという保身の気持ちだけ。
地面の下から突き上げるような大きな揺れにザックらを囲んでいた兵士らは倒れ、大混乱に陥っていた。　彼らにはこの地震の原因は分らない。　彼らはサラマンダーを見たことも聞いたことも無いはずだ。　そんな生きものがいることなど今まで知らなかったし、知る必要は無かった。　その為に建物の中に逃げ込もうとして大騒ぎだ。
固まっているとそこに熱が集まり、それを感知したサラマンダーが襲ってくる。　分散して逃げることが肝要なのだ。
「おいおい、そっちは危ないって」
大声を出すザックにグルバが呆れたような顔を見せた。
「あんた、敵に何教えてるんだよ」
「どうせ、誰も聞いてないって。それより、誰か門の外に出してログ―の綱を切ってやってやれ」
「分った。んであんたはどうするんだ？　ザック」
「呪符を使いながらサラマンダーを内門の中に誘いこんでやる。二十人ほど手勢を持って行くぞ」

中腰で動き出したザックにグルバが続く。
「あんただけで行かせれるかよ、おいゴーワン、おまえの配下を連れて俺に続け。あとの者も体勢を整え次第、内門へ急げ」
「グルバ、おまえはここを……」
「大将、てめえが嫌って言ってもついていくって俺が決めたんだ。黙って前向いて俺にケツを守らせろ」
グルバの言葉にザックは苦笑いで応える。
「大将の言うことを聞かねえ部下ばっかりの部隊なんざ、先が思いやられる。別の意味で自分のケツが心配だぜ、惚れてるんじゃねえだろうな」
「そういう寝言は事が収まってからにしろっ、大将っ」
自分は、こいつら全員の命を守ってやれるのか。
やれると思わなきゃ一歩も動けない。　だが、もう賽は投げられたのだ。　ザックは呪を唱えながら内門へと向かう。　揺れはもう立てないほどになって門の護衛兵の姿も無くなっていた。　門につづく障壁の瓦は全部落ちて砕けていた。　地面は敷いている石板をぶち割って大きな棒で掻きまわしているように波打っている。

そこに見覚えのある姿を見つけた。
銀に近い髪はあっちこっちに跳ねている。　深い藍色の目はアーモンド形で。　見た目は十代中頃のアーリア人の少年。
側に控えている赤い毛色の翼のある狼の頭に手をやって、揺れる大地の上で薄笑いを浮かべて立っていた。
全てが夢で。
あるはずの無い蜃気楼を見ているような感覚。
音と叫び声で耳がきかないくらいの混乱の中、そいつはそこにいるんだが、なんだか現実味に乏しかった。
そよ風の通る草原にでも立っているような暢気な様子は今はただ異質で恐ろしく見える。　その悪夢の原因がこいつなんだと思いな

がら、それでも懐かしさが込み上げてザックは大声を上げた。
「クロード、てめえ、勝算はあるんだろうな」
「おい、あいつは何だ？　悪魔が姿を変えているんじゃないのか？　がきのくせしてこんなところで笑ってやがるぞ」
グルバが魔よけの仕草をして前にいるザックに呼びかける。
「おまえ、よく知ってるな。そうだ、あいつは悪魔だぜ、すこぶる性質が悪いな。だがその悪魔は俺の知り合いなんだよ」
ザックの言葉に、グルバがひえっともう一回魔よけの仕草を今度はザックに向けて行った。

サラマンダー来襲ー3

「師匠、久しぶりだね。部下も出来たみたいで見違えちゃったよ。だけどちょっと強面すぎない？　顔怖いよ。とにかくおれの連絡も上手く伝わったみたいで良かった」

怖いと言いながらクロードはいかつい楼蘭族たちを見ても暢気に笑っている。　そうだ、こいつはそういう奴だった。　見た目はどこぞのおとぎの国の王子さまみたいなくせに、やることなすこと胡散臭い。　まるでがきの皮を被った年寄りの魔導師、それがクロードだとザックはぺっと唾を地面に吐く。

「師匠、汚いっ」

「ちっ、上っぺりだけ師匠扱いかよ。おまえの伝言を伝えに来たひょろひょろの男、感じ悪かったぞ」

ザックの遠慮の無い言葉にクロードは吹きだした。

「あはははは、ラドビアスってどこでも受けがあんまり良くないんだよな」

笑うと途端に魔法が解けたように、この腐れがきも普通の人間に見える。　だが、アーリア人の少年が、一人ででかい狼と一緒に散歩の途中でもあるかのようにここにいるわけは無い。　ザックの斜め後ろから異形の物のように眺めていたグルバは思う。

キータイにいるアーリア人の多くは豪商や、招かれた国賓や貴族などだ。　西に近いダルファンの民ならアーリア系で通るかもしれないが、何にしろここは宮中だ。　アーリア人の少年がうろついている場所じゃない。　しかもこの混乱の中での落ち着きはらった態度を見れば、やっぱり闇の生きものに違いない。　何せ連れているのが普通の狼の倍はある上に赤い毛並み。　しかも、翼までついているのだから。　少年の怪しさは折り紙つきで、本人も連れてる獣と同じくらい、いやもっとやばいはずだと体中の毛が逆立ってグルバに教えている。

――魔物ってのは知らんふりをするに限る。　グルバらが、ザックに先を急ごうと告げようと口を開いた直後、
「門の内側に入った途端に上から石と煮え湯が落ちて来るみたいだけど、ザックはこのまま行くの？」
　新しいお店ができたんだよと教えるようにクロードがザックに言って、自分の手を狼の顎に伸ばした。　下顎を撫でるとゴロゴロと凄まじい音が聞こえる。　一拍置いて、それが狼が喉を鳴らしたのだと気付く。
「本当か？」
「どう思う？」
「大人をからかうとぶっ飛ばすぞ、こらっ」
　ザックの恫喝にまりとしたクロードはひらりと狼に跨った。
「追いて来いよ、案内する」
「行くぞ」
　クロードの後を追おうとするザックの肩をグルバが掴んだ。
「おい、ほんとに追いていく気かよ」
　すると、ザックが振り向きざまにグルバの胸ぐらを掴んで顔をぐっと近付ける。
「おまえ、俺を信用してんなら、俺のすることも信用してくれ」
　脅すような態度のくせにこれは懇願だ。　そう気付いたらグルバは逆らう気にもなれない。　ザックが好きで、奴とすごいことがしたくてここに来た。　ザックはもっと民族の未来や、仲間の生活やらを深刻に思っているらしかったが、グルバには実はそんなことはどうでも良い。
　一緒にどでかいことをしたい。　一緒にいるとまるで冒険物語の中に放り込まれたようにわくわくする。　あのまま砂漠で暮らしていてザックと会わなかったらどうだったろう？
　ハオタイの兵隊たちをサラマンダーを使って追っ払うなんて一体誰が考えつくと言うのだ。
　何日もあの灼熱の砂漠で旅人を待って、はした金で案内人の仕事

をする。　それこそ、死ぬまで。　歩くことができなくなったら、あそこではすぐに死を意味する。　みんな自分たちの生活を守るだけで精一杯で動けなくなった他人の世話などしていられない。
　そんな生活から抜け出す機会をザックは与えてくれたのだ。　今更一緒に行かない選択などあるわけが無い。
「信用だぁ？　それはこれが上首尾に終わってからにしてくれ。どうなるか確かめるために俺はついて行ってやるよ」
　胸ぐらを掴まれたまま、グルバの腕が相手の胸ぐらを掴んで引き寄せると、怖いほど真剣な顔をしていたザックの頬が緩んだ。
「ねえ、おっさん二人がいちゃついてるを見るのってぞっとするんだけど。行くの、行かないの？　それともここでもっと休憩しとく？」
　水を差すようなクロードの声にザックが怒鳴る。
「うるせえ、ついてってやるから早く行け、クロード」
　それを聞いたクロードが「アウントゥエン」と小さく言う。　すると、狼は軽い足取りでクロードをのせたまま門の右の障壁に進んで行く。　大きな体のくせに驚くほど音を立てないのは獣の習性なのだろう。
　続いてザックらも急ごうとするが、地面の揺れはどんどん酷くなり、普通に立っているのも困難になる。　遅れないように足を動かしていたが、後ろを向いて部下が遅れてないかを確かめる余裕も無い。
「……出やがったか」
　目の間の瓦礫の山から触手が顔を出して、ザックは言うことの聞かない自分の膝を叱りつけるように拳で叩きながら走った。
「壁に向かって行くなんてどうする気だ？」
　クロードの背中に大声をぶつけると「入口を作る」とクロードの軽い返事が返ってきた。何ふざけたことをとザックが言おうとした刹那、壁に青い光で釘で引っ掻いたような模様が左から右に現れる。
「な、何だあれ」

グルバの声が震えている。　魔術を見るのは彼は初めてなのだ。
砂漠の民にとって魔導師の存在自体がおとぎ話だった。
その模様は狼に乗った少年、クロードが口から出した言葉らしい。
遠い国の言葉。　古代レーン文字が輝きを増し、そこにいる楼蘭族の誰もが凄まじい光に耐えられず目を覆う。　そこに聞こえる平坦な声。
『爆』
途端に石組の崩れる音と風圧を感じて倒れ込んだザックらは、止んだ気配にやっと目を開ける。
そこに確かにあった分厚い障壁は、両側に名残を残して大きく口を開けていた。

できたよ、入口」
「……ああ」
ありがとうと言うのも何だか癪で、口の中でもごもご言いながらザックは開いた場所から内門を通る。　そのまま行こうとしたが、クロードの手が体の前に差し出されて止められてしまう。
「何だよ、じゃますんな」
「あんたたちを囲んでた兵はいなくなったわけじゃない。呪符を貸してよザック。逃げきれるくらいの距離を取って、わざと兵士にここを追わすから。そこにサラマンダーを誘いこんで始末してもらおう。そのまま大和門を通り、大和殿を潰させれば内廷門も近い」
「誰がそれを？」
「やりたいの？　ザック」
口角を上げてクロードはザックの胸元に手を差し入れると呪符を取りだした。
「やりたかったろうけど、ダメだよ。そういう楽しいことはおれがやる。先に行ってよ、すぐに追い付くから。大和門の近くで待ってて」
「サラマンダーに兵士を殺させるのが楽しいことかよ。おい、こいつ頭大丈夫か？」
食ってかかるようにグルバがクロードを睨みあげた。
「あんたらが砂漠でサラマンダーをけしかけて旨い汁を吸っているのと同じだよ、小父さん。この際、自分だけ善人に仕立てるのはやめてよね」
「こっ、このっ」
前を行く少年の襟首を掴もうとしたグルバに、ザックが体を二人の間に割り込ませるようにして止めさせる。
「こいつは言い方がアレだが実際は違うから」

ザックがとりなすようにグルバに言った後、「もうおまえ黙れ」とクロードには言い置き、行けと顎をしゃくる。
「面倒くさい奴め」
――分っている。本当に楽しいなんてクロードは思っていやしない。　だけど、こいつは素直じゃないのだ。　自分を悪い立場に置いておくことで、自分の非道な行いの均衡を量っている、そんなやつだ。
「要らんこと言ってないで、さっさと行け。てめえのせいで俺らはこんな事になってんだからな。もたもたしてると迎えに行くぞ」
ふっと笑みを浮かべてクロードは狼の耳の後ろに触れて何かを囁いた。　それを合図に狼は飛び上がると、あっと言う間にザックらの頭上を通り越して元来た道へと消えた。
「大丈夫なのか、一人で行かせて？　あそこは今サラマンダーが大暴れしてるぞ」
さっきは喧嘩腰だったはずのグルバが心配げにクロードの消えた方に視線を向ける。　どいつもこいつも外見はいかついが、お人よしぞろいなんだとザックは胸の内で笑う。
それは良い事なんだが、ちっとばかししまっておいておけと言いたい。
「あいつが一人じゃ寂しいなんぞ言うもんか。却って好き勝手できると、大喜びだろうよ。
俺達は先を行こう」
ザックたちの目の前には大きな門がまた控えている。　赤く塗られている分厚い板には鉄で補強されていて、それを目立たないように金銀で飾っている。　続く障壁は大きな石をぴっちりと積み上げて漆喰で仕上げているものだ。　手を掛けるところすらないつるつるの壁になっていた。
その門は見上げるほど高く、固く扉は閉ざされていた。
「どこで待つって？」
「そうだな、左の奥に植物園があるはずだ。そこに隠れよう」

ザックの言葉にグルバが頷いて口に手を当てて獣のような声を上げる。　それはログ―という巨鳥の鳴き声を模した楼蘭族の合図。
暗い闇の中でも旅人に意図を知られることなく意思疎通ができるためのものだ。
グルバの発した合図に後ろからも返答の合図が上がった。
ハオタイ皇国の中心、キータイのこれまた中心である蒼龍城。
その敷地の中にこんな自然が存在しているとは思っていなかった。
植物園などという可愛い名前で括るには無理があるほど、ここは鬱蒼とした森林だった。
「おい、これって」
「やばい気がする」
空が見えないほどの密集した木々のせいで薄暗く、ねっとりと体にまとわりつく湿気に可汗が噴き出す。　きっと、目に見えない囲いとかいう胡散臭い魔術がかけられてでもいるのだろう。　明らかに今までと気温までが違う、多湿で高温な世界。
楼蘭族は砂漠の民族だった。　ただでさえ、砂漠を離れて慣れない環境に置かれているとうのに、ここは彼らにとって異郷そのものだった。　その森のどこからか、獣らしい雄たけびがいくつも聞こえている。
「ここは、植物園なんかじゃなさそうだな」
ここにあるのは、珍しい花や、貴重な薬草なんかでは無いことをザックは肌で感じた。

取引

「行こうぜ、ザック」
気がついた時にはザックとグルバを残し、一緒に来ていた部下はそのまま森に入っていた。
「おい、止めろ。そこから出るんだ」
「ザック、何慌ててるんだ？」
大声を出すザックにグルバが怪訝そうに問う。　こんな鬱蒼な森ならこの手勢でも充分に隠れられる。　多少変わった動物を飼っていたとしても逃す手は無い。
「……行かないのか？」
「行く。配下が全員行っちまったのに、俺だけここにいるわけいかないだろうが」
まったくなんて統率の行きとどいた部隊なんだとザックは大きくため息をつく。　個人個人が判断して暮らしている日常そのままだ。
これをいっぱしの軍隊に作ることが俺にできるのか。
いや、今はそれどころじゃない。
ザックは頭を一振りして森に足を踏み入れた。　踏み出す度に足の下でじゅくじゅくと音がする。　ということは、ここは湿地帯になのだ。辺りを見回しながら歩くと、いくらも行かない間に大きく育っている木のいくつかは、実は巨大な草だということが分ってきた。
その間に黄色や赤い実がたわわに実り、森の先で歓声が上がるのが聞こえた。
「あいつら、何しに来たのか分ってんのか？」
グルバが呆れたような声を出した。　足元はもう膝下までびしょびしょに濡れて、歩きにくいったらない。
――こんなところには、きっとろくでもないものがいるに違いない。

そう思うザックの耳にざわざわと地面を這うような音が聞こえてきた。　直後、グルバがザックの肩を掴む。
「聞こえたか？　今の」
「……ああ」
「なんだと思う、大将？」
青い顔で聞くグルバにザックは応えた。
「おまえが想像してるもんだ」
げっとグルバが唸って音のした方を見た。
「でかい蛇ってことか」
だな、とザックは頷く。　ここはきっとでかい蛇の飼育小屋なんだろう。　何のためにそんな物を飼っているのか？　考えても答えなどでない。　聞いてみてもきっと「面白そうだ」そんな理由なのだ。　偉いやつってのは、どっかぶっ壊れている。
理由なんて考えている間にやることがある。
「果物の食いすぎで動けなくなって、でか蛇野郎の餌になる前にやつらを逃がすぞ、グルバ」
「おう」
なるべく音を立てないようにと気をつけながらけもの道のようなぬかるみを走るが、滲みだす水が跳ねる音は消しようが無い。　焦る気持ちとは裏腹に足は地面にひっつくようで、なかなか仲間の姿は見えない。
「くそっ、どこだっ」
初めは道に迷わないようにと目印を見つけながら進んで行ったが、もうそんな余裕もなくなった。　暑くて暑くて堪らない。　砂漠の暑さとはまるで違う、肌にまとわりつくような圧迫感を伴う暑さはどんどんと二人の体力を消耗させた。
そこへいきなり視界が開けて、つんのめるように二人は足を止める。
大きな葦のような丈の長い細い植物が同じ方向に倒されて丸い形を作っている。　お椀のような形、そしてそれは驚くほど大きかっ

た。
「ザック、あそこだっ」
グルバの指さす方に十数人ほどの仲間が固まっていた。　そして彼らはザックらを見ようともしない。
それは――もっと見るべきものがあるからで。　一瞬でも目を逸らすことは死を意味していた。
彼らの目の前には二つの頭を持った巨大な蛇が鎌首をもたげていた。　生臭い匂いが一気に鼻に飛び込んできて、ザックは思わず吐きそうになる。
いきなり自分の縄張りに現れた餌に蛇は自分の巣に追い込んだのだろう。　長い舌をちろちろと出しながら首を上下に振っている。
「食われるぞ、助けよう」
グルバが飛び出そうとするのをザックが抜いた剣の柄を使って止める。
「待て、ちょっとおかしい」
「何言ってるんだ。食われるのを暢気に見てるつもりなのか？」
「声が大きい」そう言おうとしたザックの方にぬうっと蛇が顔を向けた。
「やっと来たか、待ちくたびれて一人食ってしまった」
シュウシュウという音が聞こえ、それが蛇の笑い声だと気付き、ザックは足から寒気が登っていくのを感じた。　大きさと双頭というだけでも普通じゃないがこいつはこの世の物では無いとザックは気付く。　人語をしゃべる蛇など聞いた事も無い。
「おまえは何者だ」
慎重に足を少しづつ進ませながらザックが大蛇を見ると、蛇は口を大きく開けて挑発するように頭を上下させた。
「我は魔界から招喚された魔獣だよ。で、どっちが楼蘭族の族長だ？」
滑らかに人語を操り、聞いてくる内容に知性を感じ、それがまた恐怖を呼ぶ。　簡単に怪物退治とはならないに違いない。

「ちぇ、知ってやがんのか。じゃあ仕方無い。そうだ、俺が楼蘭族の族長のザックだ」
大声で前に出たのはグルバだった。　グルバの返事に蛇は満足げにシュウシュウと笑う。
「おまえを喰わせれば、あとの奴は見逃してやる」
「本当だろうな」
言いながら前に進んでいくグルバにザックは「止めろ、俺がっ」と彼の腕を掴むが大きく振り払われ、音量を落した声がつづく。
「おまえはまだやることあるだろう。ここは俺に良いかっこさせろ」
「……そんなことできるかよっ」
「できるさ、できないなんて言うなよ。それじゃあ俺は無駄死にだ」
笑うグルバの口の端が、ぴりぴりと震えているのを見てしまうとザックは何も言えなくなった。

身代り

――俺なんだと叫びたい、俺がザックなんだと。
俺が食われるのが筋なんだと思う。　それなのに一体これは何なのだ。　卑怯者としてこの重たい荷物を俺は背負わされて生きていかなくてはならないのか。
頭なんて、クソ喰らえっ。
この先、俺は何度もおまえが大蛇に食われる夢を見なければならないのか。　一緒に戦うって方を何で選ばないんだ。　そう思う情の反対側で、おそらく戦えば半分は死ぬだろうと冷静に判断する自分もいる。　そしてグルバにもそれが分ったのだ。
「……すまない」
こんなありきたりな言葉でしか送り出せない自分に情けなくなり、ザックは唇を噛みしめた。
――集団の頭なんて割に合わない。　こうやって仲間を死なせ、自分は高みで保身を図る。　それがどんなに苦しいことか。　それでもそれを受け入れて自分は生き残るべきなのだ。　楼蘭族のためという大義名分。　己が動かしてしまった大きな責任を投げ出すことはもはやできないところにきている。
そして……時間というものは一定ではない――時間はいつも人には冷淡だ。
待っている時は経てしなく長く、過ぎるなと思うときほど、あざ笑うように駆け足になる。　見る間にグルバの姿は大蛇の巣の中央にあった。
「来たぞ、他の仲間は逃がしてくれ」
覚悟はしていても細かく足が震えるのをグルバは止められない。
「グ……」
名前を言いかけた仲間にグルバが指笛を短く吹いてみせる。　グルバが身代りになったことを知り、仲間たちは一様に黙りこくって

グルバを見上げた。
「旨そうだが仕方ないな、おまえら逃がしてやる」
「一人じゃ食いでがないが逃がしてやる」
そう口ぐちに大蛇が言ったが誰も逃げない。　腰でも抜かしたのかとグルバが中の一人の腕を持って立ちあげようとした。
「俺らも残る」
蒼白な顔のまま言った言葉に他の者も頷く。
――おまえら。
ぐっと熱いものが込み上げてきたが、そんなことをしてもらいたいわけじゃない。　グルバはわざと乱暴な仕草で無理やり立たせた。
「バカ野郎っ、そんな楽な役目は俺だけでいいんだ。残ってこの先に行くほうが何倍も辛いんだぞ。おまえらもっと苦労しやがれっ」
グルバの大声に皆下を向いて拳を握った。　そしてぞろぞろと巣から出ていく。
「では遠慮なくいただこうかな」
同じ声がほんの少しずれて聞こえ、ずるずるとグルバの前まで蛇が頭を持ってきた。
「我は頭から」
「我は足から」
仲良く半分こだと言い合って双頭の蛇は大きく口を開け、グルバは目を閉じた。　自分の体に痛みがくるかと構えていたグルバは大きく振られた蛇の胴に飛ばされて巣から飛び出た。
「ぎゃあああっ」
大きな叫び声がやっぱりずれて聞こえた。　受け身を取ったグルバは巣に視線を向ける。　そこには、蛇の胴に噛みつく白い豹の姿があった。
「一体これは……どうなってる」
豹なんてものは知識でしか知らない。　想像上の生きものじゃないのか？　今度こそ腰が抜けそうになってグルバは四つん這いのまま、仲間の元に急いだ。

「ザック」
「ここから出るぞ」
やっとそこから出たところに、クロードが立っていた。
「なんでこんなところに入っちゃうかな」
「うるせえ、こんなやばいとこがあるんなら、教えとけよ、がき」
「それで……何がいたの？」
「頭が二つあるしゃべる蛇だ。仲間が一人食われた」
ザックの言葉にクロードの隣にいた狼が反応したように主人の手を舐める。
「どうした、アウントゥエン？　誰か分るのか」
「それはガランドルだ。やつは守り蛇だと言われている」
ふうんと顎に手をやるクロードがぶつぶつと言いながら植物園に入っていく。
「そ、そいつもしゃべるのかよ」
グルバがぎょっとした顔をして後ずさりしたのを見て狼が鼻に皺を寄せた。
「まあね、アウントゥエンはおれが召喚したんだ。ガランドルは誰が召喚したのかな？　ちょっと聞いてくるよ。ザックたちはここで待っててね」
「クロード乗れ、足が汚れるし、おまえの足は遅い」
狼が言い、クロードは狼にひらりと跨った。
「大和門に呪符を貼ってきたから、サラマンダーが大和門を壊して大和殿を潰した後に、ザックたちは旨く忍び込んでくれ」
「おまえは？」
「時を見計らってサラマンダーを植物園に誘い込むよ」
どうやってと聞く前にクロードの姿は森に消えた。

魔界の理

「どこにいるか分る？」
クロードの問いにアウントゥエンが不満げに唸る。
「こんなに臭いのに分らないわけがない。クロードは分らないのか？」
アウントゥエンの言う通り、確かに生臭い匂いがするがそれがどこからなのかは分らなかった。
「分らないや、アウントゥエン、すごいな」
クロードが狼の耳の後ろを撫でてやると狼が喉を鳴らした。　褒められて上機嫌らしい。　そしてふんふんと鼻を上に向ける。
「もう一頭何かがいる。いるが気配だけで何も匂わない。変だな？」
――匂わない？
そう聞いてクロードは思い当たる魔獣がいた。　あれはダルファンの近くだったか？　砂漠の入口で雪豹の魔獣、メイファに会った時にアウントゥエンが匂いがしないと言っていた。　長いこと魔界を出ていたために匂いが消えたのだと確か言っていた。
「メイファ……かな」
「我もそう思う」
なぜ、ここにメイファがいるのか分らないが、行ってみるしかないだろう。　アウントゥエンは迷うことも無く、二頭の魔獣の元にクロードを連れていった。　興奮しているのか、赤い体毛が逆立っている。
大蛇と戦っているのは元は白い豹だったろうが、今は泥とどちらのかも区別がつかない血糊のせいでどす黒い。　一方の蛇も片方の頭は半分が噛みちぎられていて相当な怪我を負ってはいる。
「メイファ、色男が台無しだな。手伝って欲しい？」
クロードの声にメイファが唸り声を上げたが、これは是という意味なのだろうとアウントゥエンから降り、クロードは彼の眷属の背

中を叩いた。
「アウントゥエン、メイファを手伝ってやれ」
「クロード、そこで待ってろ」
アウントゥエンはクロードの言葉が終ると同時に勢いよく飛び出して行った。　彼らは普段、他の魔獣に敵意は抱いていない。　主人の命じることに忠実なだけだ。　共闘しろと言われればそうする。
だが、その実、魔獣らは皆好戦的で、戦う理由があれば今まで一緒にいた相手とも闘う。
主人にお墨付きをもらったアウントゥエンは大喜びで戦いに参戦する。　新たに乱入してきた敵に大蛇が大きな口を開けて威嚇してきた。　その大きな頭の下をくぐってアウントゥエンはちぎれかかっていたもう一方の蛇の頭を噛みちぎった。
「ぎゃあああっ」
大声を上げて反撃しようとした大蛇の目にメイファの前足の爪が刺さる。　血しぶきが周りを赤く染めた。
「不味いな」
「不味い」
返り血を浴びてメイファが口の中に入った血を吐きだした。　横ではアウントゥエンも鼻に皺を寄せて応える。
「食えるかと思ったがこんなに不味いとはな」
「首を押さえろ、目玉を潰す」
言いながらメイファが自分の前足をぺろりと舐めた。　その声を合図にアウントゥエンが飛び上がった。　横目でちらりと確認したメイファが身を低くしてガランドルの鎌首の真下に入り込む。
即座に残ったガランドルの頭が降りて来たのをメイファは認めて「シャア」と威嚇する。
「もう許さないぞ、猫の分際で」
がああっと下顎を外して大蛇が地面に向かい、口をぶつけるように降ろしてきた。　ずしゃりと地面に届く音は、それでも水音と歯が噛み合う音しかしない。　寸での所でメイファは飛び退いていた。

そのガランドルの頭の付け根に向かい、アウントゥエンが体重を乗せて飛び降り首に噛みついた。　青い鱗がはがれて水しぶきのように舞う。
太い胴体がのたうつと地面が激しく叩かれる。　それを回避するように頭側に回り込んだメイファは、後ろ脚で立ち上がると前足の爪を剣のように長くしてガランドルの目に突き立てた。
凄まじい絶叫が津波のように空気を震わせた。　ばたんばたんと尻尾が首を押さえているアウントゥエンとメイファを狙って叩きつけてくる。
そこにクロードが近づいて来た。
「ねえ、おまえ誰が呼びだしたんだ？」
無言でばたんっと尻尾がクロードの方に向けられる。
「メイファ、残りの目も潰せ」
「オレに命令するなよ、がきっ」
クロードにメイファが怒鳴るが、剣になった爪は過たず、ガランドルの残った目玉を一突きにした。
目玉が破れて体液が飛び散り、ガランドルの絶叫が反響してそこら中の壁が崩れる。
「ガランドル、おまえの主人は見当ついてる。ビカラだろ？」
クロードの気配を追いながらガランドルが鎌首を向ける。　首はアウントゥエンの攻撃によって大きく裂けて生臭い血がどろどろと流れていた。
「……だったら……どうなんだ」
それだけを言ってガランドルはぐはっと血を地面に吐き出した。
「聞くところによると、おまえは守護の魔獣だそうだな。だったらビカラが使役しているおまえの役目は、あるものを守っている、そう思うんだよね」
地面に伏せていた頭を上げ、ガランドルがクロードの居るあたりへ声を頼りに攻撃してきたが、横からアウントゥエンが太い前足で払い倒した。

「手を出すなっ、クロードは我の主人だ」
「煩いな……もう……何も言わん」
ガランドルはそう言うと体を地面に投げ出した。　地面に広がる血や体液の広がりに彼の最後を思わせた。
こんなになっても主人に解放されなかった魔獣は契約に縛られたままなのだ。　自分がしていることのはずなのに、やるせない思いに胸が痛む。
「止めを刺すか、クロード」
「やらないんだったらオレがやる」
落ち込むクロードの横で同じ魔獣であるアウントゥエンとメイファが、はあはあと息も荒くクロードを見る。　どっちも自分がやりたくて仕方ないのだ。
「おまえら、ガランドルのこと可哀そうじゃないの？　おまえたちの仲間だろ」
「可哀そうじゃない。弱いのが悪い」
「我らに仲間なんかいない」
二頭はこぞって唸り声を上げる。　そんなとこが結構仲いいんじゃないのか？　そう思わないでもないが、実際この二頭だってついこの間まではお互いに戦う間柄だった。
人の言葉を話すからと言って、人の道理が通じるわけじゃない。
魔界には魔界の理があるはずで、それはいくらクロードが魔獣に教えを請うたところで理解できないのだ。
だが、ガランドルへの憐情に浸る間も無い。
「おれが仕留める」
クロードは指輪を剣に変えて構えを取った。

入口

血を吐きながら、それでも大蛇は見えない目をクロードに向ける。
契約というものがかくも魔獣を縛るものなのかとクロードは憐憫の情が湧くのを抑えられなかった。　彼にも使役する魔獣がいる。
それは、今では何者にも代えがたい友人になっているのだから。
命の一片が尽きるまで契約したものの命を守る魔獣を可哀そうに思う。　だが、そこに目を瞑ってもおれにはやることがある――クロードは剣を握った手に力を入れた。
「ガランドル、おまえの守っているものを俺は貰う」
ガランドルの眉間めがけてクロードは剣を両手に持って突きこんだ。　青く煌めく鱗が空を飛び、光を受けて輝きながら地面に舞い落ちた後、肉を断つ鈍い音が響いた。
筋肉を裂き、骨を砕きながら剣はまっすぐに地面に突き刺さり、ガランドルの残った頭が二つに割れた。
大木が倒れるような音がして、ガランドルの体は地面に叩きつけられた。　途端にぐずぐずと体が崩れて肉の腐ったような匂いが広がる。　崩れた体はしゅうしゅうと音をさせて溶けていき、最後には地面に吸い込まれるように消えた。
その後にはぽっかりと闇が口を開けている。　ガランドルが守っていたのはこれだったらしい。
「龍道の入口、見つけた」
クロードが顔をほころばせたところにすいっと甲虫が彼の服に止まる。
「間に合いましたか」
「ああ……でも前の鳥の方が可愛かったな、ラドビアス」
クロードの言葉に擬態を解いたラドビアスの眉がくっと上がる。
「お察しできなくて申し訳ありません。が、わたしは見た目で変化しているのではありませんので。おや、雪豹がいたのですか」

ラドビアスの向けた視線の先を追ってクロードが顔を向けると、赤茶けたまだらの模様の大きな豹が走り去るところだった。
「メイファがなんでか加勢してくれたんだ。ガランドルには可哀そうなことをしたよ」
――この先、おれのせいでアウントゥエンも、サウンティトゥーダも死んでしまうかもしれない。　そう思うと自分のやっていることが正しいのか分からなくなる。
頼りない主人ですまないと胸の中で謝って、別の言葉をクロードは口にした。
「アウントゥエン、ご苦労さん。悪いけどこのままザックたちを助けてやってくれ。サウンティトゥーダが戻ったら合流して戻って来い。おれの居場所は分かるか？」
クロードの言葉に赤い狼は憤慨したかのように鼻から火を噴いた。
「我がクロードの匂いを見失うわけが無い」
「流石だな、アウントゥエン。じゃあ先に行ってるからな。頼りにしてるぞ」
一緒に行けないことに不平を言おうとしていたアウントゥエンはすっかり褒められて桜蘭族に合流することに異論は無かった。　主人に期待されて褒められることくらい嬉しいことは無いのだ。　労いの言葉一つで狼は楼蘭族の匂いを辿って走り出した。
寸の間、それを見送ってクロードは闇を見据えた。
「行こう」
「はい」
濃い闇の中に足を踏み入れると一瞬体がぐらりと揺れる。　二年前まで頻繁にクロードも使っていたはずなのに、驚くほど体は魔術への耐性を失っていた。
「大丈夫ですか、クロードさま」
「たぶん……ダメなら、どうする？」
素直なのか、ふざけてるのか。クロードの言葉は笑いを含んでいる。　いつからクロードは自分の心を見せないようになったのだろ

うとラドビアスはふと思う。　それが自分のせいだとは思いたくはなかった。
　入る前には、顔すら見えない漆黒の闇であるかのようだったのが、いざ入って見ると、明るいとまでは言えないものの歩くのには充分な明るさだった。　足元がふわふわするのもレイモンドールの竜道と違わない。
　足場は石が敷いてあり、壁はしっくいのように綺麗に削られて天井はアーチ状になってさえいた。　整備された龍道なのだろう。ふわふわすると思うのは体が慣れていないからで、実際は固い床は靴音を響かせていた。
　そうであれば、出口も近い。　そうクロードが考えた通り、目の前がふいに明るくなった。
「着きましたよ、クロードさま。わたしが先に出てみます」
　ラドビアスがクロードの体を押し退けて前に出ると直ぐに声が聞こえた。
「クロードさま、誰もいないようです」
　龍道から出ると、そこは誰かの執務室のようだ。　しつらえの豪華さや、部屋の広さを見ればよほどの者だと思われる。
「ここは誰の部屋なんだろう」
「シンダラの部屋ですね。今はキータイに居ますが、ベオークにいるときはここを使うようです」
　クロードの問いにラドビアスが即座に生真面目に応えた。
「シンダラ？」
「ええ、ハオタイの宰相です。今はほとんどキータイに詰めております。そのせいでここは無人なのでしょう」
　一気に宰相の部屋まで来れる龍道のキータイ側を守っていたのが、ガランドルだったわけだ。
　廊下に出たと思ったら、何人かの足音がこちらに向かってくるのがわかった。
「クロードさま、こちらの部屋から別の廊下に出られます。わたし

が引きつけますからビカラさまを探してください」
　クロードが部屋に消えた後に同じように部屋にラドビアスが飛び込むと、大きな空気の歪みを感じた。
「やっと来たか、サンテラ。ここまで来たんだから協定は終わりかな？」
　突然現れた背もたれの高い椅子に腰かけている人物が顎に手を当てながら静かに語りかけてきた。　低いハスキーな声はまぎれも無い。
「バサラさま、クロードさまを助けるとお約束でしたが」
「クロードはね。でもおまえを助けるなんて言ってないだろ？　今までわたしに対して行った不遜な行い全てここで罰してやるよ」
　楽しそうにバサラは立ち上がった。　肩にかかった亜麻色の長い髪を後ろに撥ねのけると腰から長剣を抜いた。
「今までのお咎めを受けることはやぶさかではありませんが、クロードさまがはっきり助かると分かるまではご容赦願いませんか」
「だめだ……と、いうかさ、お前じゃまなんだよ。クロードはわたしがもらう」
　やはり、そういうことかとラドビアスは自分の胸元から短剣を取ると、呪を唱える。　それは成長を始めたかのように伸びて一本の長剣になった。
「それでは致し方ございません。お相手いたします」
　ラドビアスが剣を構えたのを見て、バサラがにまりと口角を上げた。

大昔の企み

激しく打ち合わされた剣。
そして、しばらくは力で押し合う。　そんな状況の中にあってバサラの顔はにまりと笑みを浮かべていた。
「サンテラ、腕を上げたな」
「バサラ様の腕が落ちたのでは？」
渾身の力で負けないように剣を押しながらも、ラドビアスは何とか言葉を返す。
そのラドビアスの言葉にも、余裕の笑みで力を逃すように一端腕をひきつけた後、バサラは大きく後ろへ飛び退く。
「ねえ、いい事を教えてあげるよ。サンテラ」
「何でしょう？」
バサラが何を言うつもりなのか計りかねて、僅かに首をかしげてラドビアスは剣を構え直す。
「おまえ、どうして幼い頃ここに連れてこられたのか知っていたか？」
バサラが一体何を言い出したのか、見当がつかない。
「何を知っておいでなんですか」
驚いたラドビアスが気を逸らした途端に、飛び込んで来たバサラに剣を弾かれる。　そのままラドビアスに馬乗りになったバサラが彼の首に手をかけた。
「おまえがハオタイからこの朝陽宮に来た理由。それはねえ、おまえの母親が父親におまえを会わそうと連れてきたんだよ」
「父親、ですか」
話の内容に上にのっているバサラを押しのける事も忘れて、ラドビアスはバサラの顔を見上げた。
「そう……おまえ、わたしの龍印を刻印され、その上カルラにも竜印を授けられたのに力を半減するくらいで済んでいたろう？　昔、

同じくほんの短期間インダラにも二つの竜印が刻印されたとき。あいつはすぐに音を上げたというのに」
「わたしも気分がずっとすぐれなかったのは確かです。」
ラドビアスの返事に、あははとバサラは笑う。
「気分が悪いくらいで済んでいたということだよ。それにわたしの刻印があるくせにカルラに愛情をいだいていたじゃないか。変だとは思わなかったのか。うっかり屋さんだな」
バサラは目を細めて唇を片側引き上げる。
「おまえ、昔の、十歳のころを覚えているかい」
「忘れるわけがありません。インダラとわたしはハイラ様の食事にされるところをあなたに助けられたのですから」
甦るあのぶどう棚の下の出来事。
二人の子どもの手を取って走る幼いバサラの後姿。　流れる亜麻色の髪。　そして、自分はバサラに仕えることになった、あの日。
「偶然だと思っていたかい、サンテラ」
バサラの言葉にいきなりなぐられたような衝撃を受けて、ラドビアスは目を見開く。
「わたしはね、おまえの事を知っていたんだよ。前からね」
バサラは楽しそうに話し出す。

＊＊＊＊＊＊＊＊＊＊

広大な敷地の上に平屋の邸宅がどこまでも続く。　回廊で？がれた建物と建物が迷路のように高台に張り巡らされている。　ベオーク自治国の中心、朝陽宮。
その一つの邸宅。中庭に配置されている東屋の中。
風に髪をそよがせながら書物を開き、眺めている少年。
亜麻色の髪はそのまま背中に流れて風にあそばれている。　その

目は書物から離れていないが自分の前に現れた少年に声をかける。
「で、その子はもう朝陽宮に入ったの？」
「いえ、まだハオタイですが、明日には陽明門にたどりつくと思われます。メイファを遣わしていますから」
座っている少年に立ったまま応えているのは、目の前の主人と変わらないくらいの年頃。　黒い髪と黒い目を持ったハオ族の少年。
歳の頃は十歳くらいか。　足の重心を移動した時、足元に敷かれている翡翠で出来た玉砂利が擦れてチリッと音を立てた。　この東屋は宝玉で出来た枯山水の庭の中にあるのだ。
「メイファを？　じゃあ、まだ兄様たちは知らないんだな」
「はい」
少年の返事に気を良くした少年は、ふふんと笑って書物を捲る。
座っている少年が掴んだ秘密は、格別な物だった。
大陸の中央から東方一帯が含まれる巨大な国、ハオタイ皇国。
その一部にある、小さな市くらいの国家。　ベオーク自治国。
だが、ベオークが支配しているのは自国だけでは無い。　大陸全土に渡る魔道師たちの総本山であるのがここ、ベオーク自治国なのだ。大陸の各国に魔道師を派遣し、王の戴冠をも取り仕切るベオーク教皇のいる国。　大陸全土にその権威は及んでいる。
そこを支配している一族は、ハオタイ皇国に多いハオ族では無い。
外見は西側に多い白人種だ。　しかし、人種的にはどことも違う。
なぜなら彼らは恐ろしいほど長命。　その上、成人になるまで男女の別が無い。
そして、わずかな血族以外、なかなか子孫を残せないのだ。
家族以外には子どもは作れない。　そう、思っていた。
他人と情を交わすのは単に楽しみなだけの物。
ところが――だ。
ハオタイの西、ダルファンからの一通の手紙が間違ってバサラの手元に渡ったことから状況は変わる。
そのベオーク自治国の教皇ビカラへの親展扱いになっていた書簡

を、末弟のバサラはためらいもなく開く。
持っている手が……震える。
自分にはついこの間、同腹の弟が生まれた。　ここでは出来た子どもは皆弟と呼ぶのだ。　生まれたばかりのこの弟をバサラは自分の妻にすることにすでに決めていた。
自分と同じ両親を持つ、完璧な花嫁。
二十年、それとも三十年？　それくらい自分たちにはあっという間に過ぎていくのだろう。
そして、うっとおしい兄たちを駆逐してやればいい。　ここでは出来た子そう、心に決めていたのだ。　後は愛おしい花嫁と自分の血だけが残ればいいと。
それなのにこの書簡の内容は、一体どういう事か。
あろう事か、自分と同い年の兄弟がいるらしい。　それも父、ビカラと普通の女との間の。
ハオタイ皇国の西、ダルファンにビカラが出向いた先で戯れに抱いた女。　その女に子供が出来たというのだ。　自分たち血族以外との間に子供が出来るなんて初めての事だ。　朗報といえるのかもしれない。　だが――。
バサラには、にわかには信じられないという思いと、自分を脅かす存在に眉をひそめる。
――どうしてやろうか。　ここで自分がこの知らせを知ったことは何か意味があるのだ。
そこでバサラは、ビカラの名を騙って書簡を送る。　女にこのべオークに来るようにと返事を書き、金を送り、魔獣を送った。
早く来れるように。
その女は息子を連れて来るという。
ビカラとの間に出来た――という子どもを。
どうにかして殺してしまうか。　いや、それよりももっと良い使い道があるはず。
バサラは、その愛らしい頬に手をやってしばらく考えていた。

母の秘密

「インダラ、おまえハイラ姉さまの晩御飯になれ」
「なんですか、それ」
目を輝かせた主人の説明をとばした言葉に、インダラという少年は遠慮の無い言葉を返す。
くすりと笑う目の前の主人は、いつにも増して綺麗だとインダラはため息をつく。　あこがれなのかどうなのか。　彼を目の前にすると言葉がうわすべって顔が赤くなる。　体に触られたりしたら心臓が悲鳴をあげそうだ。　この少年に仕えてからまだ一年ほどなのだが、インダラは毎日彼の姿にどきどきとしていた。
だが、彼が口にする事に対してだけは、理解しがたい事が多い。
人間味に乏しい、そういう事なのだろうか。　まだ十歳の少年だというのにいちいち言う事には裏がある。
インダラにさえ分かるのは事の後だ。　彼の事が手に取るように分かる日がくるのだろうか？　と少年はふと思う。
「ここに着いたら、その女を騙してここから追い出せ。その後、殺せ。子どもは恩を着せてわたしのしもべにしてやる。だからさ、ハイラ姉さまに捕まったこどもと入れ替えるんだ。上手く逃げ出せよ。でないと本当に食べられちゃうよ、インダラ」
その顔を見てインダラは、もし逃げるのに失敗しても助けてはもらえないことを確信する。　バサラは、自分の主人は楽しんでいるのだ。
助かってしもべに出来るならそれでいいし、失敗しても食人癖のあるハイラが始末してくれる。　どっちでもいいと思っている。そしてそのとばっちりを自分が受けても構わない。　そういうことだ。
「しもべにしてどうするんです？」
「大人になったら龍印を刻印するだろ。そしたら、そいつの子種は

消える。そいつをずっと使役してやるよ。私のしもべとしてさ」
そうすれば、弟は自分が独占できる。　兄たちなど上手くかわしてやるさ。
「悪い顔をしてますよ、バサラ様」
インダラは、自分と同じ十歳のはずの主人を微かな恐れを抱いて見つめた。

＊＊＊＊＊＊＊

「あなたは、わたしの母を殺したんですか」
バサラの話にラドビアスは、それだけを言うのが精一杯だった。
まさか自分がベオーク教皇の一族の血を受け継いでいるなど今まで考えもしなかった。
慌ただしく故郷のハオタイの西端、ダルファンを出発した時、母親は何も教えてはくれなかった。　だから、今まで何で自分がベオークに来たのかが分からなかったのだ。
――そういう事だったのか。
それなら……。
では、カルラ様と結ばれる可能性も自分にはあったということ。
竜印など受けなくても自分は端から長命だったのだ。　カルラ様への想いを遂げる道がわたしにはあった。
自分がベオークの一族の一人だと言うことより何より、カルラと対等に愛し合える立場だったという事のほうがラドビアスを打ちのめす。
「おまえ、カルラが死ぬときに一緒に死にたいと言ったろ？　思わず笑いそうになったよ。そんな場合じゃなかったんだけど。おまえはカルラの竜印が消えても、わたしの龍印が消えても死にはしないのだから」
バサラが思い出したように笑うが、それもすぐに消える。
「サンテラ、わたしはね、おまえの事を憎んでいたんだよ。ずっと

ね」
　およそ、人間らしい強い感情など剥き出したことの無いバサラの告白に、ラドビアスは首にかかっている手を外そうとしていた自分の手を止める。
「ゆっくりカルラをわたしだけに意識を向けさせて、独り占めにする計画だったのに。一番の失敗はカルラの母親と寝た現場をカルラに見られた事だが。それもゆっくり癒してやろうと思ってたのに」
　そこでバサラの手に力が入る。
「おまえがカルラを。あいつを見ていた。いつも、いつも。気になって仕方なかった。殺しておけば良かったよ、最初に。もし、カルラがおまえを選んだらと思うとあいつの体の成熟など待っていられなかった。それで――大きな失敗をしてしまった」
　バサラの美しい顔が歪む。
「嫌がるカルラを自分の物に無理やりしてしまった。我慢ができなかった。おまえにも見せつけたかったのさ。カルラが自分の物だと。それでも不安になってあの後、すぐにおまえとインダラに龍印を刻印した。が、カルラには逆効果で。あいつは頑固者だからな。諦めて受け入れるかと思ったのに。読み間違えていた。カルラは、わたしを完全に拒否した」
　こんな弱音を吐くバサラを見たのは、初めてだった。
「こうなったら時間を空けるしかないと思って、ビカラの寝所に連れ込まれるカルラに経典の事を教えてやったんだ。おまえと逃げてもおまえはカルラに手を出せない。いい気味だと、すぐに迎えに行くつもりだった」
　それなのに――二回も迎えに、このわたしがじかに出向いたというのに。　カルラはわたしを……。
　あまりの感情の揺れに、一瞬手を緩めたのをラドビアスは見逃さない。　力を込めた右の拳がバサラの顎にとんで、バサラが声を上げて手を離す。
「あうっ！　何だ急に態度がでかくなったんじゃないのか、サンテ

ラ」
「そう、思ってもらっても構いません」
「ふーん、そうか。じゃあもう終わりにする。何もかも分かって辛い気持ちになったまま死んでくれ」
バサラは顎を擦りながら波上になった剣、フランベルジュを右手に握り直すと左手にダガーを持つ。
「あなたが命の恩人では無いのなら。母を殺したのなら、もう従う義理はありません」
起き上がったラドビアスは、言い放つと真っ直ぐに剣を構えながら走る。
再びラドビアスが突きこむ剣を下から弾いて、バサラがそのままラドビアスの間合いに入り、左の短剣で肩を突く。　しかし、ラドビアスは、自分の肩に刺さった剣を持つバサラの手を握りこんで自分側に引いた。　そして、体勢を崩されたバサラの右手に蹴りを見舞うと彼の手から長剣が飛んだ。

狡猾な笑顔

「カルラがいなくなって色んな女を試したが、やはりビカラみたいには子どもは――できなかった」
バサラは飛ばされた剣の行方を見ながら呟いて近づくと、ラドビアスの肩から短剣を引き抜く。
「せっかくおまえに取られる心配は無さそうだったのに。カルラときたら他の男に心を奪われてしまってさ。わたしもしつこいけど、あいつもなかなかだったな」
短剣を無造作に床に落として、ラドビアスを見上げたバサラ。
「どうぞ、わたしを殺したいだろ。殺れよ、サンテラ」
ほら、と言いながら目を閉じてバサラは両足を僅かに広げて立つ。
「おまえを騙して、しもべにしていたわたしを憎んでいるんだろう？　カルラはわたしが殺したようなものだからな。おまえの大切なものを二つとも奪ったわたしを殺したいはずだな。わたしは――もういいよ。どうでも。好きにしてさ、サンテラ」
「――バサラ」
「首を落とすんだ。他は、痛いだけでなかなか死にはしないからな」
そう言ってバサラは、自分の長い髪を纏めて首を晒す。
ラドビアスは、今までの激情が嘘のように静まっていく。　自分はどうしたいのか。　彼がわたしの兄弟だったとは。
酷い扱いも受けたが、幼い日の事を思い出すと楽しかった事しか覚えていない。
インダラと二人で受けた魔術も体術も、剣術も。
確かに楽しかったのだ。　兄弟が出来たみたいで。同じ歳ながら、バサラは優しくて頼りになる兄のようだった。　毎日がきらきらと輝いていたあの頃。
その労わりや、優しさは作られたものだった。　そうだとしても、彼にとっては幸せな期間だった。　バサラの全てが嘘だったとは思

えない。　それよりも……。
――自分のあまりにも強い自己愛の故は、ここにあったのだろうか。　ベオーク教皇一族は皆、身勝手な者が多い。　上辺はともかく、自分以外愛することが無いかのように。　いや、それでもカルラは違った。　ヴァイロンを愛し、クロードを愛しみ、そのクロードを守るために命を散らせた。
その彼を、いや、自分にとっては、カルラは初めから彼女。　カルラをいつだって自分は女性として見ていたのだ。　本当なら彼女の為に結界を守り、バサラたちの侵入を阻止して戦い、あの時死んだって良かったのだ。
ところが、自分はカルラを失いたくないばかりにバサラに加担して、結界の内に彼らを引き入れた――すべてが自分のため、だった。
この忌まわしい思考、行動が血ゆえなのだとしたら。　それをこそわたしは憎む。
「あなたは悲しい人だ」
ラドビアスの言葉にバサラの眉が上がる。
「悲しい？　何が」
「どう言おうと、あなたはカルラを愛していたんですよ。自分に向かない彼女の心に傷つき、子どものように動いていた。それを認めたくないだけ。あなたもわたしも同じだということ。何百年経とうと、彼女の心のいくらかにでも入り込むことが出来なかったということにおいてはあなたも悲しい人なんだ」
「悲しい……だと？」
ぽつりと漏らした言葉を置いてきぼりにして、バサラが落としていた短剣を素早く拾ってラドビアスの首に向けて大きく真横に振りぬく。　咄嗟に体を引いたラドビアスの首に赤い線が引かれる。
その後から滲んでいく。
「おまえは、それでわたしに情けでもかけているつもりか。そうやって甘いことばかり言っているから成長しないんだよ。父親が一緒だから少しは似てるかと思ったのに。我らはそんな感傷に浸って止

めを刺すのをためらったりはしない。カルラにしたってそうだったろう？　やっぱり半分はただの女の血だからな、中途半端なやつだ」
殺せ、と言っていた殊勝な態度を反転させて、バサラは飛ばされた長剣を掴んで十字に構える。　さっきの態度は時間稼ぎだったらしい。
「おまえの何でも分かってますって言うような態度には心底むかつくな、サンテラ」
「バサラ、わたしの名前は母親がつけてくれたラドビアスですよ」
「さま、はどうした？　はん、思い出させてやる。おまえの立場を」
バサラは長剣を斜めから大きく振り降ろすように斬りこむ。　足元で合わされるラドビアスの剣が大きな音を立ててがっちりと組んだのを見て、バサラが左の短剣を振り上げる事も無く、さきほどと同じ場所に突き立てる。
大きな声を上げて片手を離したラドビアスの剣を蹴り飛ばしたバサラが、左の剣で右手をさっと斜めに斬る。　飛び散った赤い鮮血がバサラにもかかる。
「サンテラ、これで印は組めないな」
ラドビアスが、左の拳を突き出したのをバサラは顔を少し振ってぎりぎりで交わす。　そして左の手首にも剣をすべらす。　さっきと同じように噴出す血で床が滑る。
「どうだ、さっきの態度を謝るのなら聞いてやってもいいけど。ただし、聞くだけだけどね」
顔を伺うようにしたバサラの腹にラドビアスの膝蹴りが入り、バサラが唸りながら後ろへ下がる。　それを追いかけるように足を踏み込んだラドビアスが、血が流れる右手でバサラの顎を肘撃ちした。
体制を崩したところに体当たりして壁にぶつける。
そのまま転がったバサラの腹に何発も鋭い蹴りを入れる。
本来ならここで剣を使いたいが、今自分は両手が使えない。
そこで、バサラが気を失うまで蹴りを入れようと振り出した足をバサラの手が捉えた。　すくうように払われてラドビアスは、どう

っと倒れる。
　その胸元に強烈な肘撃ちを受けて、ラドビアスの口から血が吐き出される。
「よくも好きにやってくれたな。まずは今の肘撃ち。それから何だっけ？」
　頭をしたたかに蹴られ、ラドビアスはつかの間意識をとばした。
　気がついたのはどのくらい後なのか。それとも一瞬だったのか。
　分からないままに目を開けると、バサラは長剣をラドビアスの喉元に突きつけていた。
「サンテラ、良いことを教えてやる。今日は大盤振る舞いだな」
　バサラはラドビアスの耳に付くほど唇を寄せる。
「クロードに封印されている経典は死なないと出せないんだ。知っていたのかな、サンテラ」
「他に手は無い？」
「そうだよ。わたしがどうしておまえなんかと今まで術を使わずに戦っていたと思うんだ」
　顎のところを青くしたバサラが、顔色が変わるラドビアスを見て笑う。
　――この人は、なんて狡猾なんだろう。　激情に捕らわれていると見せかけて、またしても裏があったとは。　しかし、早くバサラとの決着をつけなくてはクロードの命が危ない。
「時間かせぎ？　あなたがその気になったらすぐにでもわたしなど始末できるかと思っていましたが。それとも時間がかかっていたのは他にわけが……」
　挑発するラドビアスの言葉は、バサラが長剣を腹に突き刺した事で途切れる。
「おまえ、図に乗りすぎだよ」
　囁き声のようなハスキーで低い声。
「おまえにカルラを奪われた、わたしの気持ちを思い知らせたかったんだ。だから今まで手を抜いていたというのに。しかし、考えも

しない不慮の事故はつきもの……だよね」
綺麗に上がった唇。　目元は半月のように細められている。この場面でも彼は楽しんでいるのが分かる。

龍印を解す

「あなたはそんなにもカルラを愛していたのに。何で認めようとしないんですか」
ラドビアスの右頬に、バサラの拳がとぶ。
「必要だと言ったんだ。わたしの血を残すために。わたしが自分以外を愛するなんてことがあるわけがない」
「じゃあなぜ、あなたはハイラと寝てないんです？　血を残すだけなら、ハイラでもいいはずだ」
ラドビアスの左の頬に再度拳があたる。
「あんな化け物みたいなやつと寝るなんてできるか。わたしは醜い物は嫌いな性質なんだよ。自分に一番近かったカルラを、抱きたいと思ったとしてもおかしくはないだろう」
「ベオークにいた頃、わたしがカルラのことをいつも見ていたと気づくくらい、あなたもカルラを見ていたという事。そうでしょう？　誰にも渡したくない。自分だけのものにしたい、そんな感情を愛と呼ぶんですよ。あなたは、何百年も生きてきて、そんな事にも気付かなかったんですか」
「……おまえに何がわかる？　カルラをどんなに大事に思っていたかなんておまえには到底分からないんだよ」
バサラは、そう言って口をつぐむ。　それは、何もこれ以上言うことは無いという沈黙ではなく。　言うべき言葉が、見つからない。
そんなもどかしい沈黙。
腹からの出血を急いで術で塞ぐと、ラドビアスは立ち上がる。
二度も刺された肩と腹が激しく痛んで思わず、苦しそうな声が出る。
「サンテラ、ここにおいで」
うって変わった優しい物言いにラドビアスは、顔だけを向ける。
「おや、クロードを助けに行くんだろう？　だったら、わたしの龍印を解したほうが良いんじゃないか。この戦いは一旦棚上げにしと

いてやる」
「これを取る？」
そう、と答えながらバサラはラドビアスの背後に回る。
「服を脱げよ、サンテラ。刺したりしないから」
バサラの言葉にラドビアスは上着とシャツを脱ぐ。　現れたのは、左の肩甲骨の辺にある痣の様な物――黒い龍の文様。
『排脱、解脱、解烙、我の制約を解き無に帰す』
呪文と同時に突き入れられる右手。
熱い火かき棒で刺されたような感覚に、ラドビアスは歯を食いしばる。
バサラが握った手の中には蠢く小さな龍。
『滅せよ』
バサラが床に投げ捨てると、それは白い煙を残し消えていった。
「これで、おまえの実力が出せる。ただの人間になら力を与える龍印も、おまえには力を抑制させていたにすぎない。さあ、行けよ」
「こんな事をして、あなたは次に何を企んでいるんですか」
ラドビアスの言葉にバサラは唇をくっと引き上げた。
「教典を取り出して、クロードも救う。一つだけ手があるんだよ。聞きたいならクロードを無事に取り戻して来い」
「あなたの本意は？」
「おまえに教える義理はない」
ラドビアスの問いに今度こそ、バサラの口は堅く引き結ばれて再びラドビアスに対して開く事はなかった。
ラドビアスはバサラの前を横切り、長い廊下に出て行く。　それを薄く笑いながらバサラが見送った。
「愛だと？　わたしのカルラへの思いが？　もしそうだったとして、今更それを知ってどうなるというのだ。カルラは、もういない。が、おまえだけは許せないよ、サンテラ。昔の間違いを正してやる。おまえなど、すぐに殺しておけばよかったよ。これで、やつらに殺られるもよし、勝ったにせよ、その時は、今度こそわたしがおまえを

殺してやる。そしてクロードはわたしがいただく」
ラドビアスの後姿にバサラは、そうつぶやいた。
「インダラ、いるか」
「ここに」
壁の黒い染みが膨らんだと思ったらそこから人が現れる。
「話、聞いてた？」
「ええ、ついでにバサラさまがわたしがここに潜んでいるのを知っていてサンテラをすぐ側に蹴り飛ばしたことも知ってます」
インダラの言葉にバサラが声を上げて笑う。
「おまえ、わざとだと思ったの？　どんだけ意地悪いんだよ、おまえの中のわたしの設定は。まあいいや、ハイラをここに連れて来てよ。それとメキラをクロードとサンテラにぶつけろ。あいつらに始末させればこっちは楽になる」
「あなたがあくどい事なんてみんな知ってますよ。それにしても酷くやられましたね。あと一発でもサンテラが手を出したら言いつけに背いて飛び出すところでした。そんなご趣味があったんですか？」
気づかわしそうインダラが差し伸べた手がバサラの口の端をなぞり、呪が唱えられる。　触れた場所から傷が消えていく。
「インダラ、もういい。確かにじんじん痺れる感じも悪くない気がしてきたよ」
「まったく」インダラが大きく息を吐いた。
「では行って参ります。帰ってくるまで大人しくしといてくださいよ、バサラさま」
浅い礼の後、インダラの姿は壁に吸い込まれて消えた。
「メイファ、お待たせ」
バサラの声に応えて窓からのっそりと白い豹が部屋に入って来た。
「おまえに頼みたいことがある」
頭をバサラの脇の下に潜り込ませて雪豹はごろごろと喉を鳴らす。
「その前にさっきのご褒美をください」
「仕方無いなあ、時間も無いのに」

薄く笑ってバサラが雪豹の顎を持つと雪豹は嬉しそうに「にゃあ」と猫のように鳴いて、その姿を変えた。
バサラの膝にいるのは若い女だった。　雪のように白い髪がさらりと背中に流れている。
「ねえ……バサラさま」
「時間を見計らってハイラをここに連れてこい。魔法陣を描いておく」
不満げなメイファに苦笑いを零してバサラが濃厚な口付けを落としてやる。　その行為の後にメイファがバサラの膝から名残惜しげに降りる。
「行ってまいります」

鍵の秘密

朝陽宮の最奥。

普通の建物の二階分はある高い扉。　その前にクロードは立っていた。　今までの厳重な警備とはうって変わってその扉の前には誰の姿も無い。

その事がかえって恐ろしさを感じる。　しんとした広い廊下に自分だけがいる心細さ。

しかし、このままここに突っ立っているわけにもいかない。

「よし、行こう！」

自分に大声で気合を入れると、クロードは扉に手をかけた。

分厚く大きな扉は、あっさりとクロードの手がかかると自然に開いたかのように音も無く開く。　そしてその先――。

三方をおびただしい鏡で装飾された広間。　そこは、今まで見てきた東方の面影はまったくなかった。　クロードにお馴染みの大陸の西の意匠。

このベオークの教皇の出目が西方だということの証だろうか。

突き当たりの高い壇上にある大きな椅子。　作り付けのその椅子は凝った細工が施してあり、背もたれは天井まで続いている。　五本指の竜が巻きつきながら天に昇っていく様を彫ってある――その椅子にハオタイ風の衣装を着てゆったりと膝を組んだ男が座っていた。

痩せて頬骨が張った顔は誰かに似ている。

誰に――そう、頭に浮かんだ顔にクロードは驚いて首を振る。

そんなばかなことがあるわけない。　もっと近くに行けば違うと分かるはず。

クロードは小走りでまっすぐ正面に向かう。

「よく来たなクロード。私の物を返しに来てくれたのだろう？　長い道のり大儀だったな」

遥かに遠いのに、すぐ側で話すように良く通る声。　こちらに顔を向けている男。
「あなたがベオーク自治国の教皇、ビカラ様ですか」
「そうだよ、君はカルラが持ち出した経典を返しに来た、レイモンドール国主の弟。クロードだろう。待っていたよ」
にこにこ笑顔向けるビカラは、ひらひらと手を振ってクロードを手招く。
「あなたは、ラドビアスと何か関わりがあるんですか」
「ラドビアス……ああ、サンテラのことか」
ビカラはゆったりと笑う。　その輪郭、頬骨の張った細面の顔は、確かにクロードの知っている男と同質のものだ。
「サンテラは、私の息子だよ、クロード」
「息子？」
ラドビアスがサンテラなんだから、人違いではないだろうけど。
この人は何を言ってるんだろうと、クロードは足を止めて壇上の男を見つめる。
「あの子は良い子だな。こうやって私のために経典を持って帰ってくれたのだから」
「言っていることがよく分からないけど。経典を取り出して欲しいのは本当です。出してくれますか」
「いいよ」
その言葉が終わらないうちに、気づくとビカラはクロードの真横にいた。
「……いつの間に」
クロードの腕を取ったビカラは、またしても優しく微笑む。
「おまえもいい子だな。いい経典のしまい方をカルラもしたものだ。じゃあ、取り出すよ」
ビカラが腕を強く引いてクロードを引き倒す。　クロードは驚いて逃れようと体をおこそうとするが、ビカラが馬乗りになっているので身動きできない。

「経典を取り出すには鍵がいる。クロード、鍵を」
「鍵……あなたは、鍵に触れることが出来るのですか？」
クロードの言葉に目の前の男の目がいっそう細くなる。
「おや、良く知っているね。そうそう、鍵は血に反応する。だが、私は護法神を使役しているのだよ。教えてあげるよ、クロード」
ビカラは言い含めるように言いながらクロードの頬に触れた。
「私は、経典の護法神と契約するときに私の血に反応する、ではなく、アニラの血に反応するようにしておいたんだよ」
「え？」
そうだったのか？　それなら、クビラもハイラもバサラもユリウスにも害悪だったはずだ。　皆、アニラの血を継いでいるのだから。
「だから、私とサンテラには護法神は脅威ではないのだよ」
なるほど、ラドビアスはアニラとの子どもでは無い。
「初めから分かっていたというのですか」
「そう。私の後はサンテラに任せようと思っているんだよ。サンテラは私の希望だ。そうだろう？　絶滅しかかっている私たちの種に、差し伸べられた最後の光。新しい血を取り入れる事に成功した、可愛い私の息子だ」
「あんたって人は。まったく本当に自分勝手な奴だ。ラドビアス以外のバサラやユリウスのことなんかなんとも思ってなかったのか」
「カルラは女になるなら必要だったよ、確かに。バサラはまあ、使える男だからな。だから、どうだというのだ？　クロード、君が家族に幻想を抱くなんて不思議だよ」
レイモンドールと、ここベオークはこんなにも遠く離れているのに。　この男は何を知っているのか。　首を傾げてのぞきこむように見下ろしてくるビカラの言葉にクロードは驚く。
「それはどういう意味だ？」
「どういう？　おまえは肉親の愛など今まで感じたことがあったのか。カルラのせいで産まれてすぐに親とは引き離されていたのでは無かったかな」

ビカラは、思い出させるようにわざとゆっくりと声に出す。
「おまえの母親は、おまえに会いたかった。そう言ってくれたのかい、クロード」
そんな展開になったはずはないとわかっているくせに。　そうだ、この男にはわかっているのだ。　わかっていて相手の心の傷を広げて楽しんでいる。　やはり、バサラの父ということか。　表に出す、出さないは違っていても本性は隠せない。
「護法神を。クロード」
こんなに何でもわかっているはずのビカラがなぜ、クロードの右手の中指に嵌めている指輪に気づかないのか。　クロードは不審に思って黙りこむ。
「クロード、早くするのだ」
さきほどまでの余裕の顔に変化が起きて、ビカラの目が細くなる。
「クロード？」
返事を返さないクロードの視線が自らの胸元を一瞬よぎる。　それを目ざとく確認して、ビカラはニタリと口の端を上げた。
「ふん、私が分からないとでも思っているのか？　愚か者め」
ビカラの手がクロードの胸元に伸びると下げていたペンダントを掴んで引きちぎるように奪い取った。

朝陽宮

ベオーク自治国の中心は広大な敷地に広がる朝陽宮だ。　ベオークの魔導師たちは皆、何らかの武術に長けている者が多い。　魔術による結界と武力とふんだんな資金。　そしてハオタイ皇国という巨大な傀儡の力。　それらによってこの国は守られてきた。

それが揺らいでいるのは外圧によるものでは無い。　この国を、いやこの世界を支配下に置いていた一族の衰退がその理由だった。

彼らは成人するまで雌雄の別は無く、非常に長命な一族である。

だが、血族間で交配を繰り返してきたためにある弊害が出たのだ。

彼らは一族以外と関係を持っても子孫を残せない。　そして一族間で交わったとしても妊娠しにくい体になっていた。　この五百年の間、一人の子どもも生まれていない。

種の絶滅はある一点を過ぎると加速度的に進んでいく。　それはもう後戻りできないところまできていたのに。

その中に居る者だけが気付いていない。

朝陽宮の最奥。

普通の建物の二階分はある高い扉。　その前にクロードは立っていた。　今までの厳重な警備とはうって変わってその扉の前には誰の姿も無い。　手にも剣も血がべったりとついていた。

その事がかえって恐ろしさを感じる。　しんとした広い廊下に自分だけがいる心細さ。

しかし、このままここに突っ立っているわけにもいかない。

「よし、行こう！」

自分に大声で気合を入れると、クロードは扉に手をかけた。

分厚く大きな扉は、あっさりとクロードの手がかかると自然に開いたかのように音も無く開く。　そしてその先――。

三方をおびただしい鏡で装飾された広間。　そこは、今まで見て

きた東方の面影はまったくなかった。　クロードにも馴染みの大陸の西の意匠。
このベオークの教皇の出目が西方だということの証だろうか。
突き当たりの高い壇上にある大きな椅子。　作り付けのその椅子は凝った細工が施してあり、背もたれは天井まで続いている。　五本指の竜が巻きつきながら天に昇っていく様を彫ってある――その椅子にハオタイ風の衣装を着てゆったりと膝を組んだ男が座っていた。
痩せて頬骨が張った顔は誰かに似ている。
誰に――そう、頭に浮かんだ顔にクロードは驚いて首を振る。
そんなばかなことがあるわけない。　もっと近くに行けば違うと分かるはず。
クロードは小走りでまっすぐ正面に向かう。
「よく来たなクロード。私の物を返しに来てくれたのだろう？　長い道のり大儀だったな」
遥かに遠いのに、すぐ側で話すように良く通る声。　こちらに顔を向けている男。
「あなたがベオーク自治国の教皇、ビカラ様ですか」
「そうだよ、君はカルラが持ち出した経典を返しに来たレイモンドール国主の弟、クロードだろう。待っていたよ」
にこにこ笑顔向けるビカラは、ひらひらと手を振ってクロードを手招く。
「あなたは、ラドビアスと何か関わりがあるんですか」
「ラドビアス……ああ、サンテラのことか」
ビカラはゆったりと笑う。　その輪郭。頬骨の張った細面の顔は、確かにクロードの知っている男と同質のものだ。
「サンテラは、私の息子だよ。クロード」
「息子？」
ラドビアスがサンテラなんだから、人違いではないだろうけど。
この人は何を言ってるんだろうとクロードは、足を止めて壇上の

男を見つめる。
「あの子は良い子だな。こうやって私のために経典を持って帰ってくれたのだから」
「言っていることがよく分からないけど。経典を取り出して欲しいのは本当です。出してくれますか」
「いいよ」
その言葉が終わらないうちに、気づくとビカラはクロードの真横にいた。
「……いつの間に」
クロードの腕を取ったビカラは、またしても優しく微笑む。
「おまえもいい子だな。いい経典のしまい方をカルラもしたものだ。じゃあ、取り出すよ」
ビカラが腕を強く引いてクロードを引き倒す。　クロードは驚いて逃れようと体をおこそうとするが、ビカラが馬乗りになっているので身動きできない。
「経典を取り出すには鍵がいる。クロード、鍵を」
「鍵……あなたは、鍵に触れることが出来るのですか？」
クロードの言葉に、目の前の男の目がいっそう細くなる。
「おや、良く知っているね。そうそう、鍵は血に反応する。だが、私は護法神を使役しているのだよ。教えてあげるよ、クロード」
ビカラは言い含めるように言いながらクロードの頬に触れた。
「私は、経典の護法神と契約するときに私の血に反応する、ではなく、アニラの血に反応するようにしておいたんだよ」
「え？」
そうだったのか？　それなら、クビラもハイラも。　そして、バサラもユリウスにも害悪だったはずだ。　皆、アニラの血を継いでいるのだから。
「だから、私とサンテラには護法神は脅威ではないのだよ」
なるほどラドビアスはアニラとの子どもでは無い。
「初めから分かっていたというのですか」

「そう。私の後はサンテラに任せようと思っているんだよ。サンテラは私の希望だ。そうだろう？　絶滅しかかっている私たちの種に、差し伸べられた最後の光。新しい血を取り入れる事に成功した、可愛い私の息子だ」
「あんたって人は。まったく本当に自分勝手な奴だ。ラドビアス以外のバサラやユリウスのことなんかなんとも思ってなかったのか」
「カルラは、女になるなら必要だったよ、確かに。バサラはまあ、使える男だからな。だから、どうだというのだ？　クロード、君が家族に幻想を抱くなんて不思議だよ」
　レイモンドールと、ここベオークはこんなにも遠く離れているのに。　この男は何を知っているのか。　首を傾げてのぞきこむように見下ろしてくるビカラの言葉にクロードは驚く。
「それはどういう意味だ？」
「どういう？　おまえは肉親の愛など今まで感じたことがあったのか。カルラのせいで産まれてすぐに親とは引き離されていたのでは無かったかな」
　ビカラは、思い出させるようにわざとゆっくりと声に出す。
「おまえの母親は、おまえに会いたかった。そう言ってくれたのかい、クロード」
　そんな展開になったはずはないとわかっているくせに。　そうだ、この男にはわかっているのだ。　わかっていて相手の心の傷を広げて楽しんでいる。　やはり、バサラの父ということか。　表に出す、出さないは違っていても本性は隠せない。
「護法神を。クロード」
　こんなに何でもわかっているはずのビカラがなぜ、クロードの右手の中指に嵌めている指輪に気づかないのか。　クロードは不審に思って黙りこむ。
「クロード、早くするのだ」
　さきほどまでの余裕の顔に変化が起きて、ビカラの目が細くなる。

『カノ　イサ　ハガラズ　テイワズ』

「クロード？」
返事を返さないクロードの視線が自らの胸元を一瞬よぎる。　それを目ざとく確認してビカラはニタリと口の端を上げた。
「ふん、私が分からないとでも思っているのか？　愚か者め」
ビカラの手がクロードの胸元に伸び、下げていたペンダントを掴むと引きちぎるように奪い取った。
「アウントゥエン！　サウンティトゥーダ！」
クロードの呼びかけに吼え声で応えて二頭の魔獣が姿を現す。
間に合ったかとクロードの顔に笑みが広がる。　――まだまだ天はおれを使う気らしい。
「ばかなことを。経典の持ち主である私に魔獣の一頭や二頭ぶつけてどうなるというのか」
ビカラが呆れた顔を見せる。
「本当にあんたがビカラならこんなことは無駄だろうけどね」
「何？」
クロードは、ビカラの隙をついてビカラの下から這い出ると、間合いを取って後ろに下がる。　そこへ、二頭の魔獣が彼を守るように左右についた。
「あんたはビカラじゃない。その胡散臭い擬態を解いて正体を見せたらどうだ」
クロードの言葉にビカラの微笑は消えて――。
「私がビカラでは無いと？　おまえは何を言っている？」
ビカラの眉が上がる。それをクロードは見ながらビカラの周りを歩く。
「もしかして気がついていない？」
見た目はビカラなのだろう。　初めて見るクロードにはそれが本人かどうかなど見た目では分らない。　だが、ここにいる本人は自

分をビカラだと疑ってはいない。
――周りの人間もまたそうなのだとしたら？　初めて会ったクロードに分ることを誰もが気付かない。
裏に大きな誰かの作為を感じる。　ビカラ本人が影武者を立てているのか、否か。　影武者本人でさえ、本人として暮らしていたほどの術と長い年月。　それは、恐ろしい事実を考えざるを得ない。
ビカラはもうここにいないのか。
もしそうならおれがここに来た意味は消えてなくなる。
それを確かめなくてはならない。　こいつが何者なのかを確かめなければ。
「鍵本来の持ち主であるビカラが鍵を見つけられないはずは無いと思うけどね。それは、ユリウス、いやカルラがおれにくれたペンダントだ。鍵じゃない。そんな事も分らないなんておかしいだろ？」
「これが鍵でない？」
呆然とした面持ちで奪いとったペンダントを見つめたビカラは暫く考えるように見ていたが、やがてゆっくりと顔を上げる。
「なんでおまえがそんなバカな事を言い出すのかが分らんが鍵の場所などおまえの体に聞けば分る事だ。不遜な態度を後悔させてやるぞ、クロード」
「できるならな、あんたは嘘もんだっ。そっちこそ経典と契約しているおれを小者だと見誤ったと後悔させてやる」
クロードが大きく印を切りながら解呪のレーン文字を宙に描く。
すると、ビカラはがくりと膝をついた。
それは――長い長い呪縛が解けた瞬間でもあった。
クロードが使えるくらいの魔術で解ける程度。　それは、初めから解されることをも意識していたのか？
ビカラの体の線が曖昧になってあらゆる色が交じり合う。　一旦解かれた組織が新たに構成されたみたいに形作っていく。　擬態が解けた後に現れたのはハオ族の男だった。
バサラの僕のインダラと違うのはその筋肉質の大柄な体だったり、

三十歳中ごろに見える外見だ。　細身のインダラとかとは明らかに違う兵士のような体。
　レイモンドールの魔道師らの華奢な様子とはまったく違う。　ベオーク自治国の魔道師には体術、剣術が義務付けられているのだ。
　インダラだとしても細いだけの男ではなかった。
「おまえは？」
「私は……」
　膝をついた格好のまま両手で顔を隠すようにしながら、ハオ族の男は古い記憶を呼び出そうとしていた。
「私は――誰だ。ビカラではないとすれば……。そうだ、術をかけられたのか。五百年前に。わたしは――」
　男の顔から手が外されて、彼は立ち上がるとクロードを見下ろした。　さっきまでのおろおろした様子はもう微塵も無い。
「私はビカラ様の僕、マコラだ。そして主の代わりにおまえから経典を取り返す」
「おまえがビカラじゃないのならおまえなどにおれは用は無い。呪ボケしてるんじゃないの？　経典はビカラしか取り出せない」
　それともこいつが操られていただけの小物だったのか。　そう考えればさっきの術の謎も解ける気がクロードはする。
　操っていたのは、誰だ？
「おまえの本当の主人は一体誰だ、マコラ？」
「ビカラ様の御名を呼び捨てにするなど、恐れを知らぬがきだな」
　マコラという男は、憎憎しげに顔をしかめると腰に手を伸ばす。
　クロードはその手がやや反りの入った片刃の長剣を抜こうとする男に向かって呪を飛ばす。
『カノ　イサ　ハガラズ　テイワズ』
「おのれ、レーン文字かっ」
　マコラの右腕が腰のところで凍りつくのを確認して、クロードは指輪に命じる。
「変じよ」

マコラの喉元に突き付けられる剣の先が肌に食い込む。
「ビカラはどこにいるのか言えっ」
「ばかな。わたしはビカラさまの僕だぞ。主に不利益なことをする訳がない。刺すのなら刺せばいい。だが、何も言わない」
「そうだったな。じゃあ術を使わせてもらう」
クロードの口から流れるレーン文字が形をとって宙に浮かぶ。その文字は、微細な虫のように蠢いてマコラの体を取り巻いた。
「うがっ、や、止めろ」
それは、抗うマコラの口の中にも流れ込む。
「レーン文字を知らないなら、教えてあげるよ。藩字の呪文と同じくらい使い勝手もいいってことをさ」
空にレーン文字を描きながらそれをゆっくり読んでいくと、マコラを取り巻いていた微細な文字たちが発光しながらマコラの体に移っていく。 体に入り込んだ文字までが掌や口の中まで浮きあがっている。
「ビカラはどこだ」
胸ぐらを掴んで聞いたがマコラはふるふると首を振った。
――質問を間違えたか。 クロードは次にぶつける問いを考える。知っていて答えないことなどできはしない。 だとしたら、本当にこの男はビカラの居場所を知らないのだ。
「おまえの本当の主人は誰だ?」
マコラはびくびくと体を震わせて抗う様子を見せるが、術にかかっているために口を噤んでおくことができない。
「わたしの主人はバサラさまだ」
「バサラ……」

メキラとハイラ

「メキラさま、バサラさまがあなたさまのご助力を賜りたいと仰っております。裏切り者が出たもようで」
インダラが頭を軽く下げる。　目の前にいる異様な姿は何百年経っても見慣れることは無い。　目が三つ、鼻が三つ、口も三つ。どこまでも三つが好きなのか、腕も三本で足も三本。　他にも三つのところがあるのかは知らないが、とにかく近親婚の弊害が外見に現われているいい例だろう。
その障害でさえ神だと言われてる身では神々しいと崇拝される。ただの人であれば障害者と見られ、神ならばその姿は畏敬の対象になる――神が神であるために人はある。　インダラは尊大に頷くメキラを眺めながらそう思った。
「バサラめ、いつも私に偉そうに指図するくせに。やっと私の強さに気づいたんだな」
満足そうにメキラは笑った。
この国に何百年も生まれなかった子どもを自分が授かった。　新しい時代を作る子どもの親になった俺がこの世界を牛耳ることはもう確定的なことだ。
一番年下のバサラに大きな顔をされることにはうんざりだった。ここで裏切り者を始末してやって大きな貸しを作ってやるのも悪くないとメキラは思う。
「どこにいるのだ、その裏切り者は」
「こちらです、メキラさま」
龍印を解したサンテラの力がいかほどのものか、インダラにしても大いに興味がある。　主を害することがあれば、自分も戦う必要があるのだ。
ゆっくりみせてもらおう。　きっと主からひつこく聞かれるだろうしとインダラは思った。

床を這ってこちらに向かってくる黒い蛇にインダラが手を伸ばすと蛇はインダラの手を伝いながら耳元まで登っていく。
「裏切り者はあちらのようです」
そう言って蛇の頭をなでる。　するとそれは紙くずの燃え滓ように消えた。
「おまえの術は気味悪いものばかりだな」
メキラの言葉にインダラは「申し訳ありません」と笑いながら言った。
「どうした？」
「いえ、何も」
あなたは存在が気味悪いんですよと小さく言ったのは聞こえて無かったらしい。

「ハイラさま、よろしいですか」
一方、メイファが入った部屋の大きな卓について大きな肉をかぶりついているのは一族で唯一の女性、ハイラだった。
首が太く筋肉が盛り上がっている逞しい背中。　剥き出しになっている腕もごつくて一般の女性の足くらいある。
ハオタイの女性用の服を着ているし、彼女は女性であることは間違いない。　それでも屈強な兵士が余興で女装したように見える姿にメイファは思わず舌を出した。
だが、どれをとっても鍛え抜かれた剣闘士のようであるのに突き出した腹がそれを裏切っている。
彼女は妊婦なのだ。　五百年前にもう一人の女性だったバサラと

カルラの母親アニラが亡くなり、女性になるはずだったカルラが死んだ。
残された女性がハイラだけのために、他の者たちもなかなか彼女と子どもをつくる気にならなかった。　バサラなどは見るのも嫌だと言っていたぐらいで。
そこに今回メキラがその重い腰を上げ、その挑戦が功を奏し妊娠しにくいはずの彼らに子どもが授かったのだ。
いつでも挑戦する者に天は優しいということか。
「主が一族のために母になられるハイラさまに贈り物を差し上げたいと申しております」
「バサラが？」
脂ぎった手の指をねぶりながらハイラがにまりと笑った。　自分を顧みずというか、ハイラは美しいものを好む。　本当ならバサラとの間に子が欲しかったのだが、バサラときたらなんだかんだと逃げ回って結局一回も彼女を寝所に呼ぶことは無かった。
しかし、ベオークの一族は誰もが自己愛が強い。　自分の血を残したいと切望しているはず。　同族としか子孫を残せない質の一族である中、今はハイラしか子どもを孕むことはできない。　やっとバサラもそれに気づいて秋波を送ってきたのかもしれないとハイラは思う。
子どもはできないと半分あきらめていたところにハイラの妊娠を知ったのだとしたら。
――妊娠し易いということならバサラは自分を寝所に呼ぶかもしれない。　仲直りをしようと声をかけてきたのならここは今までの遺恨を忘れてやる度量を見せてやってもいい。
「バサラが是非にというなら仕方ないわ。案内しなさいな」
卓に敷いていた凝った刺繍を施した布で手を拭うとハイラは立ち上がり、控えていた主人にそっくりな大柄なしもべが扉を開く。
「ありがたく存じ上げます、ハイラさま」
浅く頭を下げるとメイファは小さく呟く。

「ったく気持ち悪い女だぜ、あれでバサラさまと寝ようなんてお笑いだ」
「何か言った？」
「いいえ」とメイファはふわりと笑う。　ハイラだけを部屋に入れたところでこのしもべは外で食い殺してやるとしもべを目だけで追う。
肉は固そうだし、筋も多そうだがこの巨躯だ。　食べではあるだろう。　いや、内臓だけにしとく方がいいかもしれない。　血の気が多そうで喉が鳴るとメイファは舌舐めずりをした。
産み月が近づいてハイラの食欲はますます旺盛でそのお腹には何人入っているのかと揶揄したくなるほど大きくなっていた。
「贈り物って何かしら」
「ハイラさまがお好きなものだと主は言っておられましたよ」
メイファの返事にハイラの口が興奮でまくれあがる。
「子どもね、ああ……きっとそうだわ」
自分がもうすぐ親になるというのに、この女は人の子どもを食べようと言うのだ。　魔獣より、獣らしいとメイファは声を出さずに笑った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0629h/

レイモンドール綺譚外伝（終成の章）

2011年3月19日21時56分発行